

八幡原遺跡

(一)下沢渡原町線(原町Ⅱ期工区)単独道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2024

群馬県中之条土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

八幡原遺跡

(一)下沢渡原町線(原町Ⅱ期工区)単独道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2024

群馬県中之条土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

一般県道下沢渡原町線は、群馬県吾妻郡東吾妻町原町と吾妻郡中之条町下沢渡を結ぶ幹線道路です。高速交通網へのアクセス性の低さを改善し、地域の発展と利便性の向上を図るには早急な道路拡幅改良が望まれているため、整備事業が実施されることになりました。

改良工事に先立ち発掘調査実施になりました吾妻郡東吾妻町原町は、吾妻川と四万川によって形成された河岸段丘面上に位置します。町内には、弥生時代中期の指標土器が出土した岩櫃山鷹ノ巣遺跡をはじめ、中世に築かれ戦国時代の真田氏の拠点として有名な岩櫃城などがあり、古くから歴史的に重要な地域として知られています。

本書で報告します八幡原遺跡は、令和3年度から5年度にかけて本事業に伴い公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施した遺跡です。発掘調査では、弥生時代の土坑や古墳時代の竪穴建物が確認され、当時の集落の一端が明らかになりました。

発掘調査から報告書刊行に至るまでには、群馬県中之条土木事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、東吾妻町教育委員会をはじめ、関係機関および地元関係者の皆様には多大なるご指導とご協力を賜りました。

本報告書の上梓にあたり、関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、本書が東吾妻町原町地域における歴史の解明に広く役立てられますことを念じて、序といたします。

令和6年11月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 向田忠正

例 言

- 1 本書は、(一)下沢渡原町線(原町Ⅱ期工区)単独道路改築事業に伴う八幡原(やわたばら)遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 所在地 群馬県吾妻郡東吾妻町大字原町2927-12、2930-1、2931-1、2933-6、2933-9、2954-2、2955-1、2961-9、2962-6、2965-5
- 3 事業主体 群馬県中之条土木事務所
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 発掘調査期間および体制は以下の通りである。

令和3年度

事業名 令和3年度(一)下沢渡原町線道路改良工事
履行期間 令和3年6月1日～令和3年9月30日
調査期間 令和3年7月1日～令和3年7月31日
調査担当 本田寛之(主任調査研究員)
調査面積 351.70㎡
遺跡掘削請負工事 有限会社 高澤考古学研究所
遺構地上測量 株式会社 測研
出土炭化物の樹種同定 パリノ・サーヴェイ株式会社

令和4年度

事業名 令和4年度(一)下沢渡原町線社会資本総合整備(活力・一般)事業
履行期間 令和4年7月1日～令和4年10月31日
調査期間 令和4年8月1日～令和4年8月31日
調査担当 多田宏太(専門員)
調査面積 489.23㎡
遺跡掘削請負工事 株式会社 測研
遺構地上測量 株式会社 測研

令和5年度

事業名 令和4年度(一)下沢渡原町線(原町工区Ⅱ期)社会資本総合整備(活力・一般・補正)(5か年加速化)事業
履行期間 令和5年5月1日～令和5年8月31日
調査期間 令和5年6月1日～令和5年6月30日
調査担当 飯田浩光(専門員(副主幹))
調査面積 537.38㎡
遺跡掘削請負工事 株式会社 測研
遺構地上測量 株式会社 測研

- 6 整理事業期間および体制は以下の通りである。

事業名 令和6年度(一)下沢渡原町線(原町Ⅱ期工区)単独道路改築事業に伴う埋蔵文化財の整理事業
履行期間 令和6年4月1日～令和6年11月30日

整理期間 令和6年4月1日～令和6年9月30日

整理担当 齊田智彦(主任調査研究員)

遺物実測・観察表 石器 関口博幸(資料1課長(総括)) 縄文・弥生土器 鈴木佑太郎(専門員)

土師器・須恵器 多田宏太(専門員) 神谷佳明(専門調査役)

遺物写真撮影 石器 関口博幸 その他 齊田智彦

デジタル編集・本文執筆 齊田智彦

- 7 発掘調査諸資料および出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 8 発掘調査および整理事業・本報告書の作成には下記の機関よりご指導・ご教示を頂いた。
群馬県地域創生部文化財保護課、吾妻郡東吾妻町教育委員会

凡 例

- 1 報告書に用いた座標・方位は、すべて平面直角座標IX系(測地成果2011)を使用した。北方位はすべて座標北で、真北方向角は西偏7°40'である。
- 2 遺構・遺物の縮尺は、原則として以下のとおりとし、それぞれスケールを明示した。
遺構 竪穴建物 1:60、1:30 土坑・ピット 1:40 溝 1:40
遺物 土器 1:3 石器 1:1、1:2、1:3、1:4
- 3 遺構の主軸方向・走向を示すため、座標北を基準として東に傾いた場合はN-○°-E、西に傾いた場合はN-○°-Wというように表記した。遺構・遺物の計測値で、全体を計測できないものについては、現存の値を記載し()で表した。
- 4 遺物番号は出土遺構ごとの連番で、番号は本文・挿図・表・写真図版ともに一致する。
- 5 本書で使用したテフラの呼称は以下の通りである。
浅間粕川テフラ As-Kk (大治3年、1128年) 浅間Bテフラ As-B (天仁元年、1108年)
- 6 土層や土器の色調観察は、原則として農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。
- 7 本書で使用した地図は以下の通りである。
国土地理院発行 20万分の1地勢図「宇都宮」・平成23年「長野」平成24年 5万分の1地形図「中之条」平成10年
2万5千分の1地形図「中之条」「群馬原町」平成30年
吾妻郡都市計画図 昭和51年
中之条町都市計画図 昭和55年
- 8 本書で使用したトーン等は以下の通りである。

遺物図 赤色塗彩  吸炭  被熱  磨耗痕  敲打痕 

遺構図 焼土  炭化材  硬化面  攪乱 

目 次

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

写真目次

第1章 調査の経過と方法

- 第1節 発掘調査に至る経緯…………… 1
- 第2節 発掘調査の方法…………… 3
- 第3節 発掘調査の経過…………… 4
- 第4節 整理作業の経過…………… 4

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

- 第1節 遺跡の地形と立地…………… 5
- 第2節 周辺遺跡の分布…………… 6
- 第3節 基本土層…………… 11

第3章 八幡原遺跡の遺構と遺物

- 第1節 調査の概要…………… 12
- 第2節 検出された遺構と遺物…………… 12
 - 第1項 旧石器時代の調査
 - 第2項 縄文時代の遺構と遺物
 - (1)土坑…………… 12
 - (2)ピット…………… 17
 - (3)溝…………… 18
 - 第3項 弥生時代の遺構と遺物
 - (1)土坑…………… 19
 - (2)ピット…………… 23
 - 第4項 古墳時代の遺構と遺物
 - (1)竪穴建物…………… 24
 - (2)ピット…………… 40

第5項 古代以降の遺構と遺物

- (1)土坑…………… 41
- (2)ピット…………… 42
- (3)溝…………… 43

第6項 遺構外出土遺物…………… 44

遺物観察表…………… 47

第4章 自然科学分析

- 第1節 分析の目的…………… 54
- 第2節 八幡原遺跡出土炭化物の樹種同定…………… 54

第5章 総括

- 第1節 調査の成果…………… 57
- 第2節 2号竪穴建物出土炭化材…………… 57

写真図版

抄録

挿図目次

第1図	八幡原遺跡と群馬県の地勢	1	第24図	2号竪穴建物 掘方、1号炉・2号炉と出土遺物	28
第2図	八幡遺跡の位置	2	第25図	3号竪穴建物	29
第3図	八幡原遺跡発掘調査対象位置	2	第26図	3号竪穴建物と出土遺物	30
第4図	八幡原遺跡調査年度と発掘区	3	第27図	4号竪穴建物と出土遺物	31
第5図	遺跡周辺の陰影図	5	第28図	5号竪穴建物	32
第6図	遺跡周辺の河岸段丘面	6	第29図	5号竪穴建物 1号炉と出土遺物	33
第7図	周辺の遺跡	8	第30図	6号竪穴建物	34
第8図	八幡原遺跡基本土層と確認位置図	11	第31図	6号竪穴建物出土遺物	35
第9図	八幡原遺跡全体図と旧石器トレンチ及び各調査区の土層断面図	13	第32図	7号竪穴建物	36
第10図	八幡原遺跡4区縄文時代の遺構全体図、1号土坑～3号土坑	15	第33図	7号竪穴建物出土遺物	37
第11図	14号土坑、16号土坑、18号土坑	16	第34図	8号竪穴建物	38
第12図	19号土坑、21号土坑、7号ピット、9号ピット、10号ピット	17	第35図	8号竪穴建物出土遺物	39
第13図	2号溝	18	第36図	5号ピット、6号ピット	40
第14図	八幡原遺跡4区弥生時代の遺構全体図	19	第37図	4号土坑、6号土坑、7号土坑	41
第15図	5号土坑、8号土坑、9号土坑と出土遺物	20	第38図	1号ピット～4号ピット	42
第16図	10号土坑、11号土坑と出土遺物	21	第39図	1号溝	43
第17図	12号土坑、13号土坑、15号土坑と出土遺物	22	第40図	遺構外出土遺物(1)	44
第18図	17号土坑、20号土坑と出土遺物	23	第41図	遺構外出土遺物(2)	45
第19図	8号ピット	23	第42図	遺構外出土遺物(3)	46
第20図	八幡原遺跡1区古墳時代以降の遺構全体図	24	第43図	群馬県の植生(環境庁1987『植生調査報告書』図1を再トレースして使用)	58
第21図	八幡原遺跡2区・3区古墳時代以降の遺構全体図	25	第44図	群馬県焼失建物出土の炭化樹種上位10種	59
第22図	1号竪穴建物と出土遺物	26	第45図	焼失建物出土樹種(縄文から奈良・平安時代)	60
第23図	2号竪穴建物	27	第46図	焼失建物出土樹種(標高別)	60
			第47図	2号竪穴建物炭化材出土状況	61

表目次

第1表	八幡原遺跡の周辺遺跡	9	第7表	樹種同定結果	54
第2表	出土遺物観察表	47	第8表	竪穴建物の時期	57
第3表	石器一覧表	52	第9表	竪穴建物計測表	63
第4表	石器集計表	53	第10表	土坑計測表	63
第5表	遺構別石器集計表	53	第11表	ピット計測表	63
第6表	器種別石材別石器集計表	53	第12表	溝計測表	63

写真目次

P.L. 1	1	八幡原遺跡 1区西側全景(南東より)	4	19号土坑全景(南より)	
	2	八幡原遺跡 1区東側全景(北西より)	5	21号土坑土層断面(南より)	
P.L. 2	1	八幡原遺跡 2区全景(南東より)	6	21号土坑全景(南東より)	
	2	八幡原遺跡 3区全景(北西より)	7	7号ピット土層断面(南西より)	
P.L. 3	1	八幡原遺跡 4区東側全景(北西より)	8	7号ピット全景(南西より)	
	2	八幡原遺跡 4区西側全景(北西より)	P.L. 7	1	9号ピット土層断面(南東より)
P.L. 4	1	1区基本土層(南西より)	2	9号ピット全景(北より)	
	2	2区基本土層(南西より)	3	10号ピット土層断面(南より)	
	3	4区基本土層A-A'(北東より)	4	10号ピット全景(北より)	
	4	4区基本土層B-B'(北東より)	5	2号溝土層断面(南西より)	
	5	4区基本土層C-C'(北東より)	6	2号溝全景(南より)	
	6	4区旧石器1号トレンチA-A'(北東より)	7	5号土坑土層断面(北東より)	
	7	4区旧石器1号トレンチ(北東より)	8	5号土坑全景(南より)	
	8	1号土坑全景(北東より)	P.L. 8	1	8号土坑土層断面(北東より)
P.L. 5	1	2号土坑土層断面(南西より)	2	8号土坑全景(北東より)	
	2	2号土坑全景(南西より)	3	9号土坑土層断面(南東より)	
	3	3号土坑土層断面(南西より)	4	9号土坑全景(南東より)	
	4	3号土坑全景(南西より)	5	10号土坑土層断面(北より)	
	5	14号土坑土層断面(北東より)	6	10号土坑全景(東より)	
	6	14号土坑全景(北東より)	7	11号土坑全景(北東より)	
	7	16号土坑土層断面(南東より)	8	12号土坑全景(北東より)	
	8	16号土坑全景(北より)	P.L. 9	1	13号土坑土層断面(北より)
P.L. 6	1	18号土坑土層断面(南西より)	2	13号土坑全景(北より)	
	2	18号土坑全景(南西より)	3	15号土坑土層断面(北東より)	
	3	19号土坑土層断面(南より)	4	15号土坑全景(北東より)	

	5	17号土坑土層断面(南東より)	P L. 16	1	6号竪穴建物全景(北西より)
	6	17号土坑全景(北東より)		2	6号竪穴建物土層断面A-A'(北東より)
	7	20号土坑土層断面(南より)		3	6号竪穴建物 1号炉全景(南西より)
	8	20号土坑全景(南より)		4	6号竪穴建物 貯蔵穴土層断面A-A'(北東より)
P L. 10	1	8号ピット土層断面(北より)		5	6号竪穴建物 P 1土層断面B-B'(南西より)
	2	8号ピット全景(北より)	P L. 17	1	7号竪穴建物全景(北西より)
	3	1号竪穴建物土層断面A-A'(北東より)		2	7号竪穴建物土層断面A-A'(北東より)
	4	1号竪穴建物掘方全景(北東より)		3	7号竪穴建物 炉土層断面(南東より)
	5	1号竪穴建物全景(北東より)		4	7号竪穴建物 P 1土層断面B-B'(南西より)
P L. 11	1	2号竪穴建物東側 焼土・炭化材出土状況(北西より)		5	7号竪穴建物 P 2土層断面B-B'(南西より)
	2	2号竪穴建物西側全景及び土層断面A-A'(南西より)	P L. 18	1	8号竪穴建物全景(南西より)
	3	2号竪穴建物土層断面B-B'(南東より)		2	8号竪穴建物遺物出土状態(南西より)
	4	2号竪穴建物土層断面C-C'(北東より)		3	8号竪穴建物西側遺物出土状態(南西より)
	5	2号竪穴建物東側全景(北西より)		4	8号竪穴建物掘方全景(南西より)
P L. 12	1	2号竪穴建物西側掘方全景(北西より)		5	8号竪穴建物掘方全景(南東より)
	2	2号竪穴建物貯蔵穴 土層断面及び遺物出土状態No.3(南東より)	P L. 19	1	5号ピット全景(南より)
	3	2号竪穴建物東側掘方全景(南西より)		2	6号ピット土層断面(北東より)
	4	2号竪穴建物東側掘方全景(北西より)		3	4号土坑土層断面(南西より)
	5	2号竪穴建物調査風景(南東より)		4	4号土坑全景(南西より)
P L. 13	1	3号竪穴建物全景(北東より)		5	6号土坑土層断面(南西より)
	2	3号竪穴建物土層断面A-A'(南東より)		6	7号土坑土層断面(南西より)
	3	3号竪穴建物 1号炉全景(北東より)		7	1号ピット土層断面(南より)
	4	3号竪穴建物土層断面B-B'(南東より)		8	1号ピット全景(南より)
	5	3号竪穴建物掘方全景(南東より)	P L. 20	1	2号ピット全景(北西より)
P L. 14	1	4号竪穴建物全景(北西より)		2	3号ピット土層断面(北西より)
	2	4号竪穴建物土層断面A-A'(北西より)		3	3号ピット全景(北西より)
	3	4号竪穴建物掘方全景(北西より)		4	4号ピット土層断面(北西より)
	4	5号竪穴建物土層断面A-A'(西より)		5	4号ピット全景(北西より)
	5	5号竪穴建物土層断面B-B'(南東より)		6	1号溝土層断面(南東より)
P L. 15	1	5号竪穴建物全景(北西より)		7	1号溝全景(南東より)
	2	5号竪穴建物 1号炉土層断面(南東より)	P L. 21		土坑・1号竪穴建物・2号竪穴建物出土遺物
	3	5号竪穴建物 P 1土層断面E-E'(南西より)	P L. 22		3号竪穴建物～6号竪穴建物出土遺物
	4	5号竪穴建物 P 2土層断面F-F'(南西より)	P L. 23		7号竪穴建物・8号竪穴建物出土遺物
	5	5号竪穴建物掘方全景(北西より)	P L. 24		遺構外出土遺物(1)
			P L. 25		遺構外出土遺物(2)

第1章 調査の経過と方法

第1節 発掘調査に至る経緯

八幡原遺跡は、群馬県北西部の吾妻郡東吾妻町原町に所在する。弥生時代の再葬墓で知られる岩櫃山から北東に1.9km、四万川によって形成された河岸段丘面上に位置する。

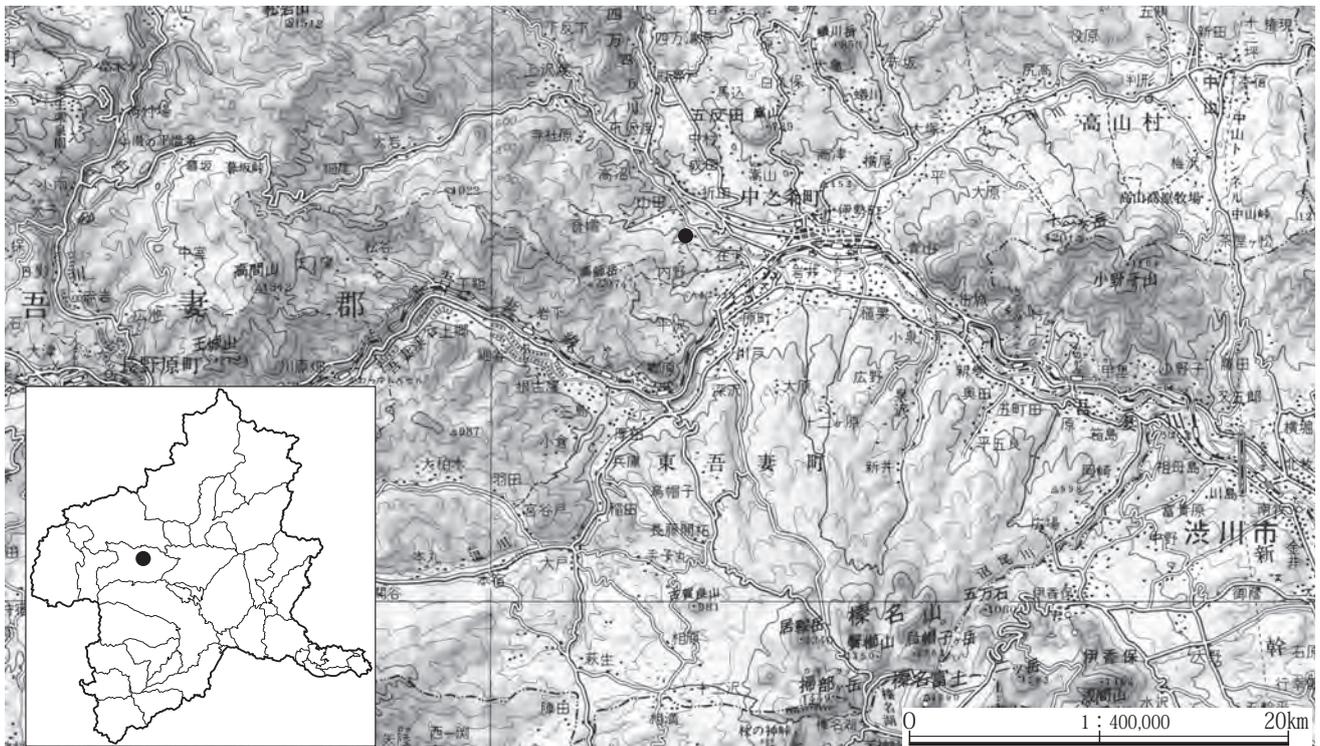
群馬県が定めている県土整備分野の最上位の計画である「ぐんま・県土整備プラン2020」によると、以下のことが吾妻地域の現状と課題としてあげられている。「県央部や首都圏から遠い立地条件と、高速交通網へのアクセス性の低さを克服し、地域の発展と住民の利便性向上を図る取組」「通学路を中心に歩行者や自転車の安全な通行を確保するための取組」などである。

東吾妻町の主要道路体系は、国道145号、主要地方道渋川東吾妻線・中之条東吾妻線、国道406号、主要地方道高崎東吾妻線、一般県道下沢渡原町線、一般県道伊香保村上線が幹線道路とされている。この中の一般県道下沢渡原町線は、吾妻郡東吾妻町原町と吾妻郡中之条町下沢渡を結ぶ全長約5.3kmの道路である。広域ネットワー

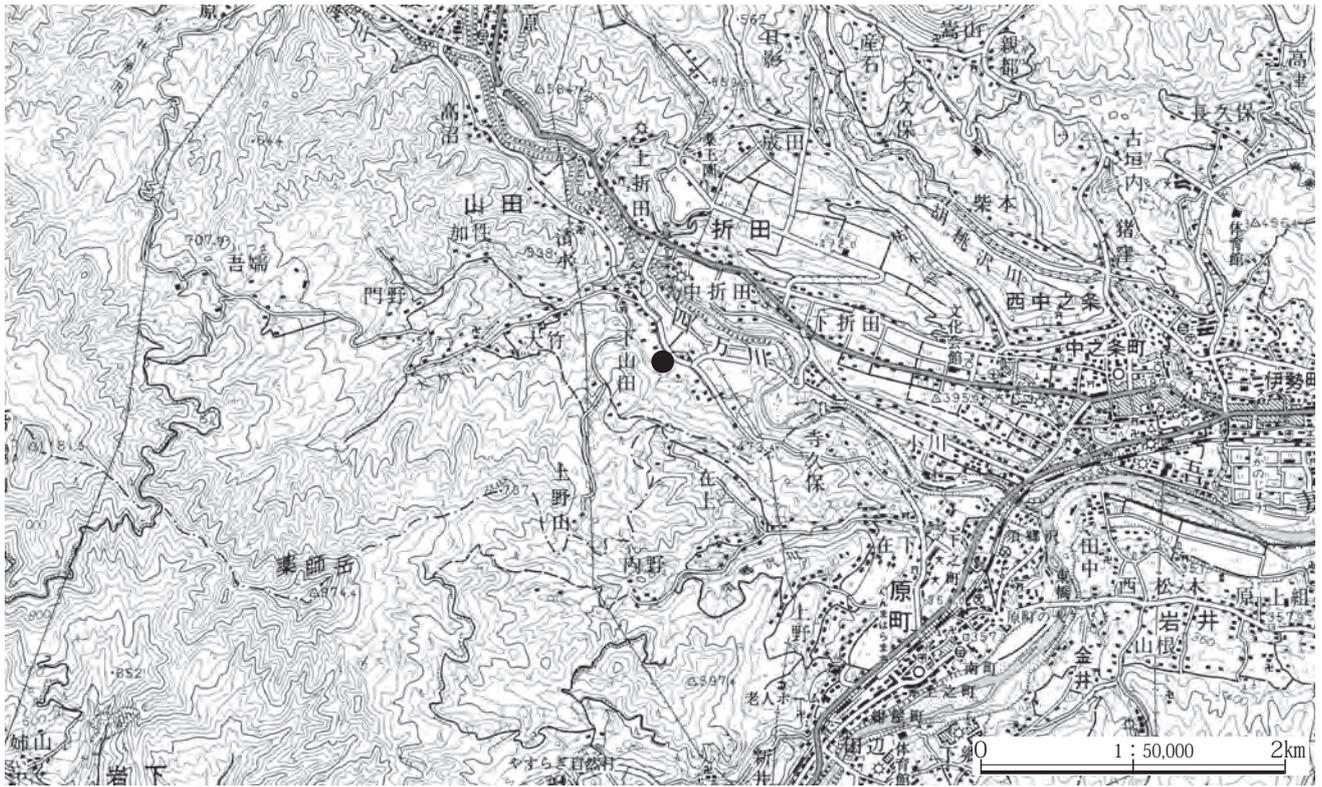
クの実現に向けて、在下地内から山田地内までの区間で早急な拡幅改良が望まれている。

このような状況の中で改良工事が計画され、工事に先立って令和3年度から5年度に発掘調査が実施されることになった。

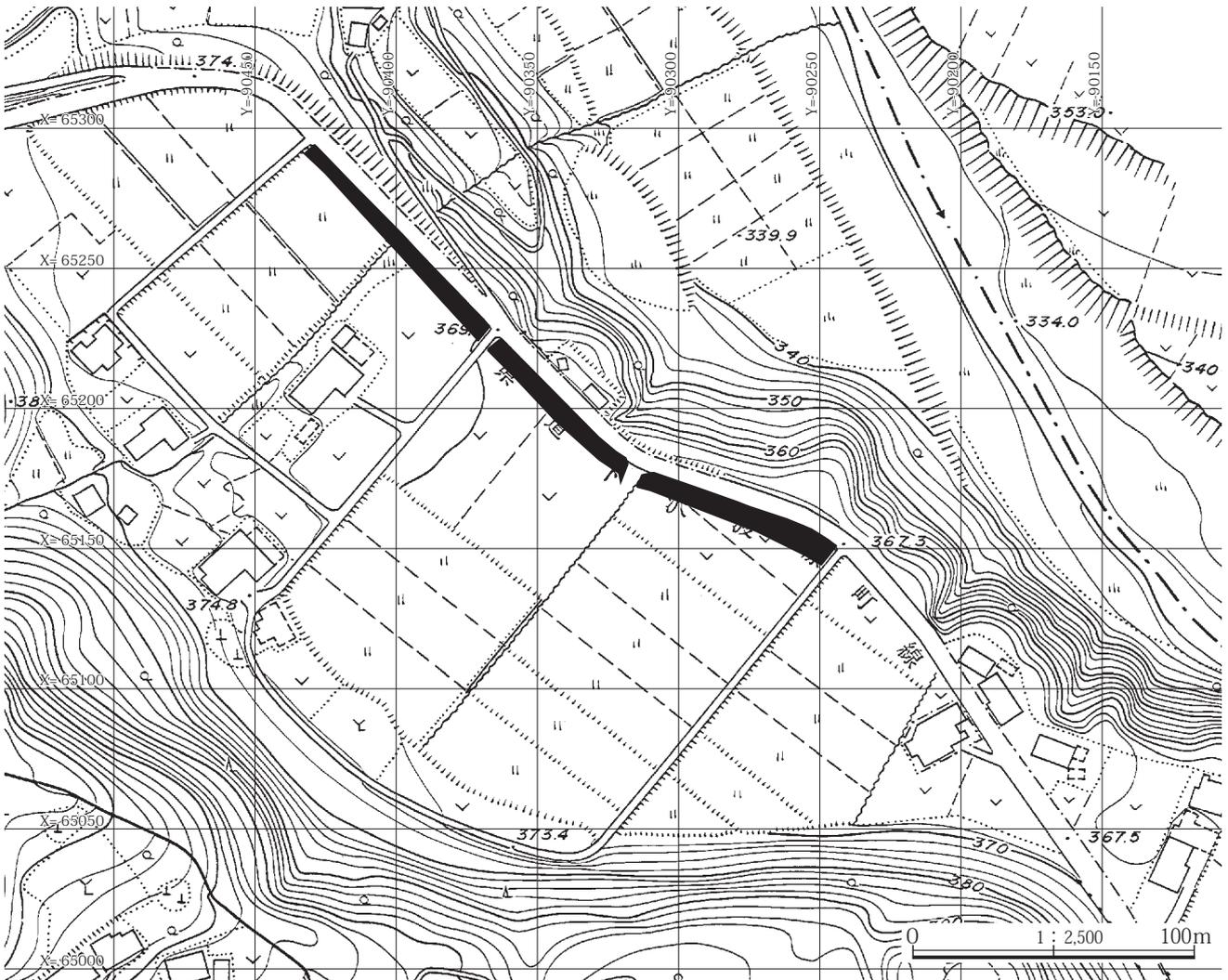
令和3年度調査 八幡原遺跡は、東吾妻町遺跡分布地図―町内遺跡詳細分布調査報告書―（東吾妻町教育委員会2019）に、奈良・平安時代の遺跡（東吾妻町遺跡番号43-0212）として登録されている。令和2年11月5日、群馬県中之条土木事務所（以下、中之条土木事務所と略す）から東吾妻郡原町地内における埋蔵文化財について試掘依頼が提出された。これを受け、群馬県地域創生部文化財保護課（以下、文化財保護課と略す）は、同年12月8日に重機を用いた試掘・確認調査を実施した。その結果、遺構が確認されたため、当該地は発掘調査の対象となった。そして、中之条土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下、事業団と略す）との間で発掘調査委託契約が締結され、令和3年7月1日から7月31日までの期間で、発掘調査が実施されることになった。



第1図 八幡原遺跡と群馬県の地勢(40万分の1地勢図「宇都宮」「長野」を加工)



第2図 八幡遺跡の位置(国土地理院 5万分の1地形図「中之条」を加工)



第3図 八幡原遺跡発掘調査対象位置

令和4年度調査 令和3年度の発掘調査の結果、令和2年度の試掘・確認調査で本調査不要とした箇所にて竪穴建物の遺構が延長することが判明した。これを受け、令和3年7月28日に中之条土木事務所と文化財保護課が協議し、調査不要とした箇所の発掘調査を令和4年度に実施することが了承された。

令和4年5月25日、中之条土木事務所は文化財保護課に試掘を依頼し、同30日に試掘・確認調査を実施した。同31日、事業地について発掘調査が必要であることを文化財保護課は中之条土木事務所に回答した。

この結果、中之条土木事務所と事業団との間で発掘調査委託が締結された。そして、令和4年8月1日から8月31日までの1か月の発掘調査が実施されることになった。

令和5年度調査 令和4年5月30日の試掘・確認調査の結果から、当該地も発掘調査が必要であることが確認された。これを受けて、中之条土木事務所と事業団との間で発掘調査委託契約が締結され、令和5年6月1日から6月30日までの期間で、発掘調査が実施されることになった。

第2節 発掘調査の方法

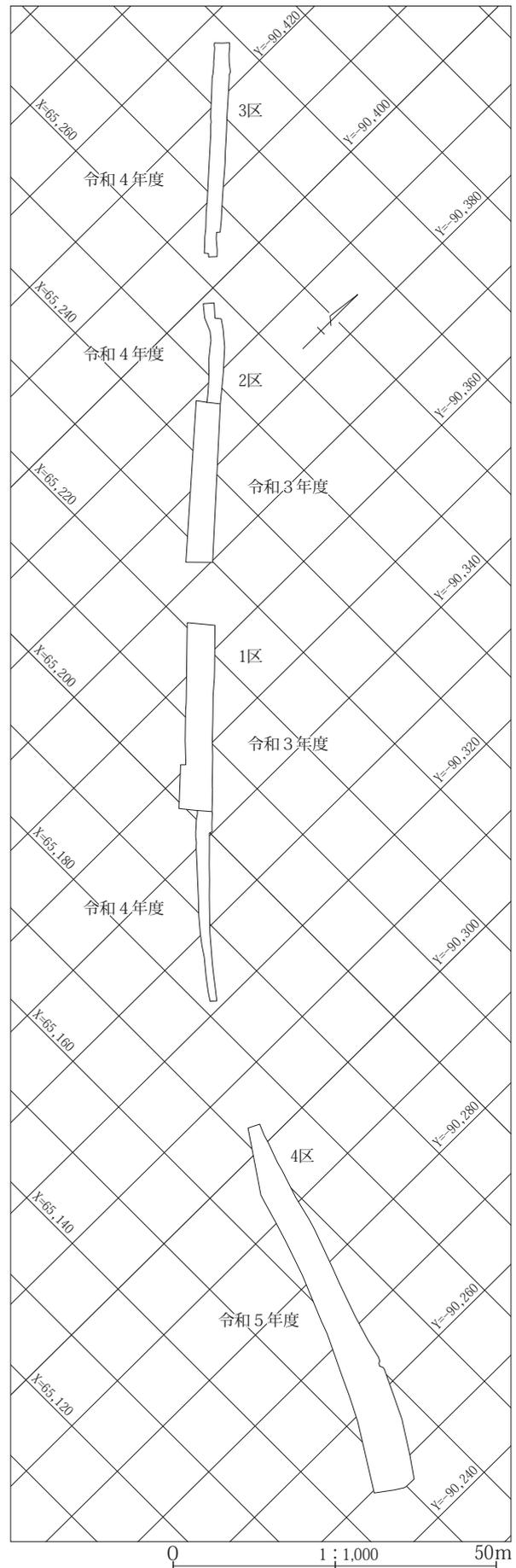
調査区・グリッドの設定と調査の方法

八幡原遺跡の調査は、3か年にわたって実施された。調査区は遺跡を横断する道路を境として設定し、調査予定地の南東から4区、1区、2区、3区と呼称した。調査は、1区北西と2区南東を令和3年度、1区南東と2区北西および3区を令和4年度、4区を令和5年度に実施した。

平面図を記録する測量用のグリッドは、平面直角座標系(測地成果2011)IX系を使用し、座標値の下3桁で呼称した。例えば、X軸=65,150とY軸=-90,250の交点をそれぞれ150、-250と略し、この地点を南東隅とする5m四方の範囲を150-250グリッドと呼称した。

本遺跡では、バックホーで表土を除去したのちに、鋤簾を用いて遺構面を精査し、遺構を確認した。その後、スコップや移植ゴテを用いて個別の遺構を掘削し、必要に応じてベルト設定や半截による土層観察を行った。

また、遺物が出土した場合には、原位置の記録の後に取り上げ、ラベルに出土位置の記録等を付して収納した。



第4図 八幡原遺跡調査年度と発掘区

第1章 調査の経過と方法

その後、洗浄および出土地点等の注記作業を業者委託し、発掘調査員が点検を行った後に整理作業に備えて収納した。

遺構の記録は、デジタル測量による測図を原則とし、平面図は1/40縮尺図、断面図は1/20縮尺図、全体図は1/200縮尺図で作図した。なお、遺構図の作成は測量会社に委託し、データおよび打ち出しの図面を成果品として受領した。

遺構写真の撮影は35mmフルサイズデジタルカメラでの記録を基本とし、必要に応じてブローニー版による銀塩写真を併用して発掘調査担当者が行った。

第3節 発掘調査の経過

調査経過の概略は以下のとおりである。

令和3年度

- 7月1日 調査開始。
- 5日 1区1号竪穴建物遺構確認。
- 6日 1区1号溝調査。
- 7日 1区北側全景写真撮影。2区トレンチ掘削。
- 13日 1区2号竪穴建物炭化材検出。2区遺構確認。
- 19日 2区3号・4号竪穴建物掘削。
- 20日 2区5号竪穴建物掘削。
- 21日 1区2号・2区3号竪穴建物全景写真撮影。
- 26日 2区4号・5号竪穴建物写真撮影。
- 27日 1区2号竪穴建物拡張して調査。
- 29日 1区2号竪穴建物拡張部分全景写真撮影。
- 30日 調査終了

令和4年度

- 8月1日 調査開始。
- 2日 遺構確認、ピット検出。
- 3日 前年度調査の2号竪穴建物の続きを検出。
- 4日 3区調査区南半分As-Kk混土下では遺構なし。
- 5日 1区全景写真撮影。
- 8日 黒色土面遺構なし。
- 9日 3区褐色土面で、6号・7号・8号竪穴建物検出。
- 18日 1区2号竪穴建物炭化材サンプル採取。
- 22日 1区2号竪穴建物全景写真撮影。
- 23日 3区8号竪穴建物全景写真撮影。
- 25日 3区6号竪穴建物炭化材確認。
- 29日 3区6号・7号竪穴建物全景写真撮影。
- 31日 調査終了。

令和5年度

- 6月1日 調査開始。
- 5日 4区西側トレンチ掘削。
- 8日 4区西側遺構確認。
- 9日 4区西側、土坑・ピット調査。
- 13日 4区西側埋め戻し。
- 16日 4区東側調査開始。
- 19日 4区東側土坑検出。
- 21日 4区東側全景写真撮影。
- 23日 4区東側旧石器確認調査。
- 26日 4区埋め戻し開始。
- 30日 調査終了。

第4節 整理作業の経過

整理事業は、文化財保護課の調整を受け、中之条土木事務所と事業団との間で、令和6年4月1日に事業の委託契約が交わされた。そして、同日より事業団本部にて整理作業を開始した。

すでに洗浄・注記を済ませ、収納してあった遺物を分類したのち、遺構ごとに接合作業を行った。その後、図化する個体を選定後、復元・写真撮影、実測・採拓、観察作業を行った。

実測は三次元計測器や長焦点の実測用写真を併用しながら行った。遺物図はロットリングによるトレース後、スキャニングによりデジタル化したものとデジタルトレースを実施したものがある。遺物写真は、35mmフルサイズのデジタルカメラで撮影したデータの現像および色調等の調整をした。

遺構図は、調査段階でデジタルデータ化しており、これを編集して完成図面とした。また、遺構写真は、発掘調査で撮影したデジタル写真から掲載写真を選択し、色調等の調整後デジタル入稿用データとして仕上げた。

これらの作業と並行して本文および観察表の原稿を執筆し、デジタルデータ化した遺構図・遺物図とあわせてアドビ社のインデザインを使用してデジタル入稿データを編集した。

そして、令和6年9月30日に整理作業を完了し、出土遺物・図面・写真類の収納作業を終了した。令和6年11月に発掘調査報告書『八幡原遺跡』を刊行した。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

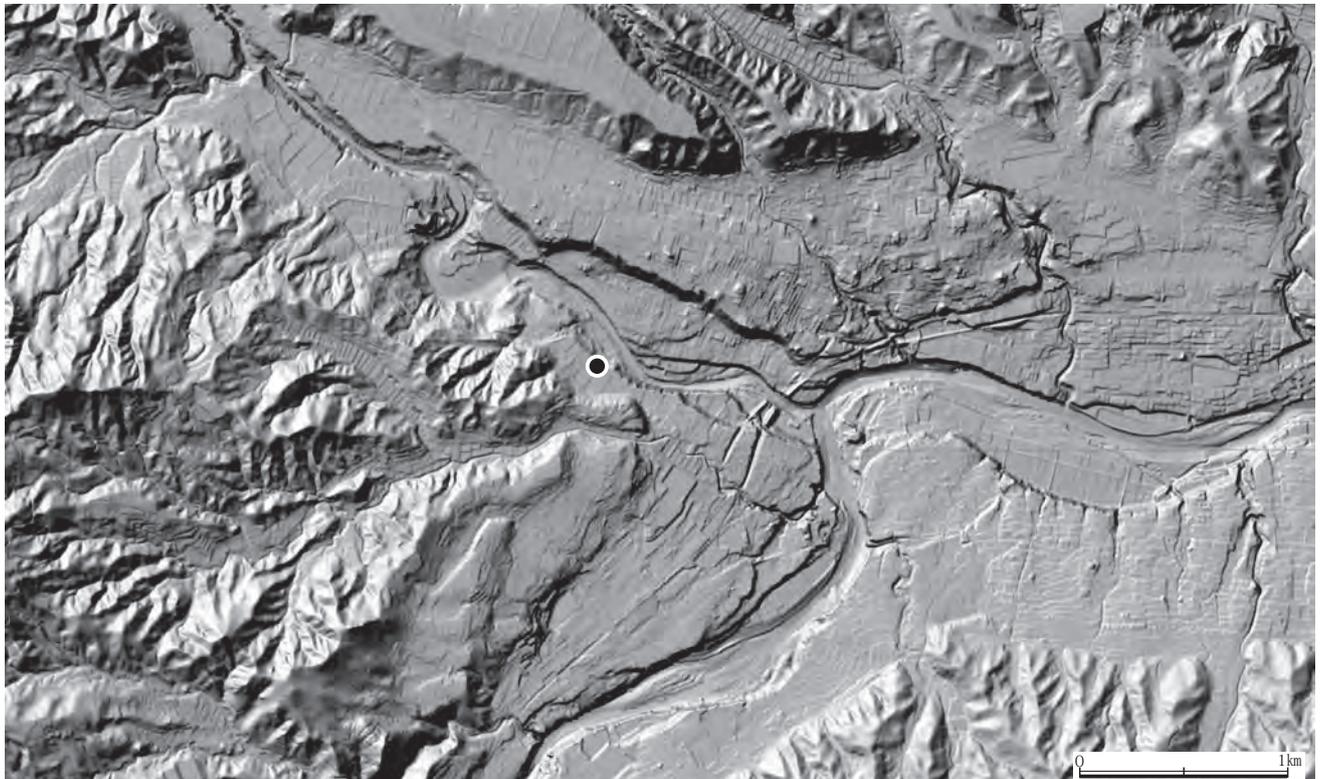
第1節 遺跡の地形と立地

八幡原遺跡は群馬県北西部の吾妻郡東吾妻町、JR吾妻線群馬原町駅の北1.3kmに所在する。東吾妻町は、東は渋川市、西は吾妻郡長野原町、南は高崎市、北は吾妻郡中之条町に接し、東西28km、南北16km、面積は約254km²である。周囲は吾嬭山、鷹の巣山、高間山、掃部ヶ岳などの1000m級の山々が連なっている。町内の岩櫃山は露岩がそびえ立ち、急崖が断続している。

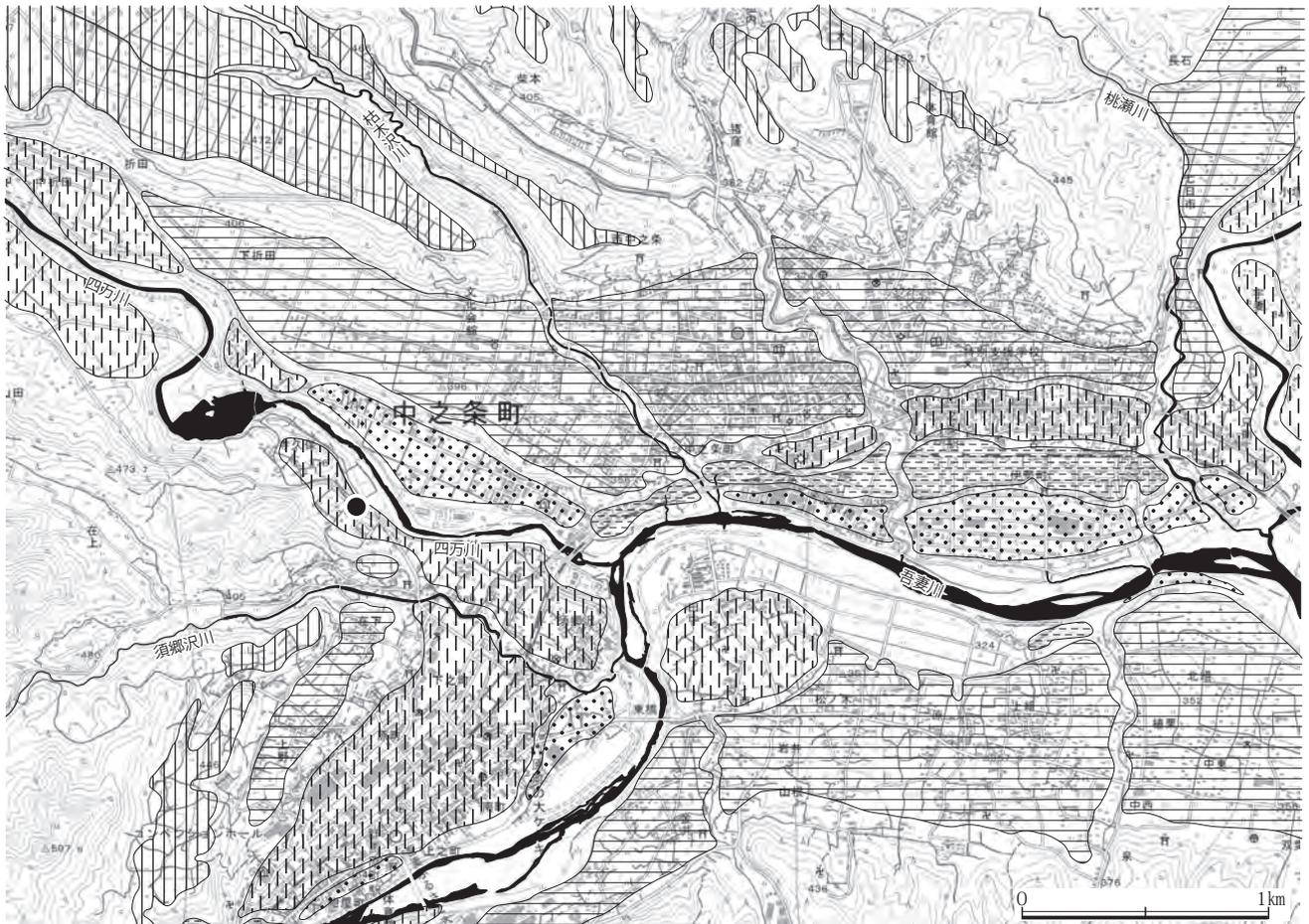
町の中央部には吾妻川が流れ、その支流の四万川と中之条町の名久田川の合流付近には中之条盆地が形成され、平坦地が広がっている。この平坦地は、今から50万年前に小野子山と榛名山の火山活動により、せき止められて形成された古中之条湖がもとになったものである。古中之条湖は、最高水位が標高540m、奥行きは18kmと推定されている。やがて湖面の水位が下がり、湖底の堆積物は吾妻川、名久田川、四万川などに侵食されて、河

岸段丘を形成した。この段丘は、高位から蓑原面、成田原面、中之条面、伊勢町Ⅰ面、伊勢町Ⅱ面、伊勢町Ⅲ面に区分される(第6図)。最高位の蓑原面の標高は600～560mで、中之条の北方約4kmに位置している。非常に平坦な地形が広がり、その形成は5万年以上前とされている。成田原面は標高500～450mに広がり、約4万年前に形成された。中之条面は、吾妻川両岸や四万川左岸、中之条盆地に広がり、上位には約2万4千年前の泥流堆積物が確認されている。伊勢町面は中之条町伊勢町付近がその中心で、東吾妻町原町付近や四万川の両岸にも広がっている。この伊勢町面はⅠ～Ⅲ面に分けることができ、Ⅰ面と吾妻川の現河床との比高は約30m、Ⅱ面との比高は約20m、Ⅲ面との比高は約10mである。

八幡原遺跡は、四万川右岸に広がる伊勢町Ⅰ面に立地し、四万川との比高は約40mである。遺跡周辺の現況は、土地改良が進み平坦な地形となっている。しかし、旧地形は南西の丘陵地からの湧水により浸食されて、起伏に



第5図 遺跡周辺の陰影図(電子国土Web陰影起伏図を加工)



||||| 成田原面 ||||| 中之条面 ||||| 伊勢町Ⅰ面 ||||| 伊勢町Ⅱ面 ||||| 伊勢町Ⅲ面

第6図 遺跡周辺の河岸段丘面

富んでいたものと推測される。さらに北東の段丘崖には小規模な谷が形成されている。

参考文献

- 原町誌編纂委員会1960『原町誌』
- 中之条町誌編纂委員会1978『中之条町誌第3巻』
- 竹本弘幸ほか1987「中之条湖成層の層序とフィッシュ・トラック年代」『駒澤地理23』、駒澤大学文学部地理学教室p.94

第2節 周辺遺跡の分布

本遺跡の調査によって確認された遺構は、縄文時代から中近世までである。本節では、中之条盆地周辺に広がる遺跡について、発掘調査事例を中心に概観する。

旧石器時代 東吾妻町において、旧石器時代の遺跡は現在まで確認されていない。

縄文時代 町内および中之条町に分布するが、この時代の遺跡は希薄である。植栗中原遺跡(地図外)から出土し

た深鉢破片は年代測定の結果、草創期の遺物であることが確認されている。また、1000点を超える石器類も併せて出土した。前期は東上野遺跡(14)、後期は清水敷石住居跡(7)、郷原遺跡(地図外)の「ハート形土偶」ほか、植栗山根A遺跡(地図外)から晩期の竪穴建物2棟が確認され、ベンガラの付着した石器が出土している。また、地図外ではあるが近年の上信自動車道吾妻西バイパス建設に伴う発掘調査により、唐堀遺跡・四戸遺跡などからも縄文時代の遺構や遺物の出土例が増加している。

弥生時代 周辺には、中期の岩櫃山鷹の巣遺跡(地図外)、前畑遺跡(地図外)から再葬墓が検出されている。上沢田川上流の有笠山遺跡(地図外)では、中期前半の墓関連と中期後半の狩猟等のキャンプ地と推定される遺構が確認された。後期になると集落は著しく増加する。諏訪前遺跡Ⅰ(25)では竪穴建物7棟、伊勢町地区遺跡群の川端遺跡(61)と天神遺跡(62)では竪穴建物が200棟以上検出さ

れ、当地域の拠点集落であった可能性が考えられる。川端遺跡・天神遺跡の吾妻川対岸に位置する植栗中原遺跡と小沢B遺跡(地図外)では、中期から後期の土器および弥生末期から古墳時代前期にかけての竪穴建物が調査された。これらの建物の一部では後期樽式土器と古墳前期の土師器が共存していることも確認されている。また、下郷古墳群(34)は中期前半から中葉と後期樽式の土器が出土している。

古墳時代 古墳時代になると、弥生時代後期からの集落を継承しつつ、平坦地への広がりが増えるようになる。諏訪前遺跡Iでは、中期と後期の竪穴建物がそれぞれ1棟確認され、遺構外からではあるが石製丸軋が出土している。川端遺跡、天神遺跡では、弥生時代から継続する前期から中期の集落の調査が行われている。川端遺跡からは後期の竪穴建物と石垣を持つ大規模な方形区画が確認されている。植栗中原遺跡(地図外)からは弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物3棟と5世紀の竪穴建物1棟、植栗山根A遺跡(地図外)からは5世紀代の竪穴建物6棟とHr-FA下の小区画水田が検出された。下郷古墳群では、4世紀末から5世紀初めの竪穴建物1棟を最古とし、4世紀～7世紀中葉の竪穴建物が計7棟確認されている。

四万川と吾妻川の合流点近くの石ノ塔古墳(64)は5世紀末築造で、この地域最古の古墳と考えられている。『上毛古墳総覧』によると、原町下ノ町古墳群(31)、岩井寺沢古墳(41)、岩井西古墳群(53)、小川古墳群(65)などが確認できる。また、植栗中原遺跡では5世紀代の円墳と時期不明の方墳がそれぞれ1基、諏訪前遺跡Iでは、6世紀前半の円墳が調査されている。

奈良・平安時代 律令期の土野国は「碓氷・片岡・甘楽・多胡・緑埜・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽」の14郡(当初は多胡郡を除く13郡)が置かれていた。『倭名類聚抄』によると、吾妻郡には「長田郷」「尹参郷」「大田郷」があったとされている。諏訪前遺跡I(25)では、竪穴建物15棟が確認され、「山」「六」などと墨書された土器や円面硯が出土している。また区画溝を伴う鍛冶跡も検出された。下郷古墳群では7世紀末から10世紀第1四半期の竪穴建物29棟と掘立柱建物4棟が調査さ

れ、中空円面硯が出土している。植栗中原遺跡・小沢B遺跡からは、「吾」「太」「寺」などと書かれた大量の墨書土器が出土している。小沢遺跡(46)では、猿投窯の浄瓶が出土し、「延」の刻字が確認されている。このほか、「御」「太田ア」と書かれた墨書も出土した。この時期の代表的な遺跡の一つとして、7世紀に創建された金井廃寺跡(40)がある。発掘調査が行われた南縁部からは瓦が多数出土し、創建期の軒先瓦は、伊勢崎市上植木廃寺の瓦と同範であることが確認されている。

生産遺跡としては、As-B下から水田が見つかった善導寺前遺跡(24)、As-BまたはAs-Kkで埋もれた畑が調査された下郷古墳群、As-BまたはAs-Kk下から水田が検出された植栗山根A遺跡などがあげられる。

中・近世 吾妻地域は、信州から関東の平野部に抜ける要所であり、城館が数多く存在する。鎌倉から室町時代にかけては、吾妻氏や飽間氏、斎藤氏などが本拠地をかまえて支配したと伝えられている。その後、武田氏、上杉氏による争奪戦が繰り返され、末期には真田氏の領有となった。周辺には、国指定史跡の岩櫃城(22)をはじめ、桑田城(8)、吉城(9)、山田城(10)、高野平城(11)、稲荷城(12)、中条城(66)、内山城(76)など多くの城が築かれている。岩櫃城は史跡整備に伴う発掘調査が実施され、本丸跡から三段積みの石積み遺構や金属工房、陶磁器や瓦が大量に出土した。特筆すべきは、金粒子が付着した埴塙が出土したことであり、城内で金属加工が行われていた可能性を示唆している。そのほか、念仏塚遺跡(20)では中世の薬研堀、諏訪前遺跡Iからは掘立柱建物4棟などが調査されている。

近世の遺跡としては、上信道吾妻西バイパス建設に伴う発掘調査で、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流下の遺跡が増えている。本遺跡の周辺はそのような調査例は少なく、西浦遺跡(中之条町・地図外)で1m程度の天明泥流堆積物が確認されている。泥流下からは、畑、道、石列などが見つかっている。



第7図 周辺の遺跡(国土地理院2万5千分の1地形図「中之条・群馬原町」を加工)

第1表 八幡原遺跡の周辺遺跡

	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中・近世	文献	
1	八幡原遺跡		○	○	○			○	本報告	
2	八幡原遺跡					○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号212
3	寺久保遺跡		○			○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号213
4	上須郷遺跡				○				吾妻町教育委員会 1992『上須郷遺跡』	遺跡番号69
5	上須郷B遺跡		○	○		○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号211
6	山田勝負瀬古墳群				○				群馬県総合型地理情報システム(GIS)マッピングぐんま「遺跡」	古墳総覧 澤田村1～4
7	清水敷石住居跡		○						群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』	遺跡台帳3065
8	桑田城址							○	中之条町教育委員会 2012『内山城址 桑田城址』、群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、群馬県文化事業振興会 1972 山崎 一著『群馬県古城史の研究 下巻』、西毛新聞社 1972 山崎 一 山口武夫共著『吾妻郡城壘史』	中世城館跡748
9	吉城址							○	群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、群馬県文化事業振興会 1972 山崎 一著『群馬県古城史の研究 下巻』、西毛新聞社 1972 山崎 一 山口武夫共著『吾妻郡城壘史』	中世城館跡749
10	山田城址							○	群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、群馬県文化事業振興会 1972 山崎 一著『群馬県古城史の研究 下巻』、西毛新聞社 1972 山崎 一 山口武夫共著『吾妻郡城壘史』	中世城館跡750
11	高野平城跡							○	群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、群馬県文化事業振興会 1972 山崎 一著『群馬県古城史の研究 下巻』、西毛新聞社 1973 山崎 一 山口武夫共著『吾妻郡城壘史』	中世城館跡751 遺跡番号89
12	稲荷城跡							○	群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』、吾妻町教育委員会 1992『岩櫃城跡』、群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、群馬県文化事業振興会 1972 山崎 一著『群馬県古城史の研究 下巻』、西毛新聞社 1972 山崎 一 山口武夫共著『吾妻郡城壘史』	遺跡台帳3811 中世城館跡787 遺跡番号31
13	稲荷城西遺跡					○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号214
14	東上野遺跡		○	○	○	○	○		群馬県教育委員会 1963『群馬県の遺跡』	遺跡番号47
15	大宮遺跡				○				群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』	遺跡台帳3088 遺跡番号1
16	一本松遺跡		○	○		○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号210
17	柳沢城跡							○	群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、群馬県文化事業振興会 1972 山崎 一著『群馬県古城史の研究 下巻』、西毛新聞社 1972 山崎 一 山口武夫共著『吾妻郡城壘史』	中世城館跡783 遺跡番号82
18	道心穴遺跡			○					群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』	遺跡台帳3094 遺跡番号7
19	蝦夷穴遺跡			○					東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号46
20	念仏塚遺跡		○	○				○	吾妻町教育委員会 1994『念仏塚遺跡』	遺跡番号65
21	念仏塚北遺跡		○						東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号208
22	岩櫃城跡							○	吾妻町教育委員会 1992『岩櫃城跡』、群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、群馬県文化事業振興会 1972 山崎 一著『群馬県古城史の研究 下巻』、西毛新聞社 1972 山崎 一 山口武夫共著『吾妻郡城壘史』	中世城館跡781 遺跡番号32
23	岩櫃城跡北側遺構群遺跡		○					○	吾妻町教育委員会 1994『岩櫃城北側遺構群遺跡』	中世城館跡786 遺跡番号66
24	善導寺前遺跡						○	○	吾妻町教育委員会 1996『善導寺前遺跡』	遺跡番号3
25	諏訪前遺跡Ⅰ			○	○	○	○	○	吾妻町教育委員会 2004『諏訪前遺跡Ⅰ』	遺跡番号68
26	原町塚遺跡						○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号49
27	青木遺跡		○	○		○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号209
28	中学校裏遺跡			○					群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』、吾妻町教育委員会 1992『岩櫃城跡』	遺跡台帳3089 遺跡番号2
29	須郷沢遺跡					○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号216
30	館遺跡		○			○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号215
31	原町下之町古墳群				○				東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	古墳総覧 原町1～16 遺跡番号99
32	内出城跡							○	群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、吾妻町教育委員会 1992『岩櫃城跡』、群馬県文化事業振興会 1972 山崎 一著『群馬県古城史の研究 下巻』、西毛新聞社 1972 山崎 一 山口武夫共著『吾妻郡城壘史』	中世城館跡788 遺跡番号83
33	天竜遺跡		○	○		○	○		(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2023『年報42』	遺跡番号218
34	下郷古墳群			○	○		○		東吾妻町教育委員会 2011『東吾妻町 下郷古墳群遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2014『下郷古墳群』	古墳総覧 川戸村62～69、遺跡番号6
35	下郷A遺跡		○	○					東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号50
36	水頭A遺跡					○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号222
37	水頭B遺跡					○	○	○	東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号223
38	市敷A遺跡					○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号220
39	市敷B遺跡					○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号221
40	金井庵寺跡							○	吾妻町教育委員会 1979『金井庵寺遺跡』、群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』、吾妻町教育委員会 1992『岩櫃城跡』	遺跡台帳3092 古墳総覧 川戸75 遺跡番号5

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中・近世	文献	
41	岩井寺沢古墳				○				東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	大田村17 遺跡番号98
42	先陣峠の岩跡							○	群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、吾妻町教育委員会 1992『岩櫃城跡』	中世城館跡794 遺跡番号86
43	岩井山根A遺跡			○		○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号170
44	岩井山根B遺跡		○	○	○	○	○	○	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2022『年報41』	遺跡番号171
45	大日山古墳				○				東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号172
46	小田沢遺跡		○		○	○	○		(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2021『年報40』	中世城館跡790 遺跡番号173
47	原田A遺跡					○	○	○	東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号174
48	原田B遺跡					○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号175
49	原田C遺跡					○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号176
50	西中堀遺跡					○	○	○	東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号169
51	八幡A遺跡		○	○		○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号163
52	八幡B遺跡					○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号164
53	岩井西古墳群				○				東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	古墳総覧 大田村1～14、遺跡番号97
54	田中A遺跡			○		○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号161
55	田中B遺跡			○		○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号162
56	白山神社遺跡			○	○				群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』	遺跡台帳3099 古墳総覧 大田村21 遺跡番号12
57	松木A遺跡		○	○		○	○	○	東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号165
58	松木B遺跡					○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号166
59	原A遺跡		○	○		○	○		東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号167
60	原B遺跡			○		○	○	○	東吾妻町教育委員会2019『東吾妻町遺跡分布地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』	遺跡番号168
61	伊勢町川端遺跡			○	○	○	○		群馬県教育委員会 1963『群馬県の遺跡』	
62	伊勢町天神遺跡		○	○	○	○	○	○	群馬県教育委員会 1963『群馬県の遺跡』	
63	長岡遺跡			○	○	○	○	○	中之条町教育委員会 1996『長岡Ⅰ遺跡』・『長岡Ⅱ遺跡』	
64	石ノ塔古墳				○				群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』	遺跡台帳3080
65	小川古墳群				○				群馬県総合型地理情報システム(GIS)マッピングぐんま「遺跡」	古墳総覧 中之条町25～28・31～34
66	中条城址							○	群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、吾妻町教育委員会 1992『岩櫃城跡』	中世城館跡755
67	永田原遺跡				○				群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』	遺跡台帳3078 古墳総覧 中之条町38
68	小原遺跡							○	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2019『七日市陣屋敷・七日市古墳群 小原遺跡 上佐烏明神前遺跡』	
69	法満寺土師遺跡				○				群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』	遺跡台帳3079
70	城峯城址							○	群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、吾妻町教育委員会 1992『岩櫃城跡』、群馬県文化事業振興会 1972 山崎 一著『群馬県古城史の研究 下巻』、西毛新聞社 1972 山崎 一 山口武夫共著『吾妻郡城壘史』	中世城館跡789 遺跡番号84
71	法満寺遺跡			○					群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』	遺跡台帳3076
72	長久保遺跡				○				群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』	遺跡台帳3071
73	白久保遺跡		○						群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』	遺跡台帳3075
74	嵩山城址							○	群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、群馬県文化事業振興会 1972 山崎 一著『群馬県古城史の研究 下巻』、西毛新聞社 1972 山崎 一 山口武夫共著『吾妻郡城壘史』	中世城館跡760
75	養原遺跡		○			○	○		群馬県総合型地理情報システム(GIS)マッピングぐんま「遺跡」	
76	内山城址							○	中之条町教育委員会 2012『内山城址 桑田城址』、群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、群馬県文化事業振興会 1972 山崎 一著『群馬県古城史の研究 下巻』、西毛新聞社 1972 山崎 一 山口武夫共著『吾妻郡城壘史』	中世城館跡753
77	折田屋敷跡							○	群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』	中世城館跡754
78	成田遺跡			○					群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』	遺跡台帳3062
79	成田原千貫遺跡		○	○				○	群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳 西毛編Ⅱ』 群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』、群馬県文化事業振興会 1972 山崎 一著『群馬県古城史の研究 下巻』	遺跡台帳3066 中世城館跡752

第3節 基本土層

前述のように、八幡原遺跡は吾妻川と四万川が形成した河岸段丘の伊勢町I面に立地している。現在は平坦に整地されているが、もともとは礫層とシルト層・砂層が入り組んでいた。また、3区の西端から4区の東端までの距離は約230m、比高は4mある。このため、各調査区での基本土層は調査区ごとに異なっている。ここでは、各調査区での土層観察をもとに代表的な土層断面図を提示する。

1区の調査区東端、2区の調査区西端、3区の7号竪穴建物、4区の調査区南壁では、As-KkとAs-Bが観察できた。また、すべての調査区でAs-KkまたはAs-Kk混土を確認した。

1区基本土層A

- I 黒褐色土(10YR3/1) As-Kkを40%含む。
- II 黒褐色土(10YR3/1) 直径1~20mmの礫を10%含む。
- III 黒褐色土(10YR3/1) 直径5~20cmの礫を30%含む。
- IV 黄褐色土(10YR5/8) 直径5~20cmの礫を40%含む。

2区基本土層B

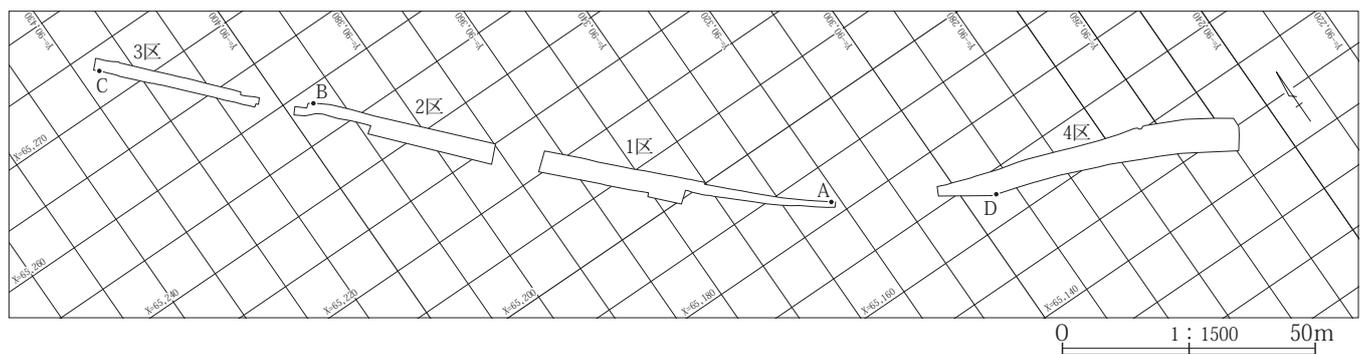
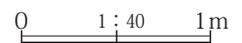
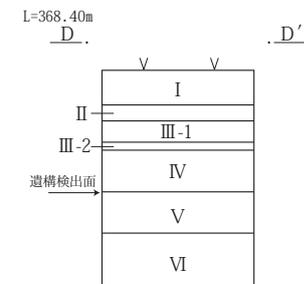
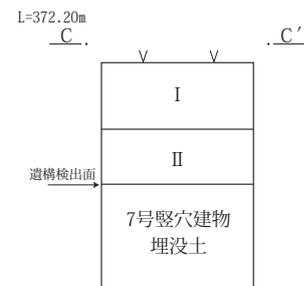
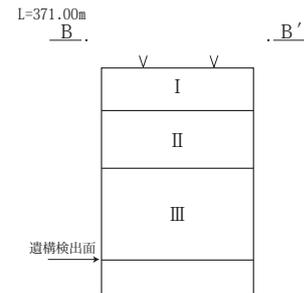
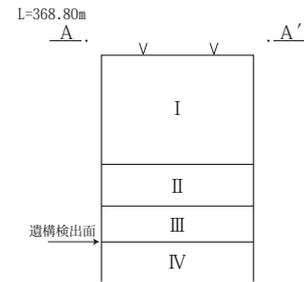
- I 黒褐色土(10YR3/1) 1~10mmの礫を20%含む。
- II 黒褐色土(10YR3/1) As-Kkを40%含む。
- III 暗褐色土(10YR3/3) 黄褐色土を30%含む。

3区基本土層C

- I 黒褐色土(10YR3/1) As-Kkを50%含む。
- II 黒褐色土(10YR3/1)

4区基本土層D

- I 褐灰色土(10YR4/1) シルト~粗砂。直径0.5~1cmの小礫を多く含む。粘性弱い。締り強い。
- II 黒褐色土(10YR3/2) シルト~粗砂。直径0.2~1cmの小礫を多く含む。粘性弱い。締りやや強い。
- III-1 灰黄褐色土(10YR6/2) 直径0.1~1cm大のAs-Kk粒の一次堆積層。
- III-2 褐灰色土(10YR4/1) As-Bの一次堆積層。微砂~細砂。
- IV 黒褐色土(10YR3/1) シルト~細砂。粘性強い。締り強い。
- V 暗褐色土(10YR3/3) シルト~粗砂。直径1~5cmの礫を多量に含む。
- VI にぶい黄褐色土(10YR4/3) 細砂~粗砂。直径1~5cmの小礫、直径20~30cm大の礫を多く含む。



第8図 八幡原遺跡基本土層と確認位置図

第3章 八幡原遺跡の遺構と遺物

第1節 調査の概要

調査は、令和3年7月、令和4年8月、令和5年6月の3か年にわたって実施した。各年度の調査範囲については第4図のとおりである。

令和3年度は1区の西半分と2区の東半部分を調査した。調査は基本土層Ⅲ層の上面を遺構確認面として開始したが、遺構を確認することはできなかった。そのため、さらに掘り下げて基本土層Ⅳ層上面を第1面とし調査することとなった。確認した遺構は、古墳時代の竪穴建物5棟、中・近世のピット1基・溝1条である。

令和4年度は、1区の東半分と、2区の西半分および3区の調査を行った。確認した遺構は、古墳時代の竪穴建物4棟・ピット2基、古代以降のピット3基である。なお、竪穴建物のうち1棟は、令和3年度に調査した2号竪穴建物の南東部分である。

令和5年度は、4区を調査した。確認した遺構は、縄文時代の土坑8基・ピット3基・溝1条、弥生時代の土坑10基・ピット1基、古代から中世の土坑3基である。

第2節 検出された遺構と遺物

第1項 旧石器時代の調査(第9・10図 PL.4)

旧石器確認調査はローム土が確認された4区の南東部分に3m×2mの1号トレンチと3.5m×2mの2号トレンチを設定して行った。その結果、いずれのトレンチからも遺物の出土はなかった。

第2項 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、4区で検出された土坑8基、ピット3基、溝1条である。このうち出土遺物を図示できた遺構は、2号土坑のみである。

(1)土坑

1号土坑(第9・10図 PL.4)

位置 X=65,169~65,171 Y=-90,299・-90,300

重複 なし。

平面形 楕円形か

長軸方位 N-48°-W

規模 長軸1.80m以上 短軸0.61m以上 深さ0.38m

検出・埋没状況 埋土は、礫を含む黒褐色土が主体で粘性がやや強い。断面形は逆三角形を呈する。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から縄文時代であると考えられる。

2号土坑(第9・10図 PL.5・21)

位置 X=65,167・65,168 Y=-90,289・-90,290

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-57°-W

規模 長軸1.47m 短軸1.04m 深さ0.15m

検出・埋没状況 埋土は、小礫を含み粘性の弱い黒褐色土が主体である。断面形は台形を呈する。

出土遺物 縄文土器有尾式深鉢胴部片(第10図1)が出土している。

調査所見 遺物から、縄文時代前期であると考えられる。

3号土坑(第9・10図 PL.5)

位置 X=65,166・65,167 Y=-90,287・-90,288

重複 なし。

平面形 楕円形

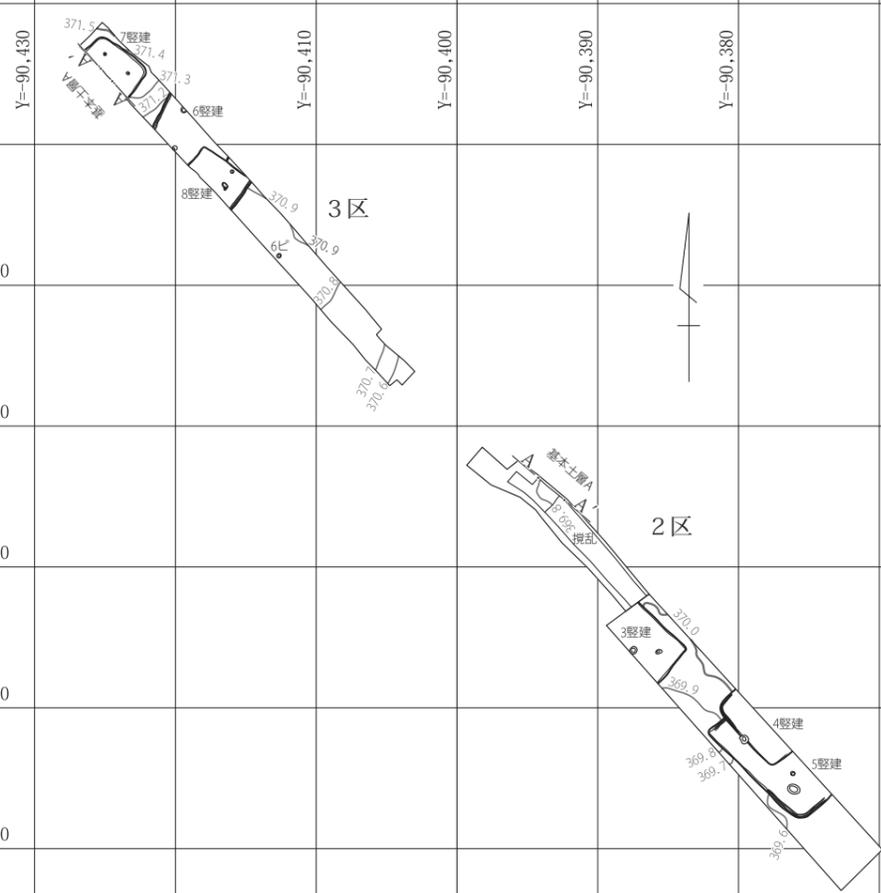
長軸方位 N-38°-W

規模 長軸1.06m 短軸0.91m 深さ0.21m

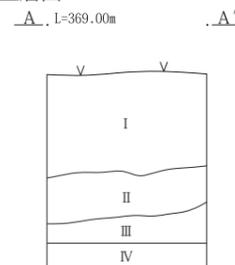
検出・埋没状況 埋土は、粘性の強い黒褐色土が主体である。断面形は台形を呈する。

出土遺物 縄文土器の細片が出土したが図示には至らなかった。

調査所見 遺構の検出状況および遺物から、縄文時代で



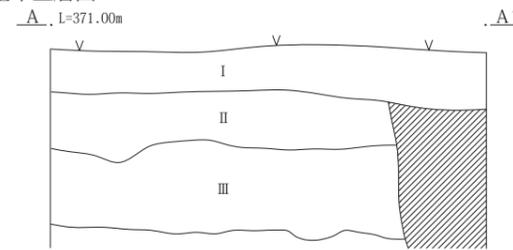
1区基本土層図



1区基本土層

- I 黒褐色土(10YR3/1) As-Kkを40%含む。
- II 黒褐色土(10YR3/1) 直径1~20mmの礫を10%含む。
- III 黒褐色土(10YR3/1) 直径5~20cmの礫を30%含む。
- IV 黄褐色土(10YR5/8) 直径5~20cmの礫を30%含む。

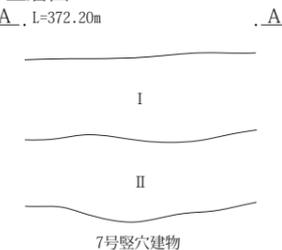
2区基本土層図



2区基本土層

- I 黒褐色土(10YR3/1) 1~10mmの礫を20%含む。
- II 黒褐色土(10YR3/1) As-Kkを40%含む。
- III 暗褐色土(10YR3/3) 黄褐色土を30%含む。

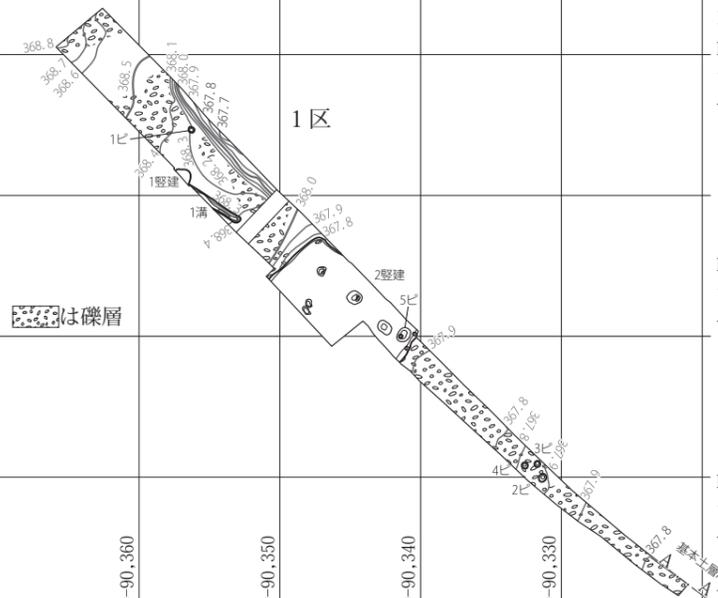
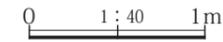
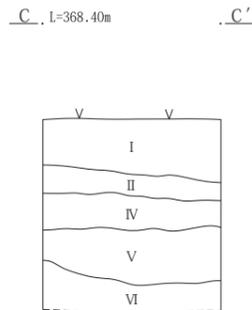
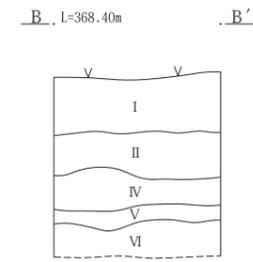
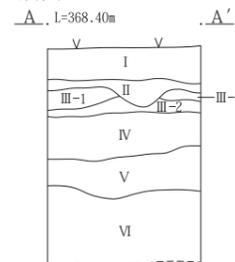
3区基本土層図



3区基本土層

- I 黒褐色土(10YR3/1) As-Kkを50%含む。
- II 黒褐色土(10YR3/1)

4区基本土層図



4区南壁西側基本土層A-A'

- I 褐灰色土(10YR4/1) シルト~粗砂。直径0.5~1cmの小礫を多く含む。粘性弱い。締り強い。
- II 黒褐色土(10YR3/2) シルト~粗砂。直径0.2~1cmの小礫を多く含む。粘性弱い。締りやや強い。
- III-1 灰黄褐色土(10YR6/2) 直径0.1~1cm大のAs-Kk粒の一次堆積層。
- III-2 褐灰色土(10YR4/1) As-Bの一次堆積層。微砂~細砂。
- IV 黒褐色土(10YR3/1) シルト~細砂。粘性強い。締り強い。
- V 暗褐色土(10YR3/3) シルト~粗砂。直径1~5cmの礫を多量に含む。
- VI にぶい黄褐色土(10YR4/3) 細砂~粗砂。直径1~5cmの小礫、直径20~30cm大の礫を多く含む。

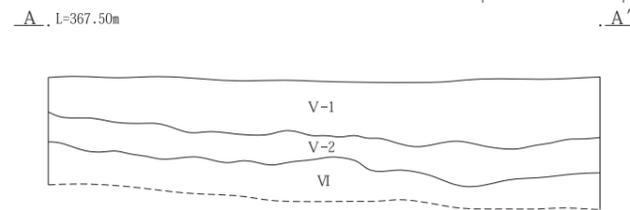
4区南壁中側基本土層B-B'

- I 褐灰色土(10YR4/1) シルト~細砂。直径0.5~1cmの小礫を多く含む。粘性弱い。締り強い。
- II 黒褐色土(10YR3/2) シルト~粗砂。As-Kk混じる。直径0.2~1cmの礫を僅かに含む。粘性弱い。締りやや強い。
- IV 褐灰色土(10YR4/1) シルト~細砂。粘性やや強い。締りやや弱い。
- V 暗褐色土(10YR3/3) シルト~粗砂。直径0.5~1cmの小礫をまばらに含む。灰黄褐色土(10YR4/2)シルト~細砂を部分的に含む。
- VI にぶい黄褐色土(10YR4/3) 細砂~粗砂。直径1~5cmの小礫、直径20~30cm大の礫を多く含む。

4区南壁東側基本土層C-C'

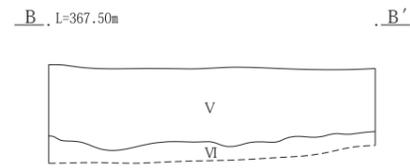
- I 褐灰色土(10YR4/1) シルト~粗砂。直径0.5~1cmの小礫を多く含む。粘性弱い。締り強い。
- II 黒褐色土(10YR3/2) シルト~粗砂。粘性強い。締り強い。
- IV 黒褐色土(10YR3/1) シルト~細砂。粘性強い。締り強い。
- V 灰黄褐色土(10YR4/2) シルト~粗砂。直径0.2~0.5cmの小礫をまばらに含む。粘性強い。締り強い。
- VI にぶい黄褐色土(10YR4/3) シルト~細砂。直径5~10cmの礫をまばらに含む。

4区旧石器1号・2号トレンチ土層断面図



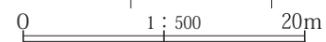
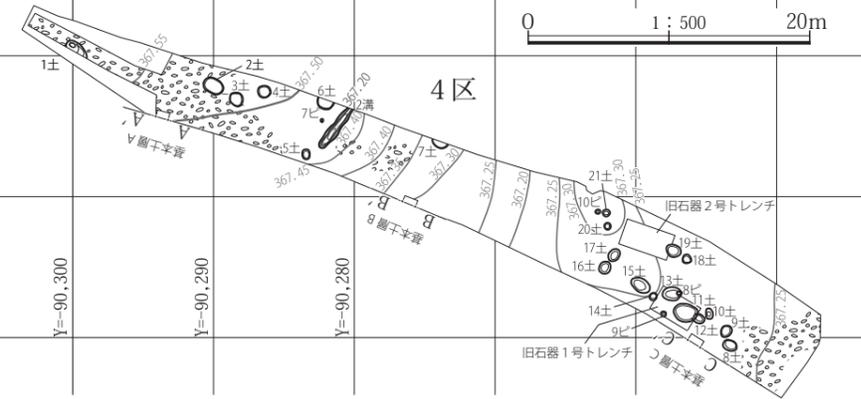
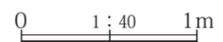
4区旧石器1号トレンチA-A'

- V-1 黒褐色土(10YR3/1) シルト~細砂。粘性強い。締り強い。
- V-2 褐灰色土(10YR4/1) シルト~微砂。粘性強い。締りやや弱い。
- VI 上方は、灰黄褐色土(10YR5/2) シルト~粗砂。直径1~3cmの礫をまばらに含む。下方は、にぶい黄褐色土(10YR5/3) 細砂~粗砂。直径1~10cmの礫を多く含む。

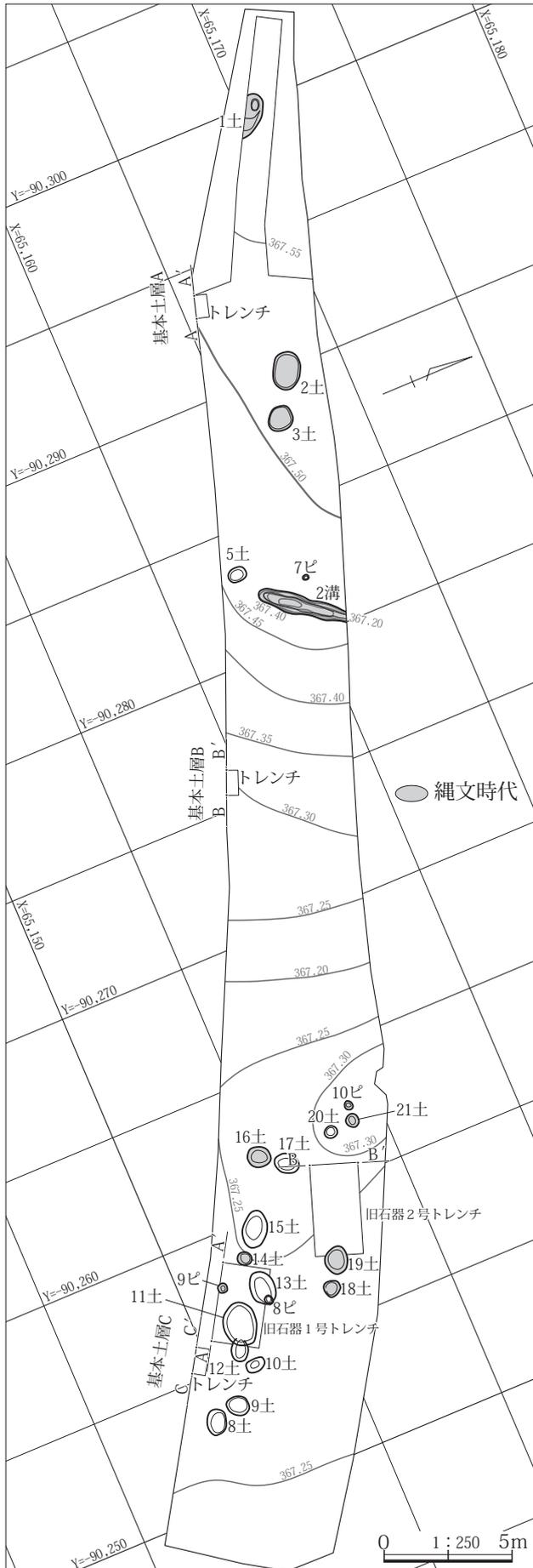


4区旧石器2号トレンチB-B'

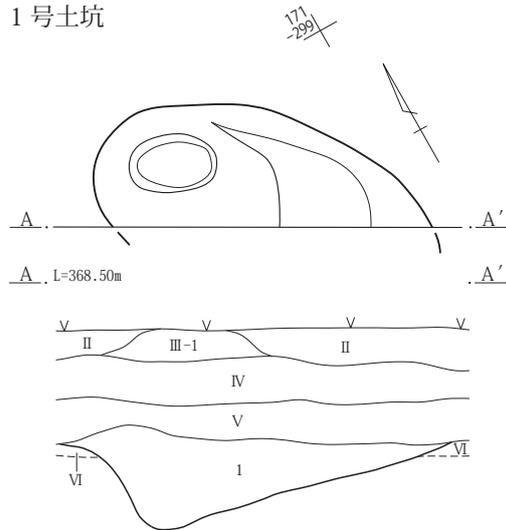
- V 褐灰色土(10YR4/1) シルト~細砂。粘性弱い。締り弱い。
- VI にぶい黄褐色土(10YR5/3) シルト~細砂。下部で直径1~10cm大の礫を多く含む。粘性やや強い。締り強い。



第9図 八幡原遺跡全体図と旧石器トレンチ及び各調査区の土層断面図



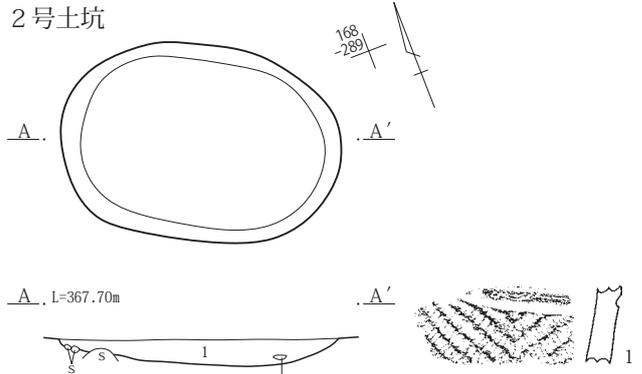
1号土坑



1号土坑

- II 黒褐色土(10YR3/2) シルト～粗砂。直径0.2～1cmの小礫を多く含む。粘性弱い。締りやや強い。
- III-1 灰黄褐色土(10YR6/2) 直径0.1～1cm大のAs-Kkの一次堆積層。
- IV 黒褐色土(10YR3/1) シルト～細砂。粘性強い。締り強い。
- V 暗褐色土(10YR3/3) シルト～細砂。直径1～5cmの礫を多量に含む。
- VI にぶい黄褐色土(10YR4/3) 細砂～粗砂。直径1～5cmの少礫、直径20～30cm大の礫を多く含む。
- 1 黒褐色土(10YR3/1) シルト～細砂。直径10cmの礫を多く含む。粘性やや強い。締りやや強い。

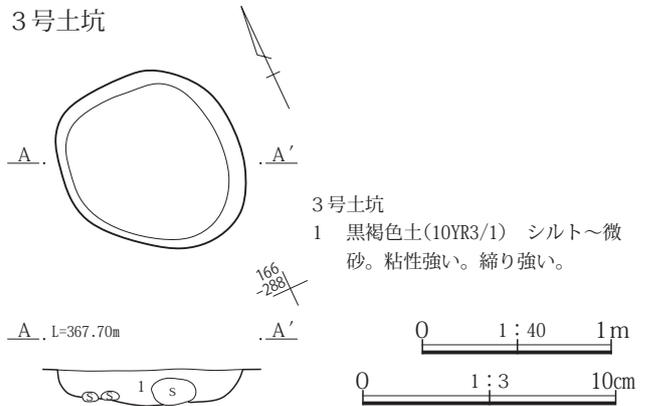
2号土坑



2号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2) シルト～粗砂。直径0.2～0.5cm大の小礫を多く含む。粘性弱い。締りやや強い。

3号土坑



3号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/1) シルト～微砂。粘性強い。締り強い。

第10図 八幡原遺跡4区縄文時代の遺構全体図、1号土坑～3号土坑

あると考えられる。

14号土坑(第9～11図 PL.5)

位置 X=65,152・65,153 Y=-90,258・-90,259

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-31°-E

規模 長軸0.56m 短軸0.50m 深さ0.13m

検出・埋没状況 粘性のやや強い黒褐色土主体である。

断面形は台形を呈する。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から縄文時代であると考えられる。

16号土坑(第9～11図 PL.5)

位置 X=65,154・65,155 Y=-90,261・-90,262

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-36°-E

規模 長軸0.91m 短軸0.81m 深さ0.56m

検出・埋没状況 埋土は、粘性のやや強い褐灰色土が主体で、下層は灰黄褐色土である。断面形は不整形である。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から縄文時代であると考えられる。

18号土坑(第9～11図 PL.6)

位置 X=65,155 Y=-90,256

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-7°-W

規模 長軸0.63m 短軸0.61m 深さ0.18m

検出・埋没状況 埋土は、粘性のやや強い褐灰色土が主体である。断面形は台形を呈する。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から縄文時代であると考えられる。

19号土坑(第9・10・12図 PL.6)

位置 X=65,155・65,156 Y=-90,256・-90,257

重複 なし。

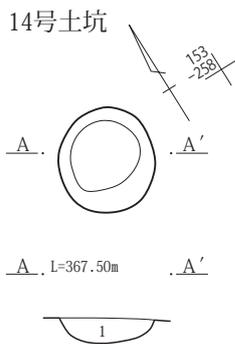
平面形 楕円形

長軸方位 N-51°-W

規模 長軸1.05m 短軸0.88m 深さ0.21m

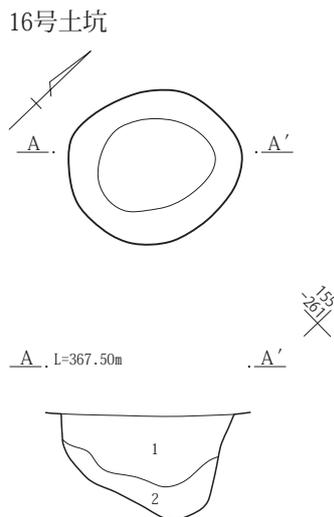
検出・埋没状況 埋土は、粘性のやや強い黒褐色土を主体としている。断面形は不整形である。

出土遺物 なし。



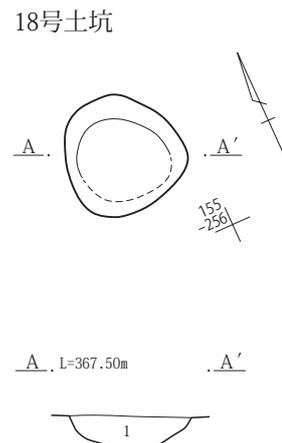
14号土坑

1 黒褐色土(10YR3/2) シルト～微砂。粘性やや強い。縮り強い。



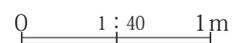
16号土坑

1 褐灰色土(10YR4/1) シルト～細砂。粘性やや強い。縮り強い。
2 灰黄褐色土(10YR4/2) シルト～微砂。粘性強い。縮り強い。



18号土坑

1 褐灰色土(10YR4/1) シルト～細砂。粘性やや強い。縮りやや弱い。



第11図 14号土坑、16号土坑、18号土坑

調査所見 遺構の検出状況および埋土から縄文時代であると考えられる。

21号土坑(第9・10・12図 PL. 6)

位置 X=65,158・65,159 Y=-90,261・-90,262

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-59°-W

規模 長軸0.51m 短軸0.50m 深さ0.21m

検出・埋没状況 埋土は、粘性のやや強い黒褐色土が主体である。断面形は台形を呈する。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から縄文時代であると考えられる。

(2)ピット

7号ピット(第9・10・12図 PL. 6)

位置 X=65,165 Y=-90,282

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-7°-W

規模 長軸0.24m 短軸0.20m 深さ0.25m

検出・埋没状況 埋土は、小礫を含む黒褐色土が主体である。断面形は逆三角形を呈する。

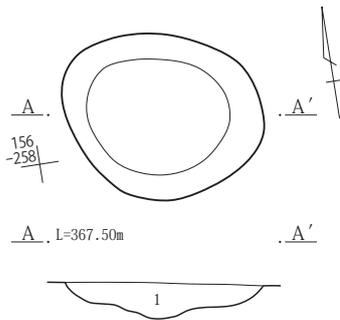
出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から縄文時代であると考えられる。

9号ピット(第9・10・12図 PL. 7)

位置 X=65,151 Y=-90,257・-90,258

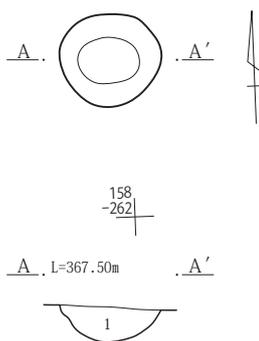
19号土坑



19号土坑

1 黒褐色土(10YR3/1) シルト～微砂。粘性やや強い。縮り強い。

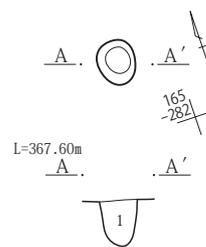
21号土坑



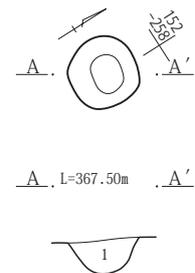
21号土坑

1 黒褐色土(10YR3/1) シルト～細砂。粘性やや強い。縮りやや強い。

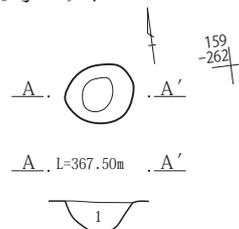
7号ピット



9号ピット



10号ピット



7号ピット

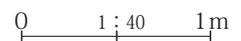
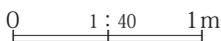
1 黒褐色土(10YR3/2) シルト～細砂。直径0.2～0.3cmの小礫をまばらに含む。粘性やや強い。縮りやや強い。

9号ピット

1 灰黄褐色土(10YR4/2) シルト～細砂。粘性やや強い。縮りやや強い。

10号ピット

1 黒褐色土(10YR3/1) シルト～細砂。粘性やや強い。縮りやや強い。



第12図 19号土坑、21号土坑、7号ピット、9号ピット、10号ピット

重複 なし。

平面形 隅丸方形

長軸方位 N-77°-W

規模 長軸0.36m 短軸0.35m 深さ0.19m

検出・埋没状況 埋土は、粘性のやや強い灰黄褐色土が主体である。断面形は台形を呈する。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から縄文時代であると考えられる。

10号ピット(第9・10・12図 PL. 7)

位置 X=65,158・65,159 Y=-90,262

重複 なし。

平面形 隅丸三角形

長軸方位 N-86°-E

規模 長軸0.37m 短軸0.30m 深さ0.20m

検出・埋没状況 埋土は、粘性のやや強い黒褐色土が主体である。断面形は逆三角形を呈する。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から縄文時代であると考えられる。

(3)溝

2号溝(第9・10・13図 PL. 7)

位置 X=65,163~65,166 Y=-90,280~-90,282

重複 なし。

形状 北東から南西方向へのほぼ直線の溝である。底面には地山の礫が露出し、比高は0.28mである。

走向方位 N-38°-E

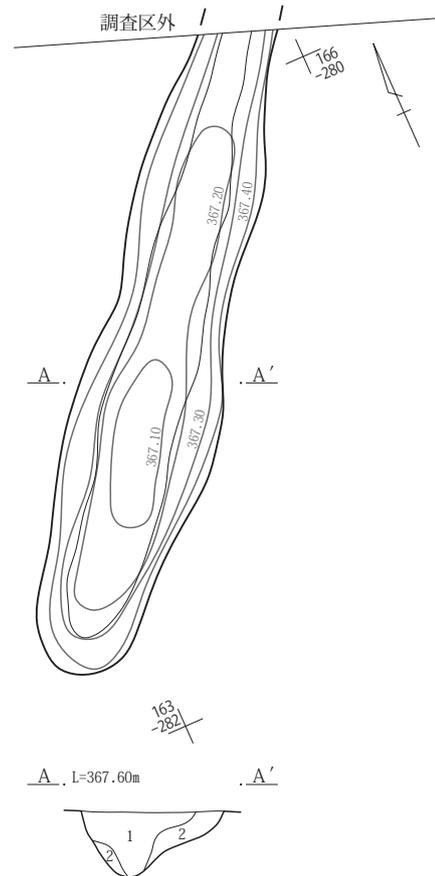
規模 全長3.50m以上 最大幅0.80m 最深部0.40m

検出・埋没状況 埋土は、小礫をまばらに含む黒褐色土が主体で、断面形はV字状である。

出土遺物 なし。

調査所見 埋没土および周囲の状況から弥生時代以前と考えられる。

2号溝



2号溝

- 1 黒褐色土(10YR3/1) シルト～細砂。直径0.2～0.3cmの小礫をまばらに含む。粘性やや強い。締り弱い。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) シルト～細砂。粘性やや強い。締り弱い。

0 1:40 1m

第13図 2号溝

第3項 弥生時代の遺構と遺物

検出された弥生時代の遺構は土坑10基、ピット1基である。この時代の遺構は、4区で検出された。遺物は9～11・15・17・20号土坑から出土している。

(1)土坑

5号土坑(第9・14・15図 PL. 7)

位置 X=65,162・65,163 Y=-90,283

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-5°-W

規模 長軸0.71m 短軸0.55m 深さ0.12m

検出・埋没状況 埋土は、粘性の強い黒褐色土が主体である。断面形は逆三角形を呈する。

出土遺物 中期後半の弥生土器が出土したが、図示には至らなかった。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から弥生時代中期であると考えられる。

8号土坑(第9・14・15図 PL. 8)

位置 X=65,149 Y=-90,252・-90,253

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-64°-W

規模 長軸1.01m 短軸0.74m 深さ0.13m

検出・埋没状況 埋土は、粘性の強い褐灰色土が主体である。断面形は台形を呈する。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から弥生時代であると考えられる。

9号土坑(第9・14・15図 PL. 8・21)

位置 X=65,150 Y=-90,253

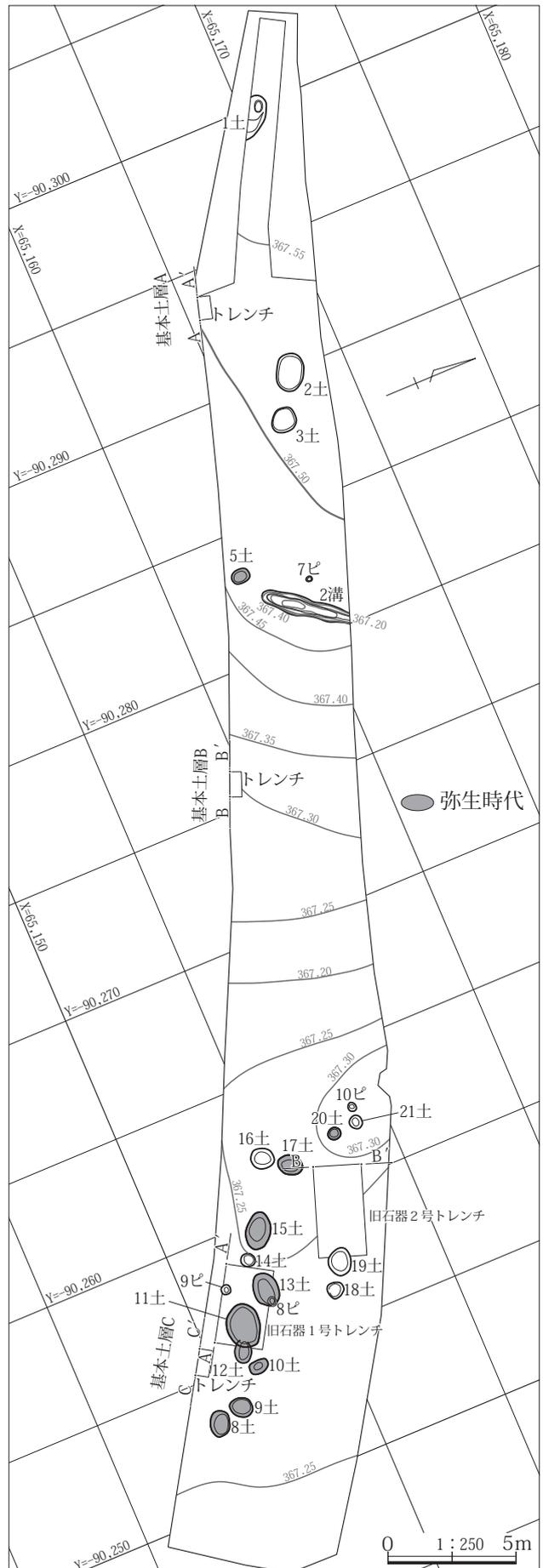
重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-27°-E

規模 長軸0.88m 短軸0.73m 深さ0.20m

検出・埋没状況 埋土は、粘性の弱い灰黄褐色土を主体とし、断面形は不整形である。



第14図 八幡原遺跡4区弥生時代の遺構全体図

出土遺物 弥生土器甕胴部片 1点(第15図1)が出土した。
調査所見 出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。

10号土坑(第9・14・16図 PL. 8・21)

位置 X=65,151・65,152 Y=-90,254・-90,255

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-1°-W

規模 長軸0.73m 短軸0.51m 深さ0.41m

検出・埋没状況 埋土は、粘性の強い灰黄褐色土が主体で、上層は黒褐色土である。断面形は台形を呈する。

出土遺物 弥生時代中期の甕胴～底部片(第16図2)が出土した。

調査所見 遺構の検出状況および遺物から、弥生時代中期であると考えられる。

11号土坑(第9・14・16図 PL. 8・21)

位置 X=65,151・65,152 Y=-90,255～-90,257

重複 12号土坑に後出する。

平面形 楕円形

長軸方位 N-68°-W

規模 長軸1.67m 短軸1.29m 深さ0.30m

検出・埋没状況 埋土は、粘性の弱い灰黄褐色土が主体である。断面形は逆三角形を呈する。

出土遺物 埋土中から弥生土器5点が出土した。器種および部位は、筒形土器口縁部片 1点(第16図3)、壺胴部片 1点(第16図4)、甕胴部片 1点(第16図5)、壺底部片 2点(第16図6・7)である。3～7は中期中葉に分類される。土器のほかに剥片 1点(第16図8)が出土した。

調査所見 遺構の検出状況および出土遺物から弥生時代中期中葉であると考えられる。

12号土坑(第9・14・17図 PL. 8)

位置 X=65,151 Y=-90,255

重複 11号土坑に先行する。

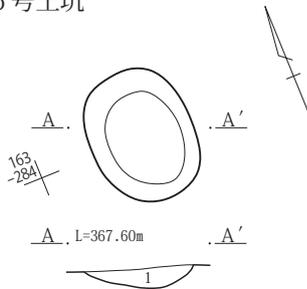
平面形 楕円形か

長軸方位 N-62°-W

規模 長軸0.93m以上 短軸0.65m 深さ0.20m

検出・埋没状況 埋土は、粘性の弱い褐灰色土が主体である。断面形は台形か。

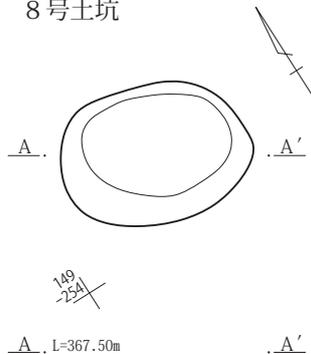
5号土坑



5号土坑

1 黒褐色土(10YR3/2) シルト～微砂。粘性強い。縮りやや強い。

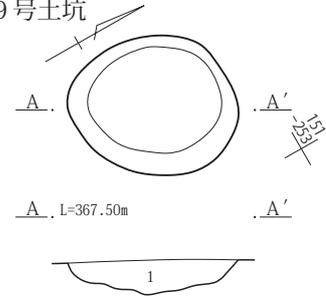
8号土坑



8号土坑

1 褐灰色土(10YR4/1) シルト～微砂。粘性強い。縮りやや弱い。

9号土坑



9号土坑

1 灰黄褐色土(10YR4/2) シルト～微砂。粘性弱い。縮りやや強い。

0 1:40 1m



0 1:3 10cm

第15図 5号土坑、8号土坑、9号土坑と出土遺物

出土遺物 埋土中から後期の弥生土器片が出土したが、細片のため図示には至らなかった。

調査所見 遺構の検出状況および遺物から、弥生時代後期であると考えられる。

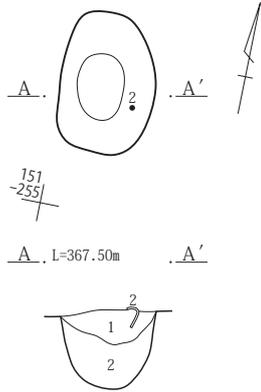
13号土坑(第9・14・17図 PL. 9)

位置 X=65,152・65,153 Y=-90,256~-90,258

重複 8号ピットに先行する。

平面形 楕円形

10号土坑



10号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2) シルト~微砂。粘性強い。締り強い。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) シルト~細砂。粘性強い。締り強い。

長軸方位 N-87°-W

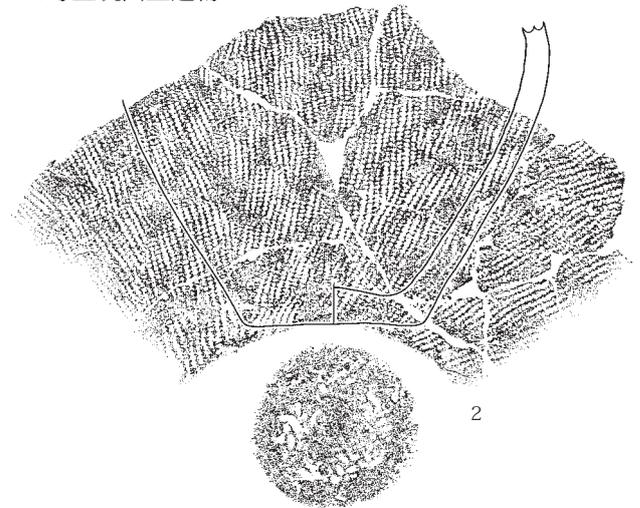
規模 長軸1.33m 短軸0.94m 深さ0.26m

検出・埋没状況 埋土は、粘性のやや弱い褐灰色土が主体である。断面形は台形を呈する。

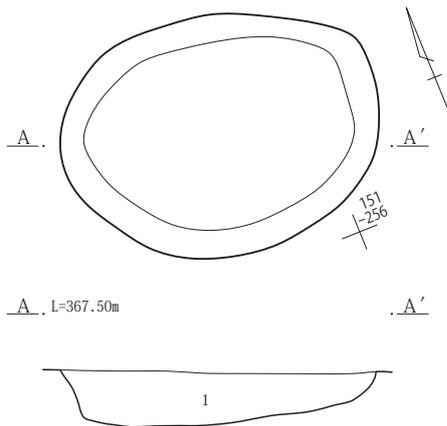
出土遺物 中期後半の弥生土器片が出土したが、細片のため図示には至らなかった。

調査所見 遺構の検出状況および遺物から弥生時代中期であると考えられる。

10号土坑出土遺物

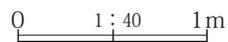


11号土坑

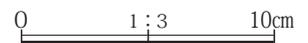
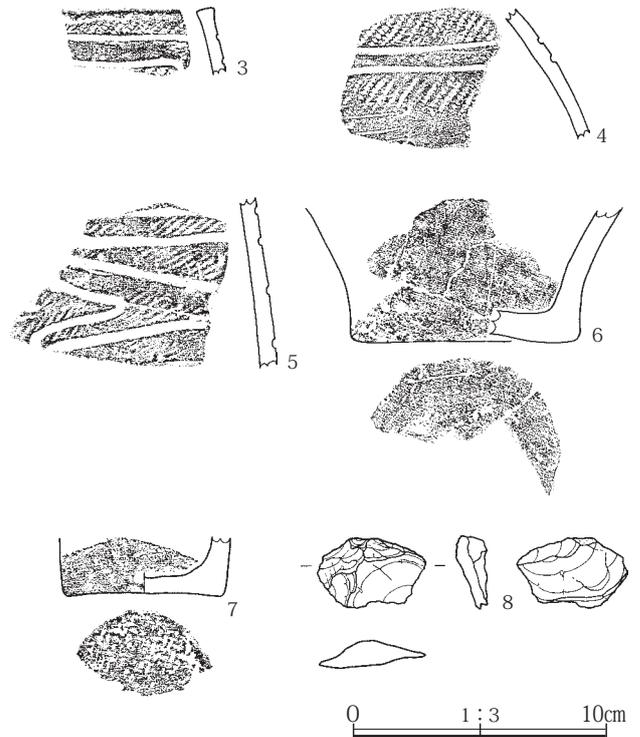


11号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) シルト~細砂。粘性弱い。締りやや強い。



11号土坑出土遺物



第16図 10号土坑、11号土坑と出土遺物

15号土坑(第9・14・17図 PL. 9・21)

位置 X65,153・65,154 Y=-90,259・-90,260

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-55°-W

規模 長軸1.46m 短軸0.93m 深さ0.40m

検出・埋没状況 埋土は、粘性の弱い灰黄褐色土が主体で、上層は黒褐色土である。断面形は台形を呈する。

出土遺物 弥生時代中期前葉の甕口縁部片(第17図9)が出土した。

調査所見 遺構の検出状況および出土遺物から、弥生時代中期前葉であると考えられる。

検出・埋没状況 埋土は、粘性のやや弱い黒褐色土が主体で、上層は褐灰色土である。断面形は台形を呈する。

出土遺物 弥生時代中期の甕胴部片(第18図10)が出土した。

調査所見 遺構の検出状況および出土遺物から、弥生時代中期であると考えられる。

20号土坑(第9・14・18図 PL. 9)

位置 X=65,157・65,158 Y=-90,261・-90,262

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-4°-W

規模 長軸0.50m 短軸0.46m 深さ0.21m

検出・埋没状況 埋土は、粘性のやや強い黒褐色土である。断面形は逆三角形を呈する。

出土遺物 弥生時代中期中葉の壺胴部片(第18図11)が出土した。

調査所見 遺構の検出状況および出土遺物から、弥生時代中期中葉であると考えられる。

17号土坑(第9・14・18図 PL. 9・21)

位置 X=65,155・65,156 Y=-90,261

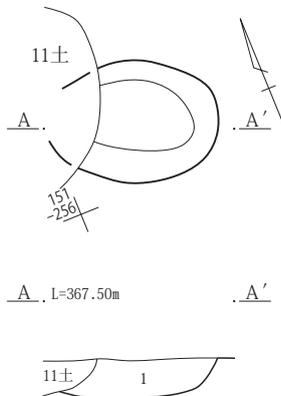
重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-39°-E

規模 長軸0.97m 短軸0.74m 深さ0.53m

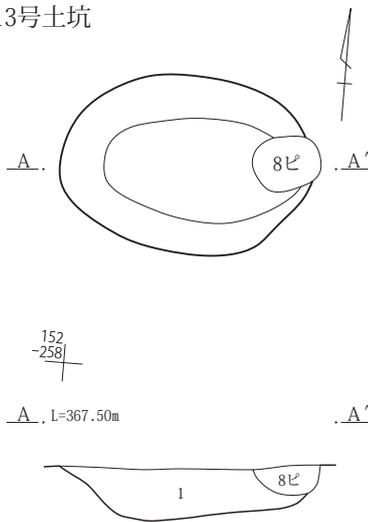
12号土坑



12号土坑

- 1 褐灰色土(10YR4/1) シルト～細砂。粘性弱い。縮りやや弱い。

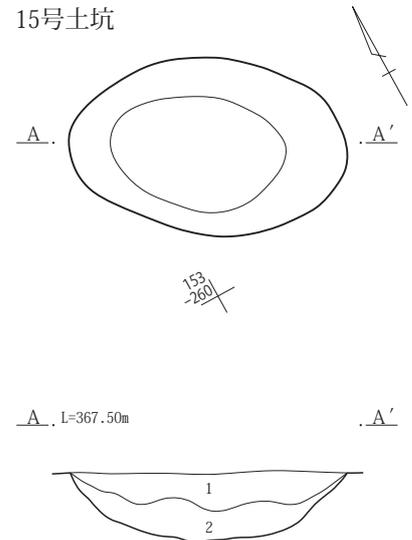
13号土坑



13号土坑

- 1 褐灰色土(10YR4/1) シルト～細砂。粘性やや弱い。縮り強い。

15号土坑



15号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2) シルト～細砂。粘性強い。縮りやや強い。
2 灰黄褐色土(10YR4/2) シルト～粗砂。粘性弱い。縮りやや強い。

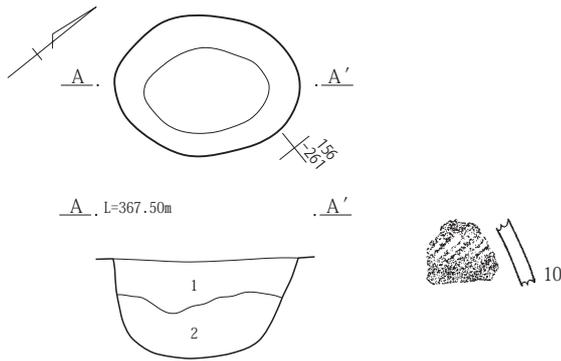


0 1:40 1m

0 1:3 10cm

第17図 12号土坑、13号土坑、15号土坑と出土遺物

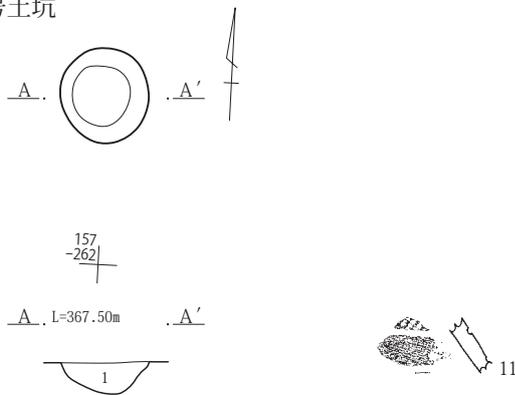
17号土坑



17号土坑

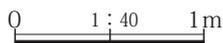
- 1 褐灰色土(10YR4/1) シルト～微砂。粘性弱い。締り強い。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) シルト～粗砂。粘性やや弱い。締りやや強い。

20号土坑



20号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/1) シルト～微砂。粘性やや強い。締り強い。



第18図 17号土坑、20号土坑と出土遺物

(2) ピット

8号ピット(第9・10・19図 PL.10)

位置 X = 65,153 Y = -90,256・-90,257

重複 13号土坑に後出する。

平面形 隅丸長方形

長軸方位 N-67°-E

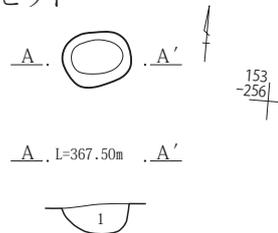
規模 長軸0.35m 短軸0.28m 深さ0.17m

検出・埋没状況 埋土は、粘性の強い黒褐色土が主体である。断面形は台形を呈する。

出土遺物 なし。

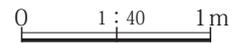
調査所見 遺構の検出状況および埋土から弥生時代であると考えられる。

8号ピット

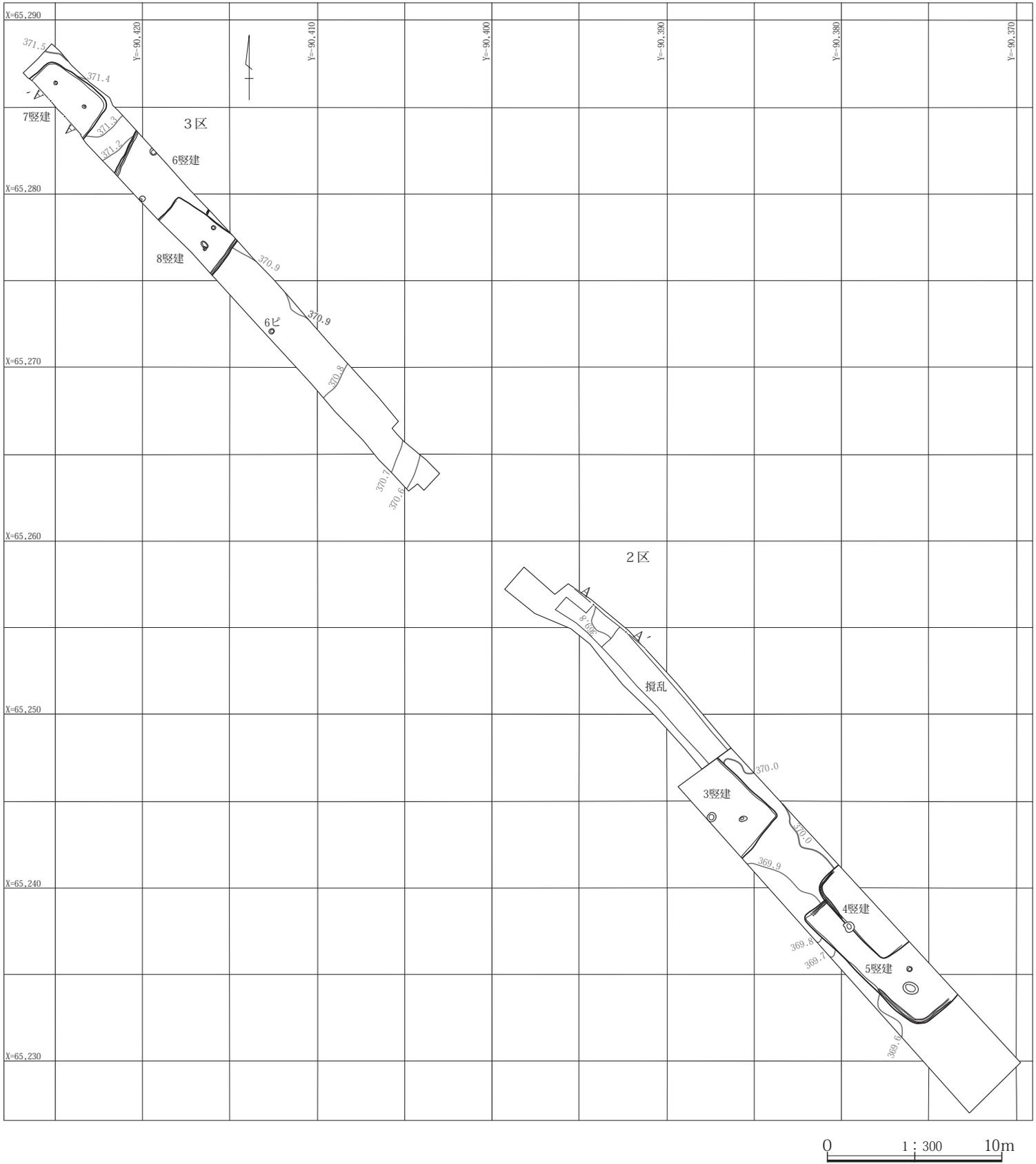


8号ピット

- 1 黒褐色土(10YR3/2) シルト～細砂。粘性強い。締りやや強い。



第19図 8号ピット



第21図 八幡原遺跡2区・3区古墳時代以降の遺構全体図

床面積 0.528㎡以上

主軸方位 N-9°-E

検出・埋没状況 1号溝の西に位置する。埋没土は粒子の細かい黒色土を主体とし、焼土を含んでいる。

柱穴 確認できなかった。

炉 確認できなかった。しかし、埋土に焼土を含む本遺構は、竪穴建物の炉である可能性も考えられる。

貯蔵穴・壁際溝 確認できなかった。

掘方 床面から0.12mほど下位で掘方面を検出した。また、工具等による掘削の痕跡を確認した。貼床は黒褐色土が主体である。

遺物と出土状況 図示できた遺物は、土師器高杯の杯部片(第22図1)と脚部片(第22図2)、土師器甕胴部片(第22図3)である。このうち、床直上からの遺物は、甕(3)である。

調査所見 詳細な時期は不明であるが、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

2号竪穴建物(第9・20・23・24図 PL.11・12・21 遺物観察表P.47)

位置 X=65,198~65,206 Y=-90,340~-90,350

重複 5号ピットに先行する。

平面形 隅丸長方形か。

規模 長軸10.69m 短軸5.11m以上 残存壁高0.48m

床面積 40.464㎡以上

主軸方位 N-42°-E

検出・埋没状況 令和3年度に北西部分を、令和4年度に南東部分を調査した。埋没土は黒褐色土を主体とし、壁際は黒色土が混入し、自然埋没であると考えられる。床面のほぼ全体に焼土が広がり、炭化材も検出された。また、貯蔵穴とP3付近で、硬化面を確認した。

柱穴 主柱穴3基、壁柱穴を5基検出した。規模は下記の通りである。

P1 長径0.69m 短径0.58m 深さ0.84m

P2 長径1.01m 短径0.90m 深さ0.81m

P3 長径1.08m 短径0.78m 深さ0.78m

P4 長径0.31m 短径0.26m 深さ0.13m

P5 長径0.31m 短径0.30m 深さ0.53m

P6 長径0.42m 短径0.37m 深さ0.47m

P7 長径0.23m 短径0.14m 深さ0.18m

P8 長径0.27m以上 短径0.54m 深さ0.33m

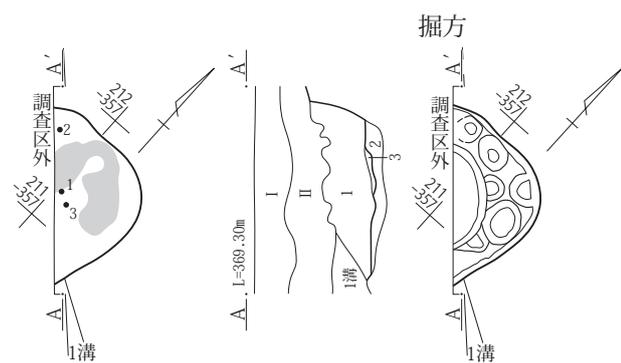
主柱穴P1・P2の柱間の距離は3.01m、P2・P3間は3.02mである。

炉 建物の北壁から約3m付近で2基確認した。1号炉の規模は0.59×0.40m、2号炉は0.72×0.37mで近接している。1号炉からは微量の炭化材も出土している。

貯蔵穴 長軸1.08m、短軸0.84m、深さ0.37mで南東隅に位置する。完形の土師器鉢が出土した。

壁際溝 確認できなかった。

掘方 床面から厚さ0.04~0.34mほどの貼床を検出し



1号竪穴建物西壁

I 表土。

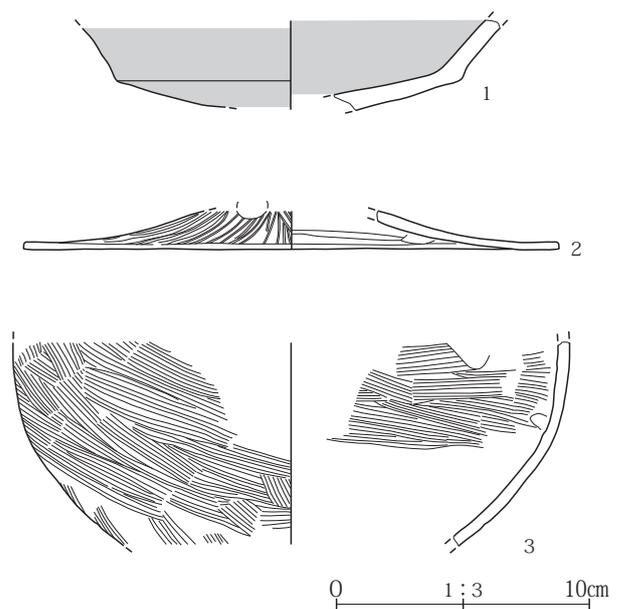
II 黒褐色土(10YR2/2) As-Kk軽石を含む。締りあり。

1 黒色土(10YR2/1) 粒子細かい。締りあり。

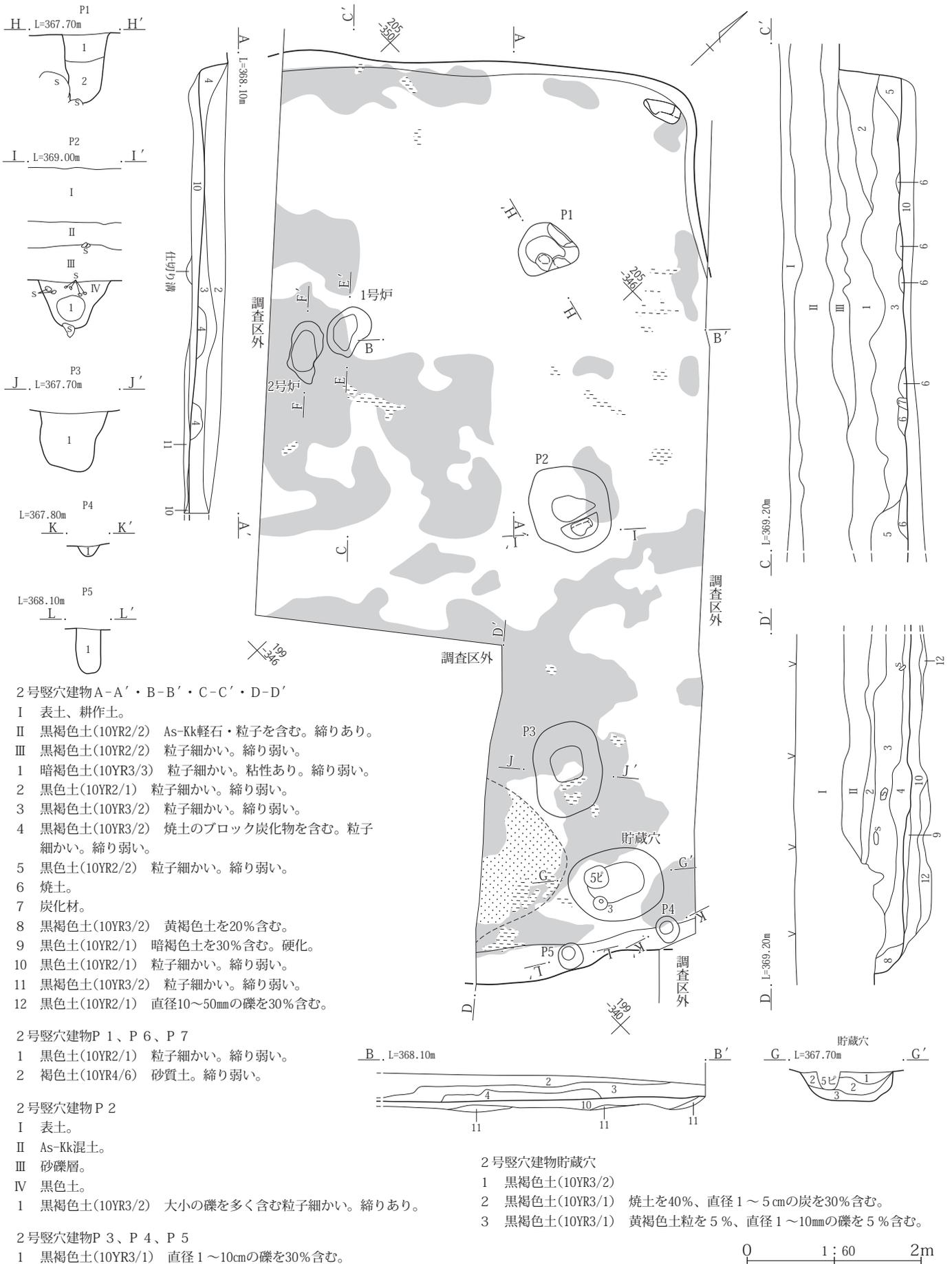
2 黒褐色土(10YR3/2) 粒子細かい。締り弱い。

3 焼土。

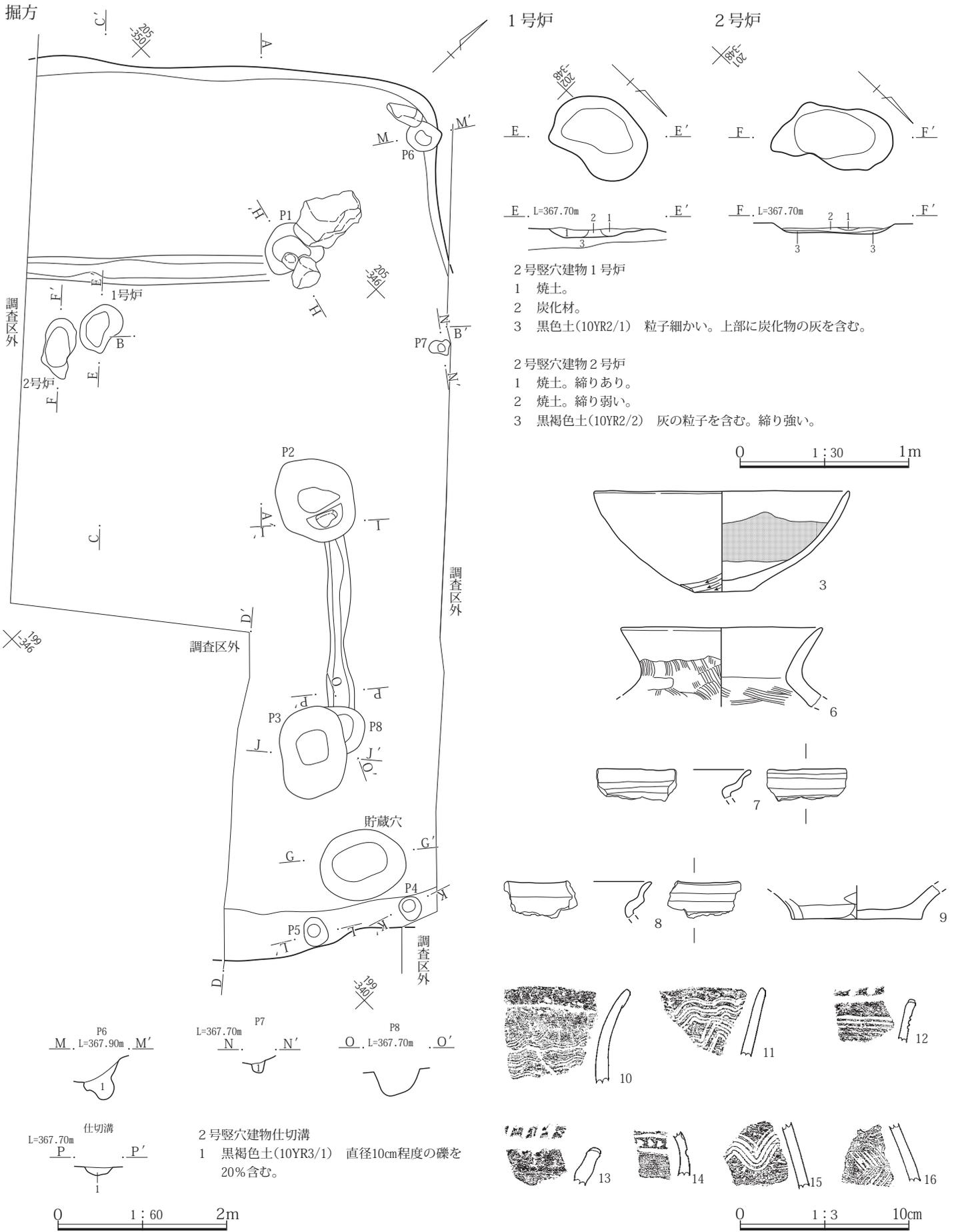
0 1:60 2m



第22図 1号竪穴建物と出土遺物



第23図 2号竪穴建物



第24図 2号竪穴建物 掘方、1号炉・2号炉と出土遺物

た。基盤の礫層に黒褐色土を施し貼床としている。また、P2とP3間と、P1から南西方向に伸びる間仕切り溝を確認した。

遺物と出土状況 遺物は、土師器5点、弥生土器7点を図示し、土師器4点を写真掲載した。土師器は、高杯胴部片2点(PL.21- 1・2)、ほぼ完形の鉢1点(第24図3)、埴口縁部片1点(PL.21- 4)、埴胴部片1点(PL.21- 5)、甕口縁部片1点(第24図6)、S字状口縁台付甕2点(第24図7・8)、甕底部片1点(第24図9)である。このうち、土師器鉢(3)が貯蔵穴内から出土している。弥生土器は、壺口縁部片3点(第24図10・11・13)、壺胴部片3点(第24図14~16)、鉢口縁部片1点(第24図12)で、全て埋土中からの出土である。

調査所見 出土遺物から、4世紀代であると考えられる。

3号竪穴建物(第9・21・25・26図 PL.13・22 遺物観察表P.47・48)

位置 X=65,241~65,247 Y=-90,383~-90,389

重複 なし。

平面形 隅丸方形か。

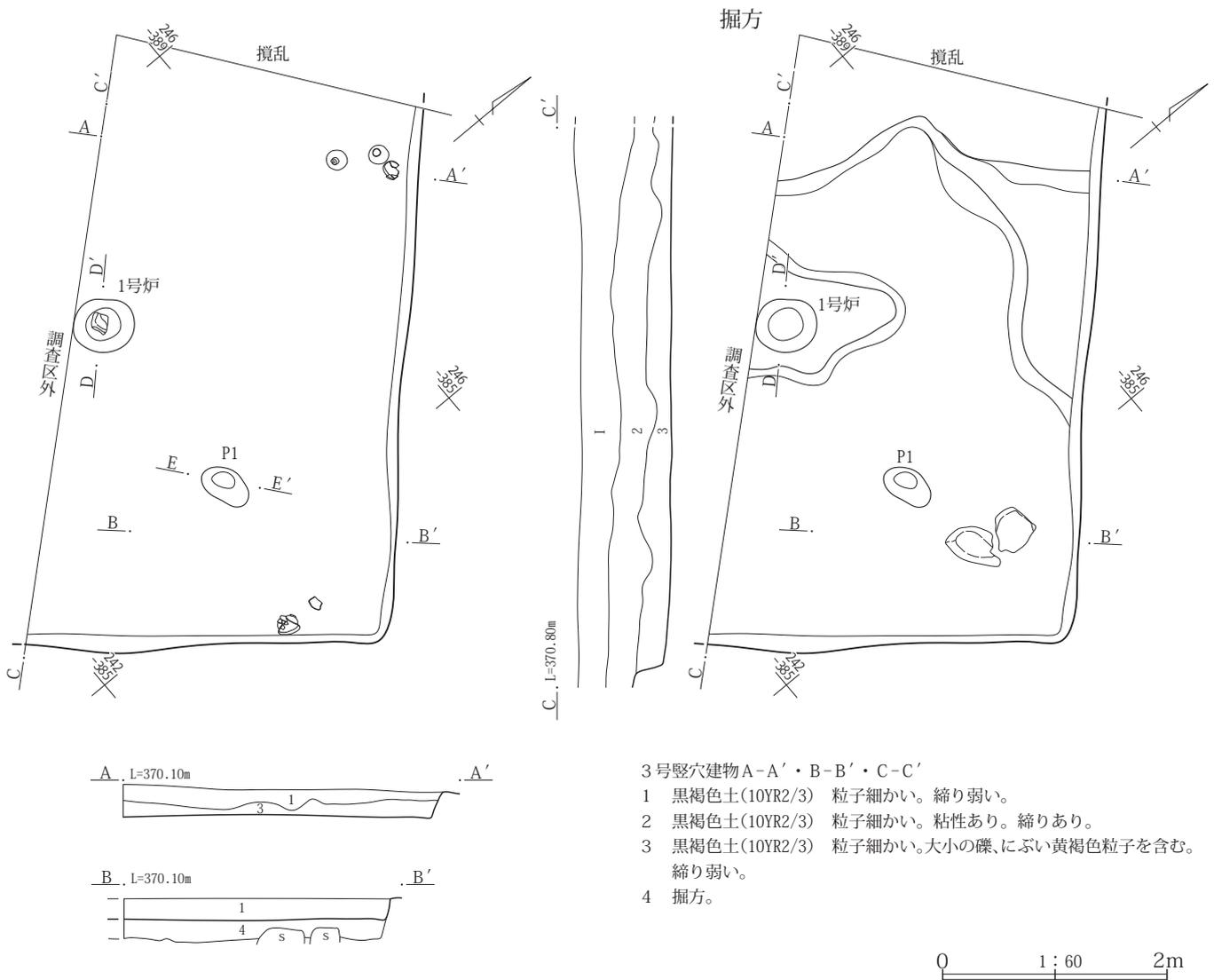
規模 長軸5.53m以上 短軸2.98m以上 残存壁高0.30m

床面積 14.624㎡以上

主軸方位 N-43°-E

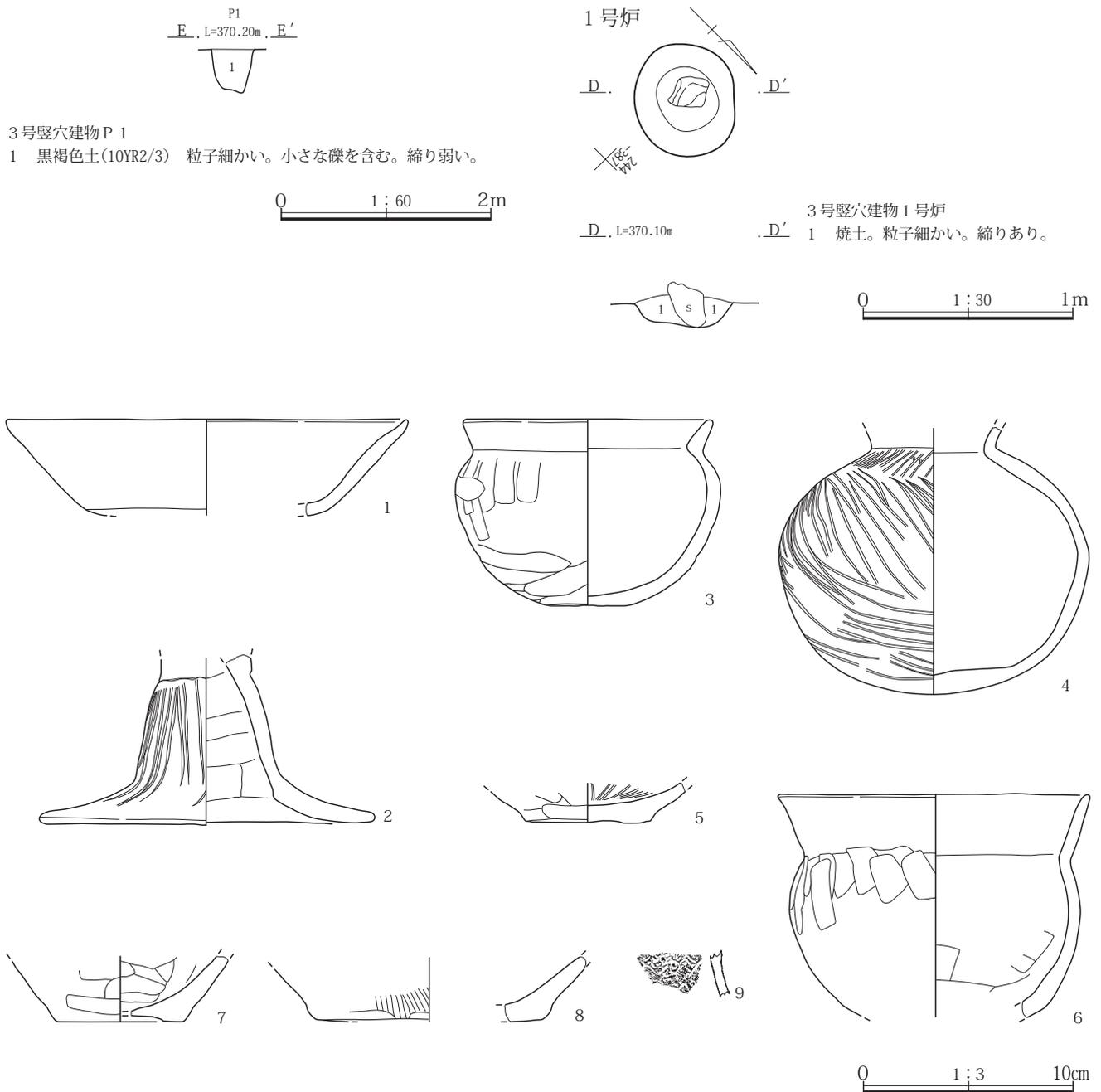
検出・埋没状況 令和3年度調査2区西端で検出、西壁は攪乱により壊されている。埋土は礫を含む黒褐色土が主体で、ほぼ水平堆積のため埋め戻された可能性が高い。**柱穴** 床面で支柱穴1本が検出された。規模は下記の通りである。

P1 長径0.44m 短径0.29m 深さ0.41m



第25図 3号竪穴建物

第3章 八幡原遺跡の遺構と遺物



第26図 3号竪穴建物と出土遺物

炉 P1の西1.78mに位置し、規模は長軸0.54m短軸0.48m、深さ0.12mである。ほぼ中心に大礫を検出したが、被熱の痕跡は認められない。

貯蔵穴・壁際溝 確認できなかった。

掘方 床面から0.12m下位で掘方面を検出した。南壁側は北壁側より10cmほど深く掘り込まれている。

遺物と出土状況 図示した遺物は、土師器8点、弥生土器1点である。土師器は、高杯杯部片1点(第26図1)、同脚部1点(第26図2)、鉢口縁~底部片1点(第26図3)、埴口縁部欠1点(第26図4)、壺胴部~底部片1点(第26

図5)、小型甕口縁~胴部片1点(第26図6)、甕胴部~底部片2点(第26図7・8)が、弥生土器は甕頸部片(第26図9)1点が出土した。このうち、床直上からの遺物は、小型甕(6)である。

調査所見 出土遺物から5世紀初頭から前半と考えられる。

4号竪穴建物(第9・21・27図 PL.14・22 遺物観察表 P.48)

位置 X=65,235~65,241 Y=-90,376~-90,381

重複 5号竪穴建物に後出する。

平面形 隅丸方形か。

規模 長軸5.96m 短軸2.00m以上 残存壁高0.23m

床面積 10.264㎡以上

主軸方位 N-48°-E

検出・埋没状況 埋没土はにぶい黄褐色土を主体とし、礫を含んでいる。

柱穴・炉・貯蔵穴 確認できなかった。

壁際溝 北壁から西壁の中央付近にかけて、幅0.22m、長さ3.27m以上、深さ0.04mの溝を確認した。

掘方 床面から厚さ0.24mほどの貼床を検出した。掘方の下層には礫が露出し、その上に暗褐色土の貼床を施し

ている。

遺物と出土状況 図示した遺物は、弥生土器甕胴部片1点(第27図1)、甕頸部片1点(第27図2)、黒曜石剥片(第27図3)である。土器は掘方から出土している。

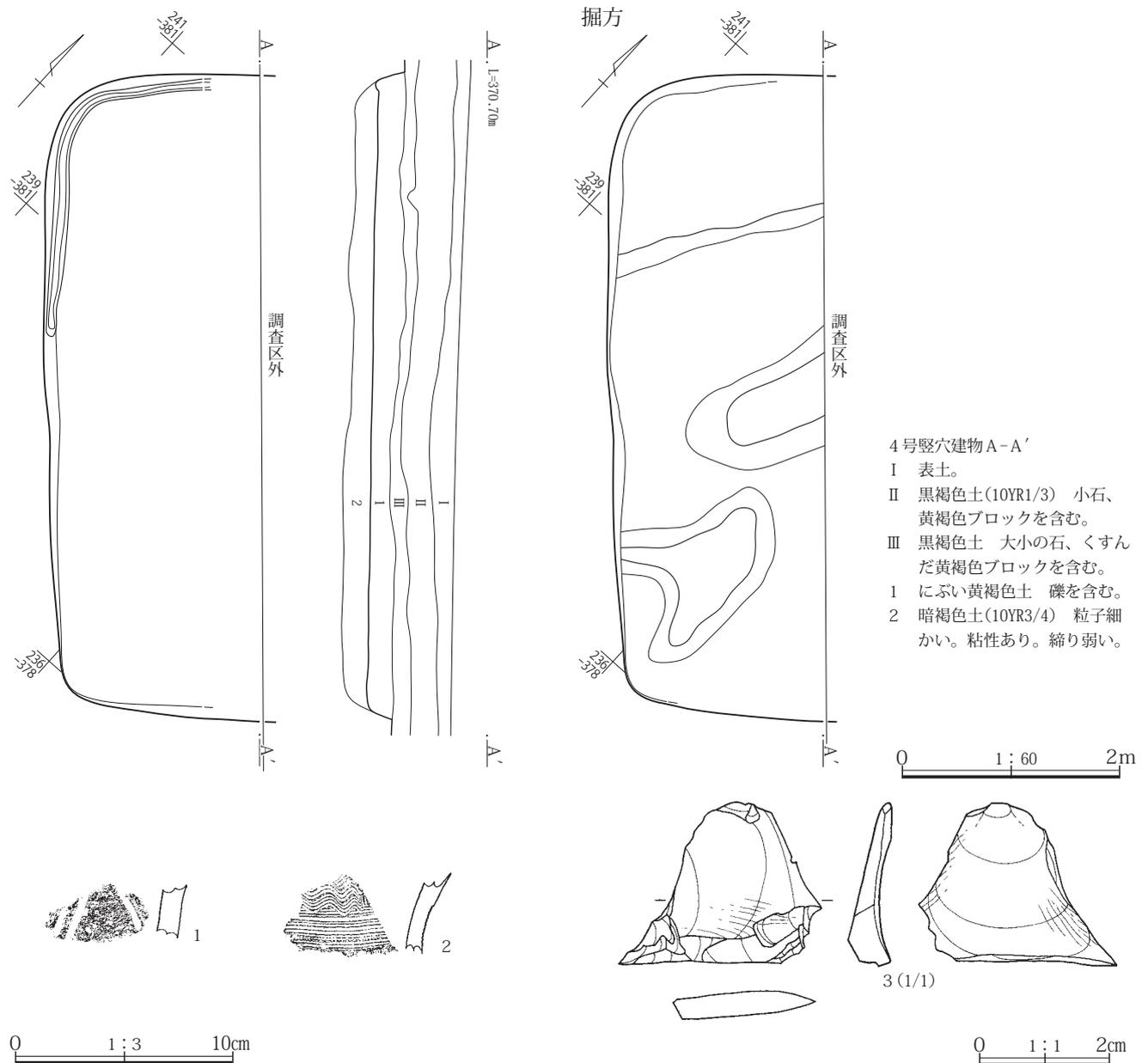
調査所見 出土遺物はいずれも混入である。5号竪穴建物との重複関係から4世紀以降であると考えられる。

5号竪穴建物(第9・21・28・29図 PL.14・15・22 遺物観察表P.48)

位置 X=65,232~65,240 Y=-90,373~-90,382

重複 4号竪穴建物に先行する。

平面形 隅丸方形か。



第27図 4号竪穴建物と出土遺物

規模 長軸9.20m 短軸3.33m以上 残存壁高0.38m

床面積 27.555㎡以上

主軸方位 N-45°-E

検出・埋没状況 埋没土は礫を含むにぶい黄褐色土を主体としている。

柱穴 床面で支柱穴を2基検出した。規模は下記の通りである。

P 1 長径0.59m 短径0.53m 深さ0.46m

P 2 長径0.89m 短径0.68m 深さ0.35m

P 1・P 2の柱間の距離は5.01mである。

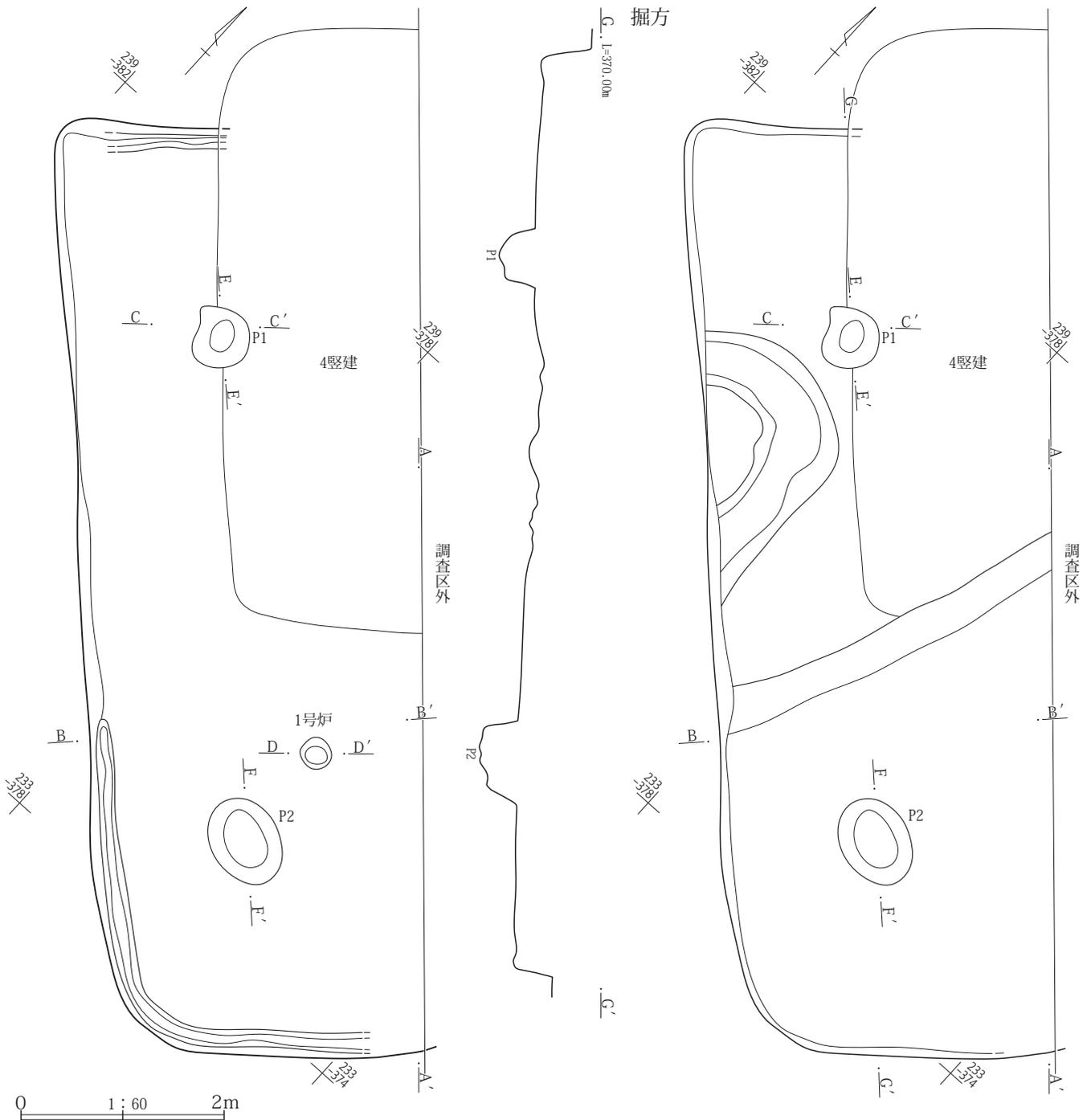
炉 P 2の北1.10mに位置する。規模は0.32×0.31mである。上層で焼土を確認した。

貯蔵穴 確認できなかった。

壁際溝 北壁側と西壁から南壁にかけて検出した。規模はそれぞれ、長さ1.00m以上、幅0.30m、深さ0.07m、長さ5.14m以上、幅0.31m、深さ0.16mである。

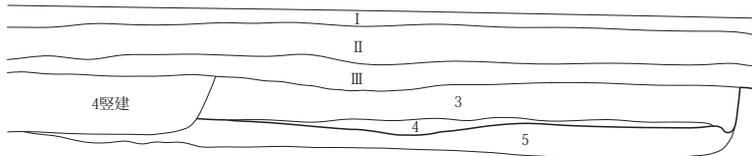
掘方 床面から厚さ0.22mほどの粘床を検出した。北西隅は礫が露出し、南側はほぼ平坦に掘削されている。

遺物と出土状況 遺物は、土師器5点、須恵器1点、弥生土器5点、石器1点を図示した。土師器は、器台脚部

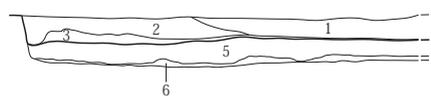


第28図 5号竪穴建物

A. L=370.70m

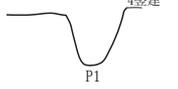


B. L=370.00m



B'

C. L=370.00m



A' 5号竖穴建物A-A'・B-B'

- I 表土。
- II 黒褐色土(10YR1/3) 小石、黄褐色ブロックを含む。
- III 黒褐色土 大小の石、くすんだ黄褐色ブロックを含む。
- 1 黒褐色土(10YR2/3) 粒子細かい。締りやや弱い。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 粒子細かい。粘性あり。締りあり。
- 3 にぶい黄褐色土 多量に礫を含む。
- 4 暗褐色土(10YR3/4) 粒子細かい。粘性あり。締り弱い。
- 5 にぶい黄褐色土 礫を含む。
- 6 暗褐色土(10YR3/4) 粒子細かい。焼土ブロックを含む。締りあり。

5号竖穴建物P1、P2

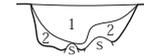
- 1 黒褐色土(10YR2/3) 粒子細かい。締りやや弱い。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 砂質土。締りあり。

0 1:60 2m

P1 E. L=369.60m E'



P2 F. L=369.60m F'



1号炉



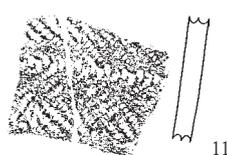
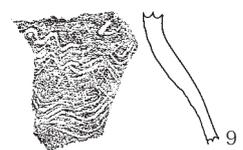
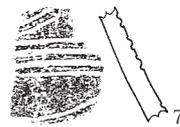
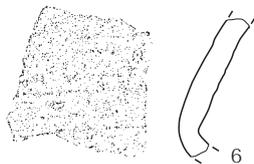
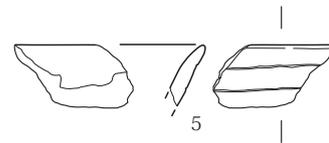
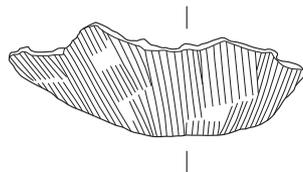
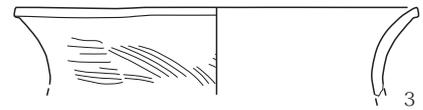
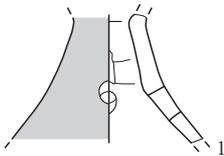
D. L=369.60m D'



5号竖穴建物1号炉

- 1 暗褐色土(10YR3/4)粒子細かい。焼土ブロックを含む。締りあり。
- 2 黒褐色土(10YR2/3)粒子細かい。締り弱い。
- 3 黒色土(10YR2/1)粒子細かい。粘性あり。締り弱い。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第29図 5号竖穴建物 1号炉と出土遺物

片1点(第29図1)、鉢口縁片1点(第29図2)、小型甕口縁部片1点(第29図3)、台付甕胴部片1点(第29図4)、甕口縁部片1点(第29図5)、須恵器甕頸部～口縁部下片1点(第29図6)が出土した。弥生土器は、壺頸部～胴部片1点(第29図9)、甕頸部～胴部片1点(第29図8)、甕胴部片3点(第29図7・10・11)、このうち、床直上から器台(1)が、炉から台付甕(4)が出土している。なお、弥生土器甕(第29図7・8)は、4号または5号竪穴建物出土であるが、5号竪穴建物出土遺物として掲載した。
調査所見 出土遺物から、4世紀代であると考えられる。

6号竪穴建物(第9・21・30・31図 PL.16・22 遺物観察表P.48・49)

位置 X=65,277~65,283 Y=-90,416~-90,421

重複 8号竪穴建物に先行する。

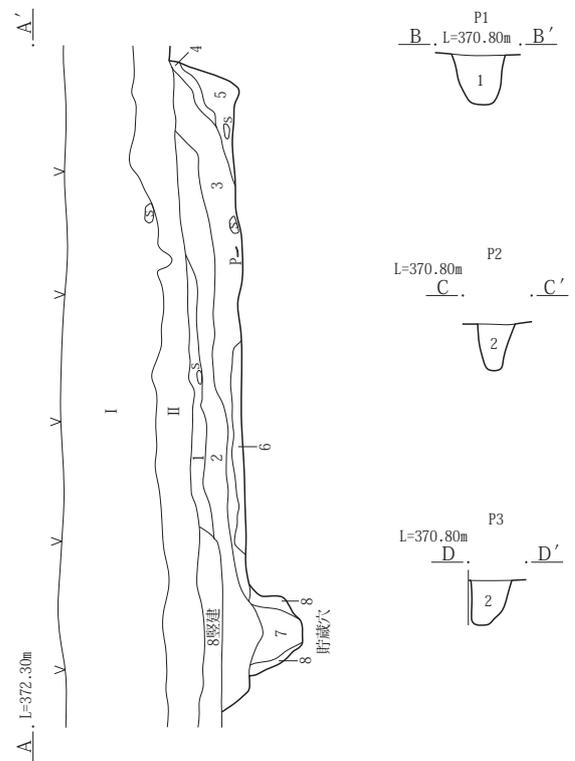
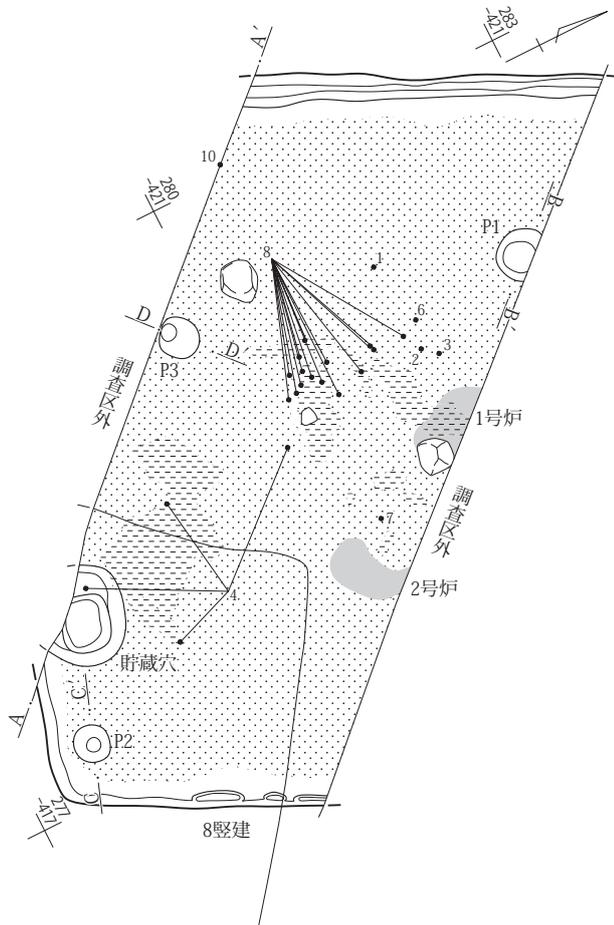
平面形 隅丸方形か。

規模 長軸5.83m 短軸2.68m以上 残存壁高0.48m

床面積 14.552㎡以上

主軸方位 N-29°-E

検出・埋没状況 調査区北端の7号竪穴建物の南東2.4mに位置する。埋没土は黄褐色土粒を含む黒褐色土を主体とし、レンズ状堆積をしているので自然埋没と考えられる。床面から炭化物を検出した。

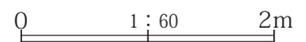


6号竪穴建物 A-A'

- I 黒褐色土(10YR3/1) As-Kkを50%含む。表土。
- II 黒褐色土(10YR3/1)
- I 暗褐色土(10YR3/3) 黄褐色土粒を5%含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) 黄褐色土粒を20%含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/3) 黄褐色土粒を20%含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2) 暗褐色土を20%含む。
- 5 黒褐色土(10YR3/1) 黄褐色土粒を5%含む。
- 6 暗褐色土(10YR3/3) 直径1~10mmの炭を30%含む。
- 7 黒褐色土(10YR3/2) 粘質土。(貯蔵穴埋土)
- 8 黒褐色土(10YR3/2) 暗褐色土を5%含む。(貯蔵穴埋土)

6号竪穴建物 P1、P2、P3

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 直径3~20cmの礫を10%含む。粘質土。
- 2 黒褐色土(10YR3/2) 粘質土。



第30図 6号竪穴建物

柱穴 床面で柱穴が3基検出された。P1とP3が主柱穴と考えられる。規模は下記の通りである。

P1 長径0.43m 短径0.29m 深さ0.39m

P2 長径0.31m 短径0.29m 深さ0.38m

P3 長径0.32m 短径0.32m 深さ0.37m

P1・P3の柱間の距離は2.88mである。

炉 P1の南東1.44mの位置に1号炉、その1.34m南東に2号炉を検出した。

貯蔵穴 建物の南東隅に、長軸0.80m、短軸0.46m以上、深さ0.48mの不整形の貯蔵穴を検出した。埋没土は黒褐色土の粘質土が主体である。埋土中から小型壺の一部が出土している。

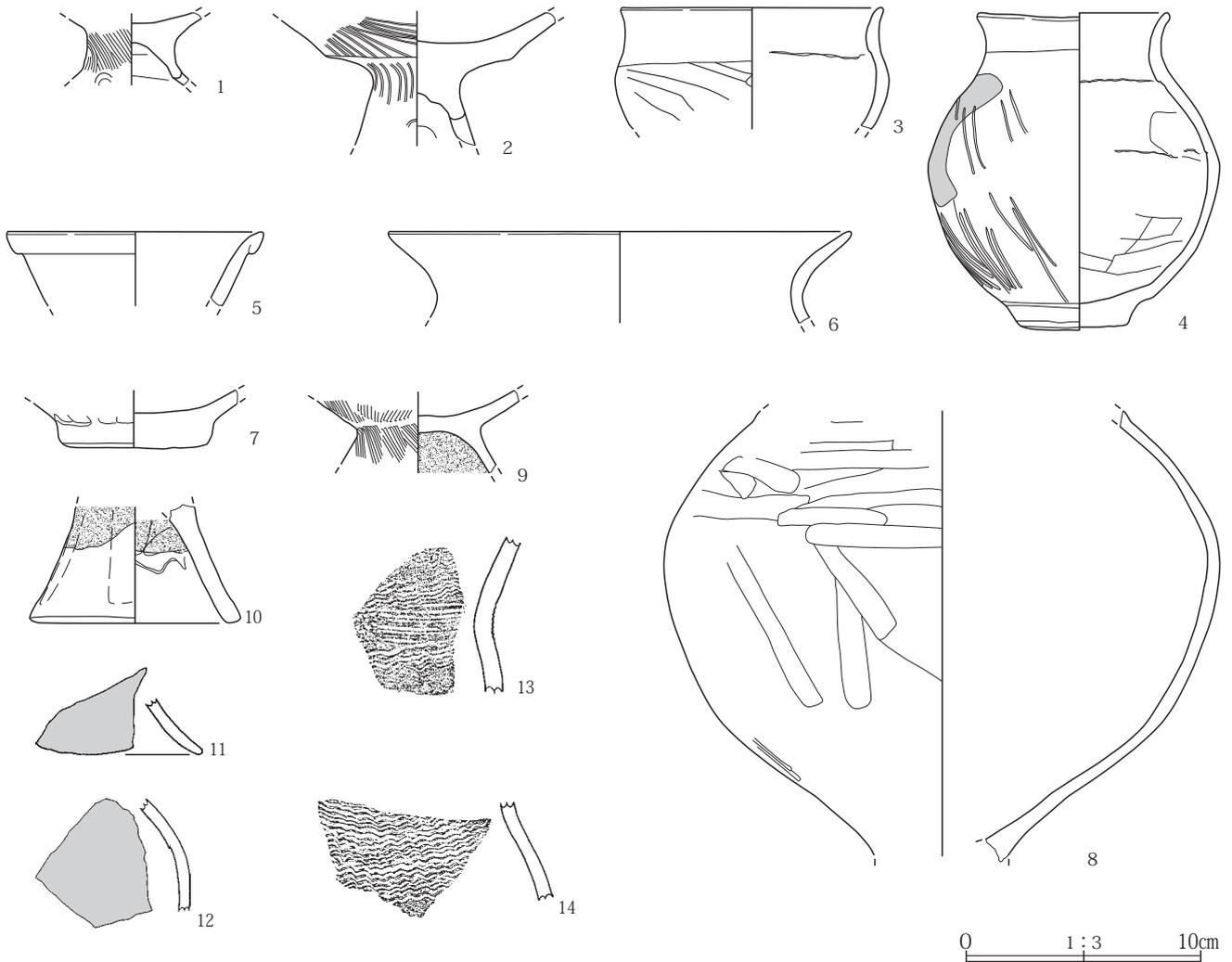
壁際溝 西壁側に長さ2.77m以上、幅0.26m、深さ0.06m、東壁側に長さ1.05m以上、幅0.13m、深さ0.03mの溝を確認、東壁側の溝は断続している。

掘方 貼床は存在せず、地山の混入物のない暗褐色土を

平らにならした状態で使用している。床面は硬化していた。

遺物と出土状況 図示できた遺物は、土師器10点、弥生土器4点である。土師器は、高杯基部1点(第31図1)、高杯杯部～脚部片1点(第31図2)、鉢口縁～胴部片1点(第31図3)、小型壺口縁～底部1点(第31図4)、壺口縁部片1点(第31図5)、甕口縁部片1点(第31図6)、甕底部片1点(第31図7)、台付甕頸部～底部片1点(第31図8)、台付甕脚部2点(第31図9・10)が、弥生土器は高杯脚部片1点(第31図11)、小型壺胴部片1点(第31図12)、甕頸部～胴部片1点(第31図13)、壺胴部片1点(第31図14)が出土した。このうち、床直上からの遺物は、小型壺(4)、台付甕(8)、壺(14)の3点である。土器類のほかに敲石1点が埋土中から出土している。

調査所見 出土遺物から、4世紀後半から5世紀初頭と考えられる。



第31図 6号竪穴建物出土遺物

7号竪穴建物(第9・21・32・33図 PL.17・23 遺物観察表P.49)

位置 X=65,283~65,287 Y=-90,422~-90,426

重複 なし。

平面形 隅丸方形か。

規模 長軸4.59m 短軸2.18m以上 残存壁高0.53m

床面積 8.48㎡以上

主軸方位 N-40°-E

検出・埋没状況 3区の最北部で確認した。埋没土は黄褐色土粒を含む黒褐色土を主体とし、レンズ状堆積している。自然埋没と考えられる。

柱穴 床面で支柱穴2基を検出した。規模は下記の通りである。

P 1 長径0.23m 短径0.21m 深さ0.43m

P 2 長径0.23m 短径0.20m 深さ0.49m

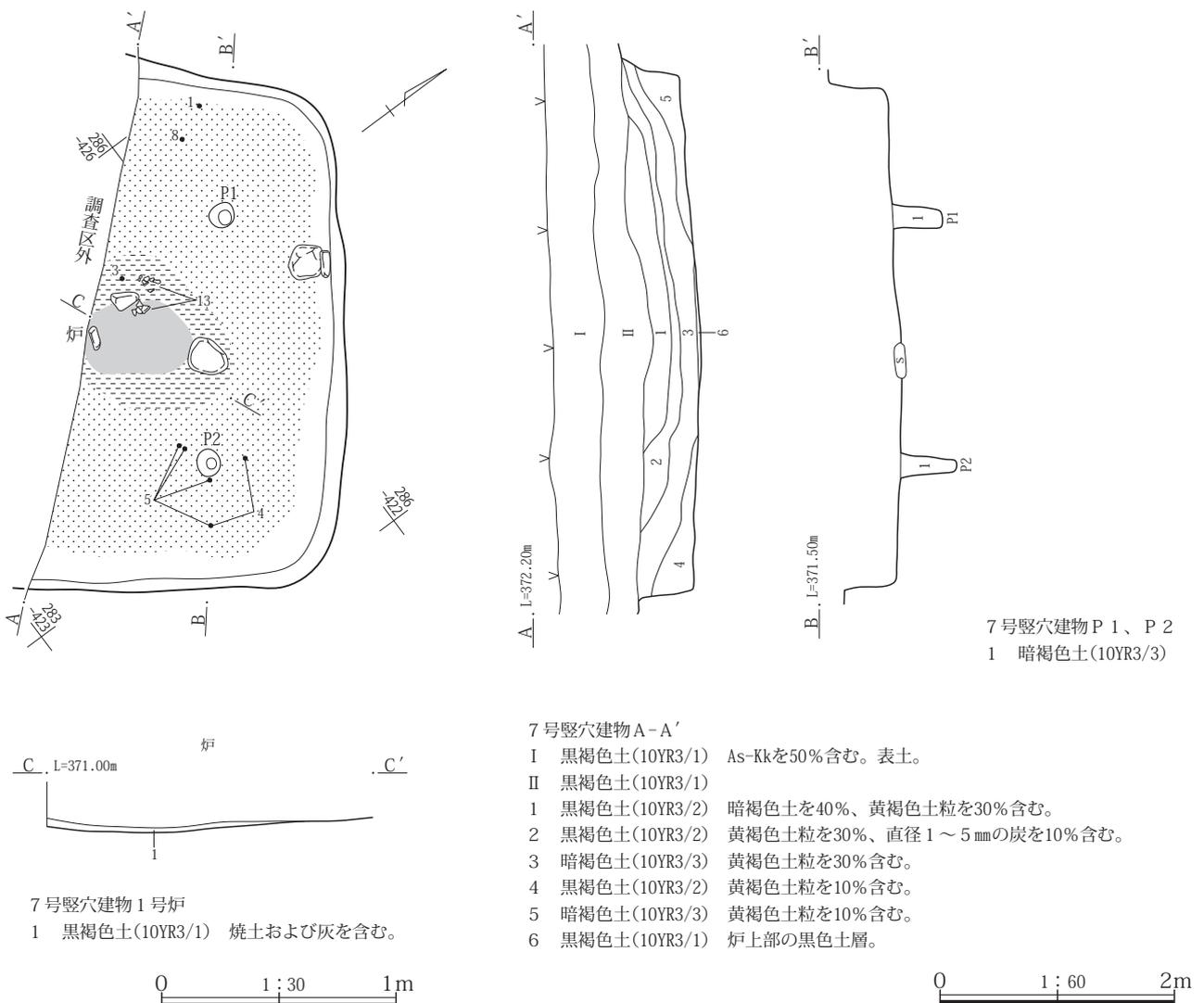
P 1・P 2の柱間の距離は2.13mである。

炉 ほぼ中央で、焼土および炭化材を確認した。やや落ち込んでいるが床上で使用したと考えられる。焼土の周りには扁平な礫3点が置かれていた。

貯蔵穴・壁際溝 確認できなかった。

掘方 貼床は存在せず、地山を平坦にしたのちに使用している。

遺物と出土状況 遺物は、土師器7点、弥生土器5点を図示し、土師器1点を写真掲載した。土師器は、高杯裾部片(第33図1)、高杯胴部片1点(PL.23-2)、器台脚部片1点(第33図3)、小型壺口縁~胴部片1点(第33図4)、小型甕口縁~底部片1点(第33図5)、甕口縁~頸部片1点(第33図6)、S字状口縁台付甕口縁~頸部片1点、(第33図7)、S字状口縁台付甕脚部片1点(第33図8)が、弥生土器は、壺口縁部片1点(第33図9)、壺頸部片2点



第32図 7号竪穴建物

(第33図11・12)、甕口縁部片1点(第33図10)、甕口縁部～胴部片1点(第33図13)が出土した。このうち床直上からの遺物は、土師器小型壺(4)、小型甕(5)、弥生土器甕(13)である。

調査所見 出土遺物から4世紀後半から5世紀初頭と考えられる。

8号竪穴建物(第9・21・34・35図 PL.18・23 遺物観察表P.49)

位置 X=65,275~65,279 Y=-90,414~-90,419

重複 6号竪穴建物に後出する。

平面形 隅丸方形か。

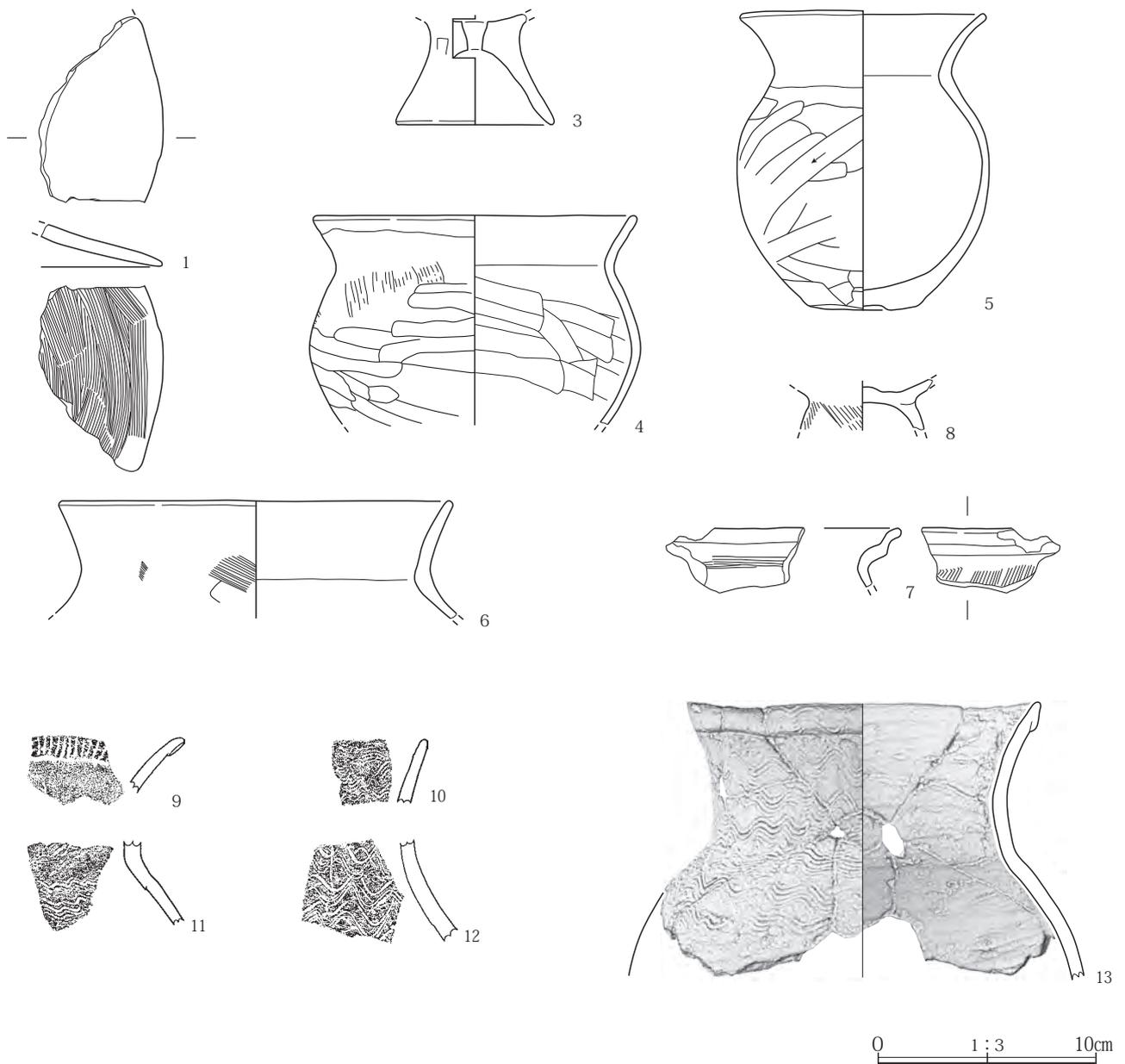
規模 長軸4.31m 短軸2.19m以上 残存壁高0.17m

床面積 8.768㎡以上

主軸方位 N-39°-E

検出・埋没状況 調査区北側、3区のほぼ中央に位置する。埋没土は黄褐色土を含む黒褐色土を主体とする。床面は6号竪穴建物との重複部分を除いて固く締まる。レンズ状堆積をしているので自然埋没と考えられる。

柱穴 床面で柱穴3基を検出した。規模は下記の通りである。



第33図 7号竪穴建物出土遺物

- P 1 長径0.25m 短径0.23m 深さ0.08m
- P 2 長径0.49m 短径0.30m 深さ0.09m
- P 3 長径0.23m 短径0.19m 深さ0.51m

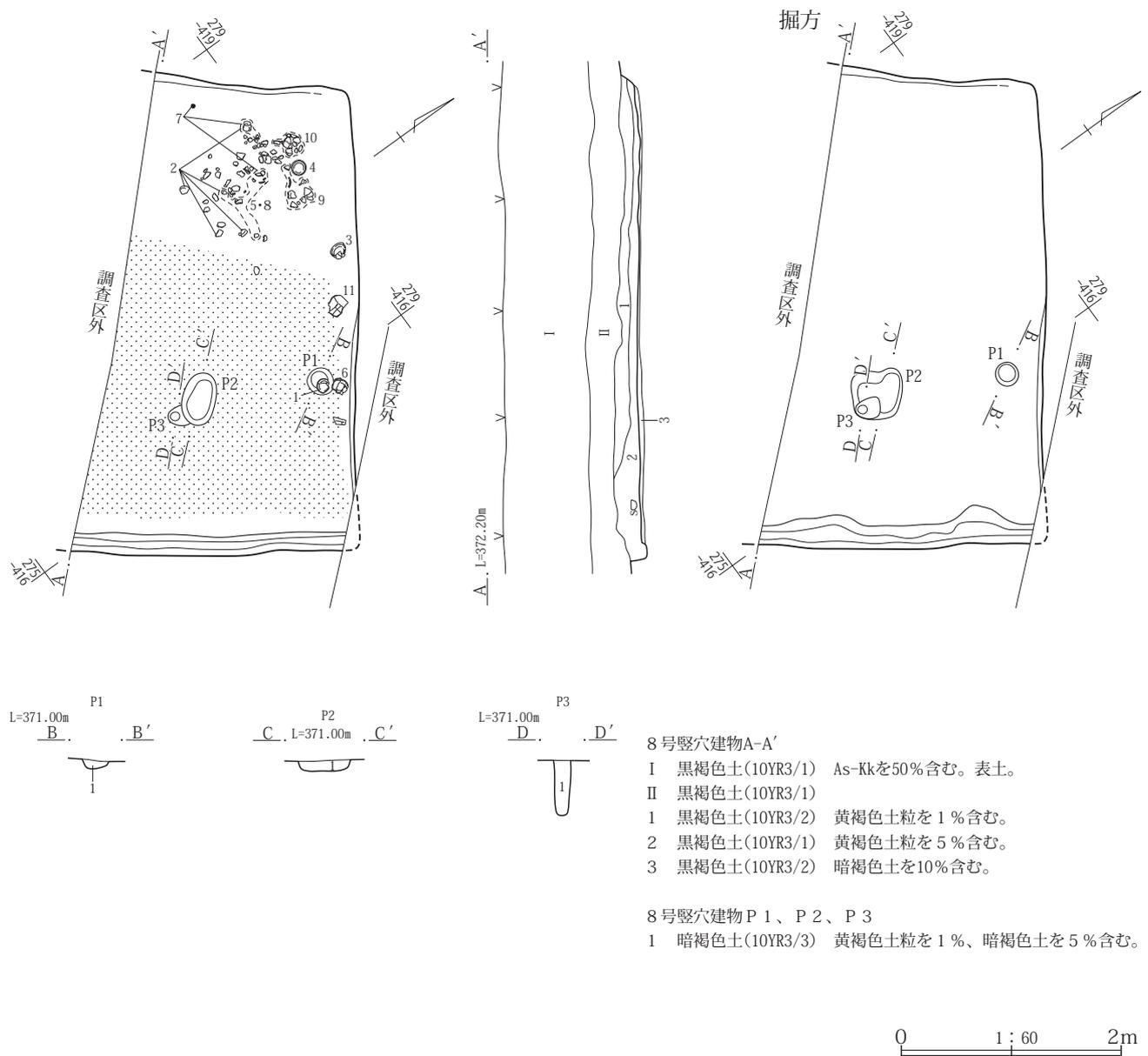
P 1・P 2は掘り込みが浅く、支柱穴とは断定できない。
P 3は深さ0.51mと深く、支柱穴と考えられる。

炉・貯蔵穴 確認できなかった。

壁際溝 東壁側で確認した。規模は長さ2.47m以上、幅0.20m、深さ0.04mで埋土は黒褐色土を主体としている。

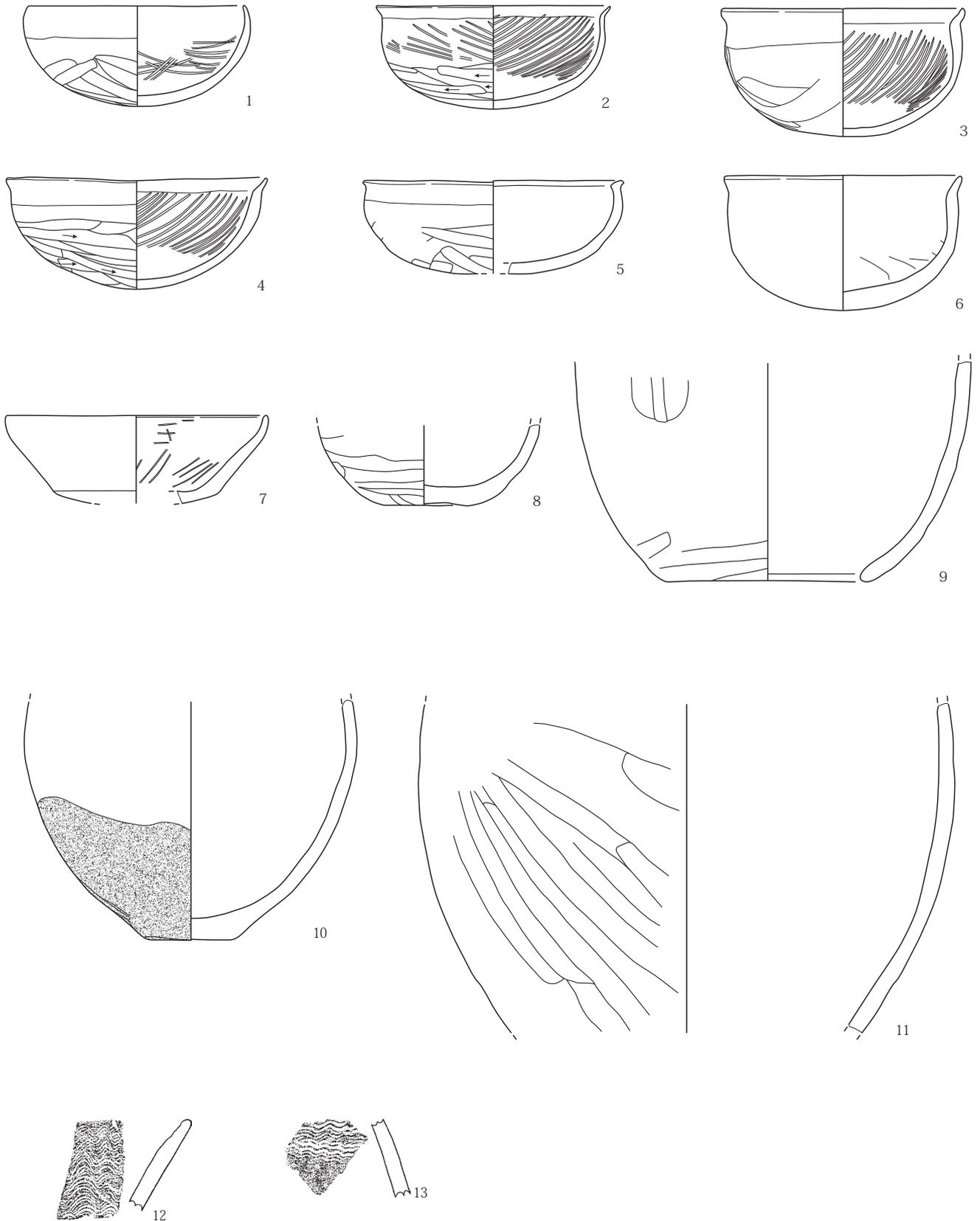
掘方 6号竪穴建物との重複部分を除いて床面から0.05mほど下位で掘方面を検出した。貼床は暗褐色土と黄褐色土粒を含む黒褐色土が主体である。

遺物と出土状況 図示できた遺物は、土師器11点、弥生土器2点である。土師器は、ほぼ完形の土師器杯1点(第35図4)、杯口縁~底部片5点(第35図1~3・5・6)、高杯杯部片1点(第35図7)、小型甕胴部~底部片1点(第35図8)、甕胴~底部片1点(第35図9)、甕~底部片1点(第35図10)、甕胴部片(第35図11)が、弥生土器は、甕口縁部片1点(第35図12)、壺頸部片1点(第35図13)が出土した。このうち、床直上からの遺物は、土師器杯(1~5)、高杯(7)、小型甕(8)、甕(9)、甕(10)である。
調査所見 出土遺物から5世紀前半から中葉と考えられる。



第34図 8号竪穴建物

第2節 検出された遺構と遺物



第35図 8号竪穴建物出土遺物

(2)ピット

5号ピット(第9・20・36図 PL.19)

位置 X=65,199・65,200 Y=-90,341

重複 2号竪穴建物に後出する。

平面形 楕円形

長軸方位 N-30°-E

規模 長軸0.27m 短軸0.24m 深さ0.21m

検出・埋没状況 埋土は黒褐色土主体で、断面形は台形を呈する。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から、古墳時代と考えられる。

6号ピット(第9・21・36図 PL.19)

位置 X=65,271・65,272 Y=-90,412

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-41°-E

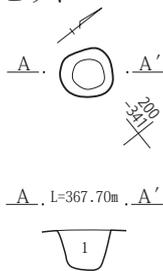
規模 長軸0.32m 短軸0.28m 深さ0.07m

検出・埋没状況 埋土は、暗褐色土を含む黒褐色土を主体とし、断面形は台形を呈する。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から、古墳時代であると考えられる。

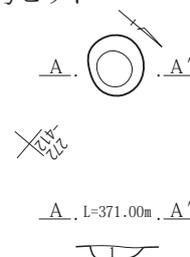
5号ピット



5号ピット

1 黒褐色土(10YR3/1)

6号ピット



6号ピット

1 黒褐色土(10YR3/2) 暗褐色土を20%含む。



第36図 5号ピット、6号ピット

第5項 古代以降の遺構と遺物

当該期の遺構は、土坑3基、ピット4基、溝1条である。各遺構を確認した位置については第9・20図を参照されたい。

(1)土坑

4号土坑(第9・37図 PL.19)

位置 X=65,167 Y=-90,285・-90,286

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-47°-E

規模 長軸0.91m 短軸0.90m 深さ0.13m

検出・埋没状況 埋土は、As-Kkを僅かに含む灰黄褐色土が主体である。断面形は台形を呈する。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土にAs-Kkを含むことから古代以降であると考えられる。

6号土坑(第9・37図 PL.19)

位置 X=65,166・65,167 Y=-90,281・-90,282

重複 なし。

平面形 楕円形か

長軸方位 N-20°-E

規模 長軸0.69以上m 短軸1.21m 深さ0.77m

検出・埋没状況 埋土は、粘性のやや強い黒褐色土主体とし、上層は褐灰色土である。基本土層Ⅱ層から掘削されており、断面形は台形を呈する。

出土遺物 弥生土器片が多数出土したが本遺構に伴う遺物ではないため、遺構外に掲載した。

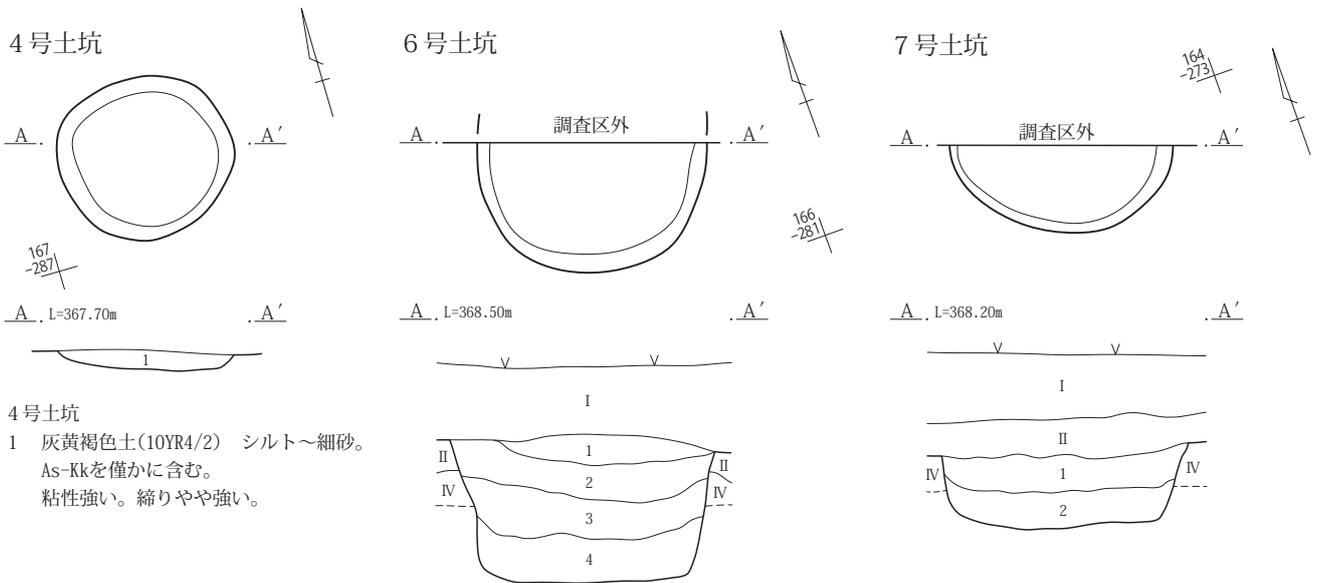
調査所見 遺構の埋没状況から古代から中世であると考えられる。

7号土坑(第9・37図 PL.19)

位置 X=65,163・65,164 Y=-90,273・-90,274

重複 なし。

平面形 楕円形か



4号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) シルト～細砂。
As-Kkを僅かに含む。
粘性強い。締りやや強い。

6号土坑

- I 褐灰色土(10YR4/1) シルト～粗砂。直径0.5～1cmの小礫を多く含む。
粘性弱い。締り強い。
- II 黒褐色土(10YR3/2) シルト～粗砂。直径0.2～1cmの小礫を多く含む。
粘性弱い。締りやや強い。
- IV 黒褐色土(10YR3/1) シルト～細砂。粘性強い。締り強い。
- 1 褐灰色土(10YR4/1) シルト～細砂。直径0.5～1cmの小礫を僅かに含む。
粘性やや強い。締りやや弱い。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) シルト～微砂。粘性やや強い。締り強い。
- 3 黒褐色土(10YR3/2) シルト～微砂。粘性やや強い。締りやや強い。
- 4 黒褐色土(10YR3/2) シルト～細砂。直径1～5cmの礫を僅かに含む。
粘性やや強い。締りやや強い。

7号土坑

- I 褐灰色土(10YR4/1) シルト～粗砂。直径0.5～1cmの小礫を多く含む。
粘性弱い。締り強い。
- II 黒褐色土(10YR3/2) シルト～粗砂。As-Kk混じる。直径0.2～0.5cmの礫を僅かに含む。粘性弱い。締りやや強い。
- IV 褐灰色土(10YR4/1) シルト～細砂。粘性やや強い。締りやや強い。
- 1 黒褐色土(10YR3/2) シルト～細砂。直径0.5cmの小礫をまばらに含む。
As-Kkを僅かに含む。粘性やや強い。締りやや強い。
- 2 褐灰色土(10YR4/1) シルト～粗砂。粘性やや強い。締りやや弱い。

0 1:40 1m

第37図 4号土坑、6号土坑、7号土坑

長軸方位 N-70°-W

規模 長軸1.18m 短軸0.47m以上 深さ0.47m

検出・埋没状況 埋土は、締まりのやや弱い褐灰色土が主体で、上層はAs-Kkを僅かに含む黒褐色土である。断面形は台形を呈する。

出土遺物 弥生土器片が1点出土したが、本遺構に伴う遺物ではないため、遺構外に掲載した。

調査所見 遺構の検出状況および埋土にAs-Kkを含むことから古代以降と考えられる。

(2)ピット

1号ピット(第9・20・38図 PL.19)

位置 X=65,214 Y=-90,356

重複 なし。

平面形 隅丸長方形

長軸方位 N-70°-W

規模 長軸0.42m 短軸0.39m 深さ0.13m

検出・埋没状況 埋土は、ローム粒を含む黒褐色土が主体である。断面形は台形を呈する。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から、中世以降であると考えられる。

2号ピット(第9・20・38図 PL.20)

位置 X=65,189・65,190 Y=-90,331

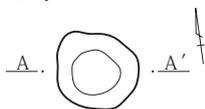
重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-32°-E

規模 長軸0.60m 短軸0.50m 深さ0.21m

1号ピット



214
-356

L=368.40m

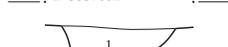


2号ピット



189
-331

L=368.00m



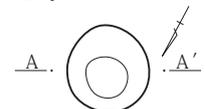
3号ピット



L=368.00m



4号ピット



L=368.00m



1号ピット

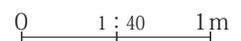
1 黒褐色土(10YR3/1) 粒子細かい。締り弱い。

2 黒褐色土(10YR2/2) ロームの粒子を含む。締り弱い。

2号ピット～4号ピット

1 黒褐色土(10YR3/2) As-Kkを5%、黄褐色土を1%、直径1～10mmの礫を5%含む。

第38図 1号ピット～4号ピット



検出・埋没状況 埋土は、As-Kkを含む黒褐色土を主体とする。断面形は不整形である。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土にAs-Kkを含むことから古代以降であると考えられる。

3号ピット(第9・20・38図 PL.20)

位置 X=65,190・65,191 Y=-90,331

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-30°-E

規模 長軸0.44m 短軸0.42m 深さ0.10m

検出・埋没状況 埋土は、As-Kkを含む黒褐色土を主体とする。断面形は逆三角形である。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土にAs-Kkを含むことから古代以降であると考えられる。

4号ピット(第10・20・38図 PL.20)

位置 X=65,190・65,191 Y=-90,332

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-49°-W

規模 長軸0.45m 短軸0.42m 深さ0.21m

検出・埋没状況 埋土は、As-Kkを含む黒褐色土を主体とする。断面形は台形である。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土にAs-Kkを含むことから古代以降であると考えられる。

(3)溝

1号溝(第9・20・39図 PL.20)

位置 X=65,208~65,210 Y=-90,352~-90,356

重複 1号竪穴建物に後出する。

形状 北西から南東方向へのほぼ直線の溝である。南東部分は地山の礫が露出し、底面はほぼ平坦である。

走向方位 N-58°-W

規模 全長4.45m以上 最大幅0.53m 最深部0.22m

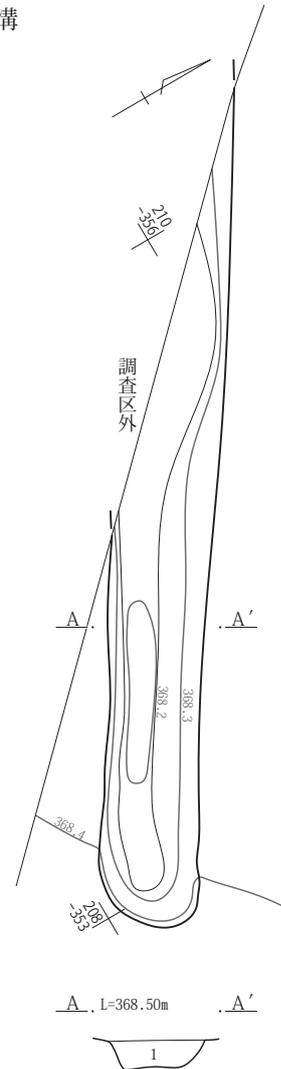
検出・埋没状況 埋土は、As-Kkを含む黒褐色土である。

断面形は台形を呈する。

出土遺物 なし。

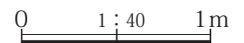
調査所見 遺構の検出状況および埋土にAs-Kkを含むことから、古代以降と考えられる。

1号溝



1号溝

1 黒褐色土(10YR2/2) 粒子細かく、As-Kkを含む。締り弱い。

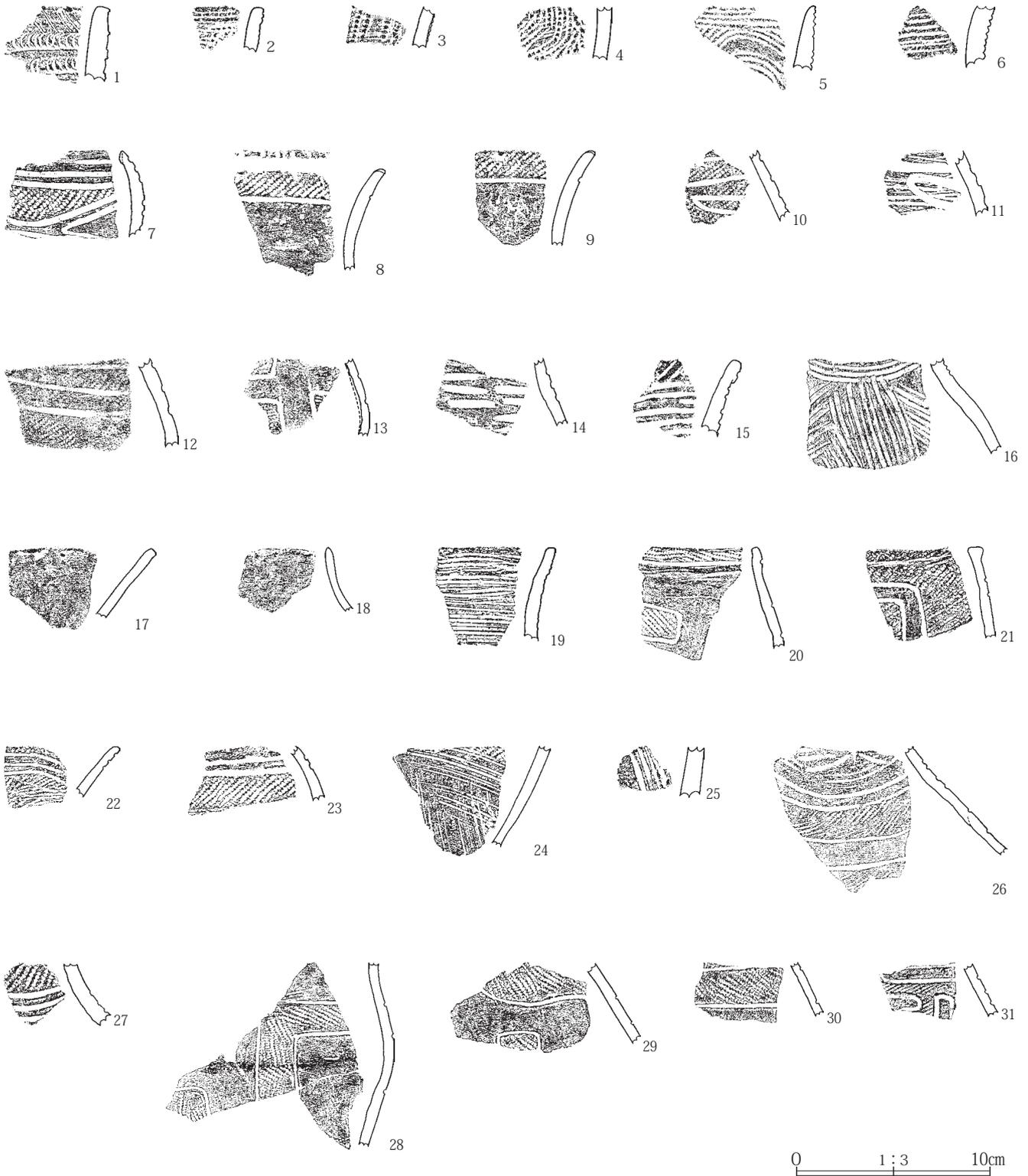


第39図 1号溝

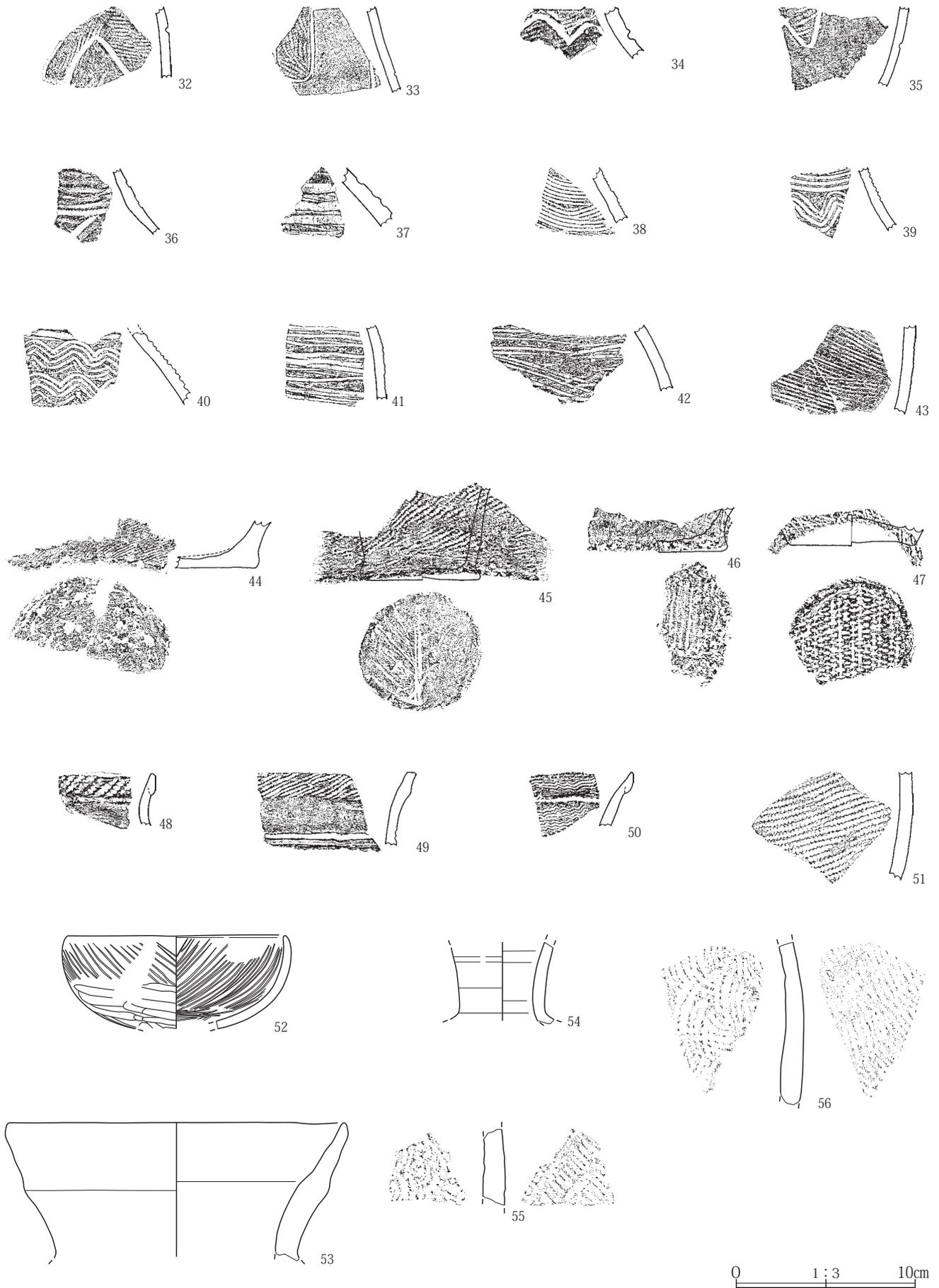
第6項 遺構外出土遺物(第40~42図 PL.24・25)

遺構外出土遺物のうち図示したものは、縄文土器6点(1~6)、弥生土器45点(7~51)、土師器2点(52・

53)、須恵器3点(54~56)、石器13点(57~69)である。特に4区から中期前半の弥生土器が豊富に出土している。縄文土器は、有尾式1点、下島式3点、十三菩提式1点、前期末葉1点が2区と4区から出土した。



第40図 遺構外出土遺物(1)



第41図 遺構外出土遺物(2)



第42図 遺構外出土遺物(3)

第2表 出土遺物観察表

2号土坑出土遺物(計測値 土器cm、石器mm・重さg)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第10図 PL.21	1	縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片				粗砂、石英、赤色 粒、繊維/良好	LR、RL 縄文により羽状縄文を施文し上位に横位沈線を施 文する。内面ナデ。	有尾式

弥生時代土坑出土遺物

第15図 PL.21	1	弥生土器 甕	9号土坑埋土 胴部破片				細砂、石英、白色 粒/良好	縦位の条線文を施文する。	中期中葉	
第16図 PL.21	2	弥生土器 甕	10号土坑No.2 胴部~底部破片				粗砂、石英、輝石、 雲母/良好	LR 縄文を施文する。内面調整痕顕著。底面磨滅。	中期	
第16図 PL.21	3	弥生土器 筒型土器	11号土坑埋土 口縁部破片				細砂、石英/良好	横位沈線区画内に LR 縄文を施文する。ナデによる無文帯 を形成する。口唇部は上端を平坦に形成したことにより側 面が肥厚する。	中期中葉	
第16図 PL.21	4	弥生土器 壺	11号土坑埋土 胴部破片				細砂、石英、赤色 粒/良好	外面 LR 縄文を施文後、横位沈線文を施文する。	中期中葉	
第16図 PL.21	5	弥生土器 甕	11号土坑埋土 胴部上半破片				細砂、石英、輝石、 白色粒/良好	沈線区画文を施文後、LR 縄文を施文する。	中期中葉	
第16図 PL.21	6	弥生土器 壺	11号土坑埋土 底部破片				細砂、石英/良好	外面ミガキ。内面ナデ。底面磨滅。	中期中葉	
第16図 PL.21	7	弥生土器 壺	11号土坑埋土 底部破片				細砂、石英、白色 粒/良好	外面赤彩。底面網代痕。内外面ナデ。	中期中葉	
第16図 PL.21	8	剥片石器 剥片	11号土坑埋土 完形	長 幅	28 41	厚 重	12 10.3	黒色安山岩	横長剥片。	
第17図 PL.21	9	弥生土器 甕	15号土坑埋土 口縁部破片				細砂、石英、輝石 /良好	口唇部刺突。口縁部に条痕文を横位に施文する。	中期前葉	
第18図 PL.21	10	弥生土器 甕	17号土坑埋土 胴部破片				細砂、石英/良好	LR 縄文施文する。	中期	
第18図 PL.21	11	弥生土器 壺	20号土坑埋土 胴部破片				細砂、石英/良好	内面ミガキ成形。横位沈線文を施文後 LR 縄文を施文する。	中期中葉	

1号竪穴建物出土遺物

第22図 PL.21	1	土師器 高杯	-12 杯部	稜	13.7			細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤	内外面ヘラミガキ、赤彩。	内外赤彩
第22図 PL.21	2	土師器 高杯	- 8 脚部片	脚	21.2			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面ヘラミガキ、内面ナデ。脚部中位に円形の透かし孔を 1 基確認。三方に穿孔するとみられる。	
第22図 PL.21	3	土師器 甕	床直 胴部片					細砂粒・粗砂粒/ 良好/灰褐	外面ハケメ(1cm当たり7本)。内面ハケメ、ナデ。	

2号竪穴建物出土遺物

PL.21	1	土師器 高杯	胴部片					細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤	内外ヘラミガキ、赤彩。	内外赤彩 写真のみ
PL.21	2	土師器 高杯	胴部片					細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤	内外ヘラミガキ、赤彩。	内外赤彩 写真のみ
第24図 PL.21	3	土師器 鉢	貯蔵穴 完形	口 底	15.1 3.4	高	6.0	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	内外面ナデ。内面中位に環状に吸炭している。	
PL.21	4	土師器 埴	口縁部片					細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤	外面調整不明、内面ヘラミガキ。内外面赤彩。	内外赤彩 写真のみ
PL.21	5	土師器 埴	胴部片					細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤	外面ヘラミガキ、赤彩。内面ナデ。	内外赤彩 写真のみ
第24図 PL.21	6	土師器 甕	口縁部片	口	11.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面口縁部横ナデ、頸部ハケメ(1cm当たり7本)。内面口 縁部横ナデ、胴部ハケメ。	
第24図 PL.21	7	土師器 台付甕	口縁部片					細砂粒・粗砂粒/ 良好/黒褐	口縁部横ナデ。	S 字状口縁台 付甕
第24図 PL.21	8	土師器 台付甕	口縁部片					細砂粒・粗砂粒/ 良好/黒褐	口縁部横ナデ。	S 字状口縁台 付甕
第24図 PL.21	9	土師器 甕	底部片	底	7.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	外面ヘラケズリ。内面ナデ。	
第24図 PL.21	10	弥生土器 壺	埋土 口縁部破片					細砂、石英、赤色 粒/良好	内面をミガキ、外面をナデ成形する。器形は口縁部が外反 する。口縁部は折り返し口縁で、上端をやや平坦に成形す る。頸部に3帯の横位櫛描波状文。施文具10歯15mm。	樽式
第24図 PL.21	11	弥生土器 壺	埋土 口縁部破片					粗砂、石英、輝石、 白色粒、赤色粒/ 良好	内外面横ナデ成形を施す。口縁部に2帯の横位櫛描波状文 を施文する。施文具6歯10mm。	樽式
第24図 PL.21	12	弥生土器 鉢	掘方 口縁部破片					細砂、石英、輝石、 白色粒/良好	内面ミガキ成形。口唇部に棒状工具による刻みが施され、 口縁部に3条の横位条線文を施文する。	中期中葉
第24図 PL.21	13	弥生土器 壺	埋土 口縁部破片					粗砂、石英、輝石 /良好	口唇部に棒状工具による刻みが施される。ナデによる口縁 部の成形。	中期中葉
第24図 PL.21	14	弥生土器 壺	埋土 胴部破片					細砂、石英、輝石 /良好	横位沈線間に半円状の刺突。内面赤彩か? 胴部。	中期中葉
第24図 PL.21	15	弥生土器 壺	埋土 胴部破片					粗砂、輝石、白色 粒/良好	3 単位 1 組の横位条線文を施文する。	中期中葉
第24図 PL.21	16	弥生土器 壺	埋土 胴部破片					細砂、石英、輝石 /良好	横位矢羽状条線文を施文する。	中期中葉

3号竪穴建物出土遺物

第26図 PL.22	1	土師器 高杯	杯部片	口 稜	19.0 11.7			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面口縁部横ナデ、稜下部ナデ。内面口縁部横ナデ。体部 は摩耗が激しく、調整不明。	
第26図 PL.22	2	土師器 高杯	+14 脚部	脚	15.5			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい褐	外面粘土組痕。ナデ後ヘラミガキ。内面ナデ、ヘラナデ。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 底	高	厚 重				
第26図 PL.22	3	土師器 鉢	+13 口縁部～底部 1/3	口 底	11.7 4.0	高	8.9	細砂粒・粗砂粒・ 小礫/良好/明赤 褐	口縁部ナデ、胴部上位ヘラナデ、胴部下位ヘラケズリ。内 面ナデ。	
第26図 PL.22	4	土師器 埴	+13 口縁部欠	頸 胴	5.9 14.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	外面ヘラミガキ。内面ナデ。	
第26図	5	土師器 壺か	底部～胴部下位	底	6.0			細砂粒・粗砂粒/ 良好/褐	外面ナデ。内面ヘラミガキ。	
第26図 PL.22	6	土師器 小型甕	床直 口縁部～胴部下 位	口	14.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐	外面口縁部横ナデ、頸部から胴部上位ヘラナデ、胴部中位 から下位ナデ。内面口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。	
第26図	7	土師器 甕	底部～胴部下位	底	6.0			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	外面ナデ。内面ナデ、ヘラナデ。	
第26図	8	土師器 甕	底部～胴部下位 片	底	10.9			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面ハケメ(1cm当たり5本)、ナデ。内面ナデか。	
第26図 PL.22	9	弥生土器 甕	埋土 頸部破片					粗砂、石英、輝石、 白色粒/良好	横位櫛描波状文1帯10～15mm施文する。	樽式

4号竪穴建物出土遺物

第27図 PL.22	1	弥生土器 甕	4号竪穴掘方 胴部破片					粗砂、石英、輝石/ 良好	斜位、縦位に沈線施文する。	中期中葉
第27図 PL.22	2	弥生土器 甕	掘方 頸部破片					細砂、石英、輝石/ 良好	内面ミガキ成形。頸部に2帯の6歯15mmの横位櫛描籐状文 を施文後、下位に2帯5歯10mmの横位櫛描波状文を施文す る。	樽式
第27図 PL.22	3	剥片石器 剥片	2区4号竪穴建 物 完形	長 幅	25 31	厚 重	6 2.7	黒曜石	横長剥片、内湾し端部に石核底面を取り込む。	

5号竪穴建物出土遺物

第29図 PL.22	1	土師器 器台	床直 脚部1/3					細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	四方に透かし孔を穿孔する。外面ヘラミガキ、赤彩。内面 ナデ。	外面赤彩
第29図	2	土師器 鉢	口縁部片	口	13.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	外面口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	
第29図	3	土師器 小型甕	口縁部片	口	15.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/灰褐	外面口縁部横ナデ、頸部ハケメ(1cm当たり6本)。内面横 ナデ、ヘラナデ。	
第29図	4	土師器 台付甕	胴部片					細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄褐	外面ハケメ(1cm当たり5本)。内面ナデ。	
第29図	5	土師器 甕	口縁部片					細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい褐	外面横ナデ、粘土紐痕2条。内面横ナデ。	
第29図 PL.22	6	須恵器 甕	頸部～口縁部下 片					細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄褐	外面口クロナデ、波状文(8条1段)を施文。内面口クロナ デ。	混入
第29図 PL.22	7	弥生土器 甕	トレンチ 胴部破片					粗砂、石英、輝石/ 良好	内面調整痕が明瞭に残る。横位沈線文、斜位沈線文を施文 する。	中期中葉
第29図 PL.22	8	弥生土器 甕	トレンチ 頸部～胴部上半 破片					細砂、石英、輝石/ 良好	頸部に5歯10mmの横位櫛描籐状文を施文後、2帯6歯15mm の横位櫛描波状文を施文する。	樽式
第29図 PL.22	9	弥生土器 壺	埋土 頸部～胴部上半 破片					粗砂、石英、輝石、 白色粒/良好/	内面ミガキ成形。5歯10mmの横位櫛描波状文を3帯胴部上 半に施文する。頸部～胴部。	樽式
第29図 PL.22	10	弥生土器 甕	埋土 胴部破片					粗砂、石英、輝石/ 良好	内面調整痕が明瞭に残る。6歯15mmの横位櫛描波状文を3 帯施文する。	樽式
第29図 PL.22	11	弥生土器 甕	埋土 胴部破片					粗砂、石英、白色 粒/良好	RL 結節縄文を横位に施文する。	後期
第29図 PL.22	12	剥片石器 打製石斧	2区5号竪穴建 物 完形	長 幅	75 54	厚 重	18 55.7	黒色頁岩	撥形、縦長剥片を素材、上下両端部と側縁に部分的な調整 加工を施す。	

6号竪穴建物出土遺物

第31図	1	土師器 高杯	+22 基部					細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	透かし孔2か所で確認。三方に穿孔か。外面ハケメ(1cm 当たり7本)。内面ヘラナデ。	
第31図 PL.22	2	土師器 高杯	+13 杯部～脚部 1/4	稜	8.0			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	透かし孔3か所で確認。四方に穿孔か。外面ヘラミガキ。 内面摩耗激しく調整不明。	
第31図	3	土師器 鉢	+35 口縁～胴部片	口 胴	11.0 11.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	外面口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ、 胴部ナデ。胴部上位に粘土紐痕。	
第31図 PL.22	4	土師器 小型壺	床直、貯蔵穴 口縁～底部 3/4	口 胴	8.1 12.5	底 高	4.6 13.6	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	外面口縁部横ナデ、胴部ヘラミガキ、底部ナデ。胴部上位 に赤彩。内面口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ、胴部上位に粘 土紐痕。	
第31図	5	土師器 壺	口縁部片	口	10.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄橙	折り返し口縁。内外面ナデ。	折り返し口縁
第31図	6	土師器 甕	+11 口縁部片	口	19.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	内外面横ナデ。	
第31図	7	土師器 甕	+30 底部	底	6.2			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	内外面ヘラナデ。	
第31図 PL.22	8	土師器 台付甕	床直 頸部～底部	胴	23.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/褐	外面肩部横方向のナデ、胴部中位から下位縦・斜め方向の ナデ。内面ナデ。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第31図	9	土師器 台付甕	基部				細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面ハケメ(1cm当たり7本)。内面ナデ。内面被熱。	
第31図	10	土師器 台付甕	+25 脚部1/4	底	8.4		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	脚部上位が内外共に被熱。外面縦方向のナデ後、横ナデ。内面ヘラナデ。	
第31図 PL.22	11	弥生土器 高杯	埋土 脚部破片				細砂、輝石、白色 粒/良好	口唇部が外反し、器面に赤彩を施す。	樽式
第31図 PL.22	12	弥生土器 小型壺	埋土 胴部破片				細砂、石英、輝石/ 良好	外面ミガキ、赤彩、内面に横ナデを施すが輪積み痕を残す。	樽式
第31図 PL.22	13	弥生土器 甕	埋土 頸部～胴部上半 破片				細砂、石英、輝石/ 良好	頸部に2帯6歯10mmの櫛描波状文を施文後、頸部と胴部に2帯6歯10mmの横位櫛描波状文を施文する。	樽式
第31図 PL.22	14	弥生土器 壺	床直 胴部上半破片				粗砂、石英、輝石、 白色粒/良好	4帯5歯10mmの横位櫛描波状文を施文する。外面横ナデ。内面整形痕残る。胴部。	樽式

7号竪穴建物出土遺物

第33図	1	土師器 高杯か	+12 脚部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面ナデ。内面ハケメ(1cm当たり10本)。	
PL.23	2	土師器 高杯	胴部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤	内外面赤彩。	内外赤彩 写真のみ
第33図 PL.23	3	土師器 器台	+21 脚部1/4	脚	7.0		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面ヘラナデ後ナデ。内面ナデ。孔は口縁部側から脚部側に向かって穿孔。	
第33図 PL.23	4	土師器 小型壺	床直 口縁部～胴部	口 胴	14.6 15.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/灰黄褐	外面口縁部粘土紐痕、頸部ハケメ(1cm当たり4本)胴部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	
第33図 PL.23	5	土師器 小型甕	床直 口縁部～底部	口 胴	11.0 11.5	底 高 4.9 13.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面被熱。口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ。内面ナデ。	
第33図	6	土師器 甕	口縁部～頸部片	口	17.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部横ナデ、外面頸部ハケメ(1cm当たり10本)。内面ナデ。	
第33図	7	土師器 台付甕	口縁部～頸部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄橙	口縁部横ナデ、頸部ハケメ(1cm当たり7本)。内面ナデ、ハケメ。	S字状口縁台 付甕
第33図	8	土師器 台付甕	+8 底部～脚部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	内外面被熱。外面ハケメ(1cm当たり5本)。内面ナデ。	S字状口縁台 付甕
第33図 PL.23	9	弥生土器 壺	埋土 口縁部破片				細砂、石英/良好	内面ミガキ成形。口唇部を折り返し、平坦面を形成し縦位の刻文を施文する。	樽式
第33図 PL.23	10	弥生土器 甕	埋土 口縁部破片				細砂、石英/良好	8歯10mmの櫛描波状文を2帯施文する。	樽式
第33図 PL.23	11	弥生土器 壺	埋土 頸部破片				細砂、石英、輝石/ 良好	内面に輪積み痕を残す。胴部に8歯10mmの櫛描波状文を2帯施文する。	樽式
第33図 PL.23	12	弥生土器 壺	埋土 頸部破片				細砂、石英/良好	2歯6mmの櫛描波状文を4帯施す。内面ミガキ成形。	樽式
第33図 PL.23	13	弥生土器 甕	床直 口縁部～胴部破 片				粗砂、石英、赤色 粒、白色粒/良好	内面に調整痕を顕著に残す。口唇部折り返し口縁。5歯10mmの櫛描波状文を8帯施文する。頸部～胴部。	樽式

8号竪穴建物出土遺物

第35図 PL.23	1	土師器 杯	床直 3/4	口 高	11.6 5.4		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面口縁部横ナデ、体部から底部ヘラケズリ。内面ナデのち体部中心にヘラミガキ。	内湾杯
第35図 PL.23	2	土師器 杯	床直 3/4	口 高	12.5 5.6		細砂粒・粗砂粒・ 小礫/良好/にぶ い橙	外面口縁部横ナデ、体部上位ヘラミガキ、体部下位から底部ヘラケズリ。内面ナデのち体部中心にヘラミガキ。	内斜口縁杯
第35図 PL.23	3	土師器 杯	床直 口縁部1/4欠	口 高	12.8 6.9		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面口縁部横ナデ、体部から底部ヘラナデ。内面ナデのち体部中心にヘラミガキ。	内斜口縁杯
第35図 PL.23	4	土師器 杯	床直 完形	口 高	13.8 5.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面口縁部横ナデ、体部から底部ヘラケズリ。内面ナデのち体部中心にヘラミガキ。	内斜口縁杯
第35図 PL.23	5	土師器 杯	床直 口縁部～底部 1/3	口 高	13.8 5.0		細砂粒・粗砂粒・ 小礫/良好/橙	外面口縁部横ナデ、体部から底部ヘラケズリ。内面ナデ。	内斜口縁杯
第35図 PL.23	6	土師器 杯	+6 2/3	口 高	12.6 7.3		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面摩耗激しく、調整不明。内面ヘラナデ。	
第35図 PL.23	7	土師器 高杯	床直 口縁部～杯部	口 稜	14.0 9.0		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面ナデ。内面ヘラミガキ。	
第35図	8	土師器 小型甕	床直 底部～胴部	底	4.6		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	外面ヘラケズリ。内面ナデ。	
第35図 PL.23	9	土師器 甕	床直 底部～胴部下半 破片	底 孔	10.8 10.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	外面ヘラケズリ、ナデ。内面ナデ。	
第35図 PL.23	10	土師器 甕	床直 底部～胴部上位 破片	底	5.0		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面胴部下位被熱。外面摩耗激しい。ヘラケズリか。内面ナデ。	
第35図 PL.23	11	土師器 甕	+6 胴部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面ヘラケズリ。内面ナデ。	
第35図 PL.23	12	弥生土器 甕	埋土 口縁部破片				細砂、石英、輝石/ 良好	8歯15mmの櫛描波状文を3帯施文する。	樽式
第35図 PL.23	13	弥生土器 壺	床直 頸部破片				細砂、石英/良好	内面ミガキ成形。5歯10mmの櫛描波状文を2帯施文する。	樽式

遺構外出土遺物

第40図 PL.24	1	縄文土器 深鉢	口縁部破片				粗砂、石英、繊維 /良好	鋭く弱い斜位沈線を施文後、横位半裁竹管文を施文する。	有尾式
第40図 PL.24	2	縄文土器 深鉢	5竪穴、埋土 口縁部破片				粗砂、石英、輝石、 白色粒/良好	口唇部を外側に肥厚させ横位竹管文を施文する。	下島式

挿図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第40図 PL.24	3	縄文土器 深鉢	5 竪穴、埋土 口縁部破片			粗砂、石英、輝石 /良好	横位に浅い条線を施文後、縦位に竹管文を施文する。	下島式
第40図 PL.24	4	縄文土器 深鉢	表土 口縁部破片			粗砂、石英、白色 粒/良好	弧状に半裁竹管文を施文する。	下島式
第40図 PL.24	5	縄文土器 深鉢	表土 口縁部破片			石英、輝石、白色 粒/良好	上位に横位、下位に弧状の条線文を施文する。	十三菩提式
第40図 PL.24	6	縄文土器 深鉢	5 竪穴、埋土 口縁部破片			粗砂、石英、輝石 /良好	横位に集合沈線文を施文する。	前期末葉
第40図 PL.24	7	弥生土器 鉢	試掘トレンチ 胴部破片			粗砂、石英、白色 粒/良好	横位沈線と斜位沈線に区画帯を構成しLR縄文を充填施文、無文部ミガキを施す。内面ナデ。	中期前葉
第40図 PL.24	8	弥生土器 壺	6号土坑埋土 口縁部破片			細砂、石英、片岩 /良好	内外面ミガキ。口唇部棒状工具により横位に刺突。口縁部上半に横位沈線を施文し、区画内にLR縄文を施文する。	中期中葉
第40図 PL.24	9	弥生土器 壺	6号土坑埋土 口縁部破片			細砂、石英/良好	口唇部に刻み文を施文する。口縁部に横位沈線を施文し、区画内にLR縄文を施文する。外面コゲ付着。	中期中葉
第40図 PL.24	10	弥生土器 壺	6号土坑埋土 胴部破片			粗砂、石英/良好	LR縄文を施文後、下位に弧状沈線文、上位に2条の横位沈線文を施文する。	中期中葉
第40図 PL.24	11	弥生土器 壺	6号土坑埋土 胴部破片			細砂、石英/良好	横位沈線施文後に弧状沈線を施文する。内面ミガキ成形。	中期中葉
第40図 PL.24	12	弥生土器 壺	6号土坑埋土 胴部破片			粗砂、石英、チャ ート/良好	横位LR縄文を施文後、横位沈線区画を施文する。内面輪積み痕。	中期中葉
第40図 PL.24	13	弥生土器 壺	6号土坑埋土 胴部破片			細砂、石英、片岩 /良好	方形区画内にLR縄文を施文する。外面ミガキ。内面剥落。	中期中葉
第40図 PL.24	14	弥生土器 壺	6号土坑埋土 頸部			石英、輝石/良好	横位短沈線を施す。	中期中葉
第40図 PL.24	15	弥生土器 壺	6号土坑埋土 口縁部破片			粗砂、石英/良好	折り返し口縁上面に斜位の短沈線文。上面に横位沈線文を施す。	平沢式
第40図 PL.24	16	弥生土器 甕	胴部破片			細砂、石英、輝石 /良好	横位櫛描簾状文を施文後横位と斜位の条線文を施文する。「平沢型」の器形を呈する。コゲ付着。	平沢式
第40図 PL.24	17	弥生土器 鉢	6号土坑埋土 口縁部破片			細砂、石英/良好	内面ミガキ。口唇部は整形により若干外側へ肥厚する。	中期中葉
第40図 PL.24	18	弥生土器 小型鉢	6号土坑埋土 口縁部破片			細砂、石英/良好	内外面ミガキ成形。口唇部上端をやや鋭角に成形。	中期中葉
第40図 PL.24	19	弥生土器 甕	試掘トレンチ 口縁部破片			粗砂、石英/良好	口唇部を若干外へ肥厚させる。横位条線文を施文する。	中期中葉
第40図 PL.24	20	弥生土器 筒型土器	口縁部破片			粗砂、石英/良好	口唇部が若干直立する。横位沈線文を施し、外縁にRL縄文、胴部に「コ」字状沈線を施しRL縄文を充填する。外面ミガキ、内面ナデ。	中期中葉
第40図 PL.24	21	弥生土器 筒型土器	口縁部破片			粗砂、石英/良好	口唇部上端を平坦に形成。形成により側面が肥厚する。LR縄文施文後、方形の沈線区画を施文し、区画内をミガキ無文帯を形成する。内面ナデ成形。	中期中葉
第40図 PL.24	22	弥生土器 鉢	口縁部破片			細砂、石英/良好	横位弧状沈線施文後にLR縄文施文する。内面ミガキ、外面赤彩。	中期中葉
第40図 PL.24	23	弥生土器 甕	6号土坑埋土 胴部破片			石英、輝石/良好	横位沈線区画間をLR縄文を施文する。	中期中葉
第40図 PL.24	24	弥生土器 甕	6号土坑埋土 胴部破片			細砂、石英/良好	外面にLR縄文を施文し、下位にハケナデ調整を施す。内面ナデ。	中期中葉
第40図 PL.24	25	弥生土器 甕	7号土坑埋土 胴部破片			細砂、石英、輝石 /良好	縦位の条線文を4単位施文する。	中期中葉
第40図 PL.24	26	弥生土器 壺	胴部破片			粗砂、石英、輝石 /良好	胴部。沈線文を横位に施文する。区画帯を形成。上位区画内は斜位沈線、中位、下位区画内は条線を施す。内面はナデているが弱く輪積みが残る。	中期中葉
第40図 PL.24	27	弥生土器 壺	頸部破片			粗砂、石英/良好	横位沈線施文後上位にLR縄文を施文する。ミガキを施す。	中期中葉
第40図 PL.24	28	弥生土器 壺	胴部破片			細砂、石英、輝石 /良好	方形、帯状の沈線区画内にRL縄文を充填施文する。外面ミガキ、内面ナデ。20、30と同一か。	中期中葉
第40図 PL.24	29	弥生土器 甕	胴部破片			粗砂、石英/良好	横位沈線「コ」字状沈線を施文し、RL縄文を施文する。外面ミガキ、内面ナデ。	中期中葉
第40図 PL.24	30	弥生土器 壺	胴部破片			細砂、石英、白色 粒/良好	胴部。横位沈線区画内にRL縄文を施文する。外面ミガキ、内面ナデ。	中期中葉
第40図 PL.24	31	弥生土器 甕	胴部破片			細砂、石英、白色 粒/良好	沈線区画内にLR縄文施文する。外面コゲ。	中期中葉
第41図 PL.24	32	弥生土器 甕	胴部破片			粗砂、石英/良好	沈線区画内にLR縄文施文する。外面コゲ。	中期中葉
第41図 PL.24	33	弥生土器 壺	頸部破片			細砂、石英/良好	沈線区画内にRL縄文を充填施文する。	中期中葉
第41図 PL.24	34	弥生土器 壺	頸部破片			粗砂、石英、白色 粒/良好	斜位沈線文施文後、弧状沈線を施文する。上位に横位沈線施文する。	中期中葉
第41図 PL.24	35	弥生土器 鉢	胴部破片			細砂、石英/良好	V字状沈線区画内にRL縄文を施文する。内外面ナデ。	中期中葉
第41図 PL.24	36	弥生土器 壺	表土 胴部破片			細砂、石英、輝石 /良好	浅い横位沈線と下に斜位沈線を施文する。	中期中葉
第41図 PL.24	37	弥生土器 壺	胴部破片			粗砂、石英、白色 粒/良好	胴部。浅く広い横位沈線文を施文する。	中期中葉
第41図 PL.24	38	弥生土器 壺	胴部破片			細砂、石英、白色 粒/良好	横位櫛描文	中期中葉

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第41図 PL.24	39	弥生土器 壺	頸部破片			細砂、石英/良好	頸部。横位沈線文。下位に波状沈線文を施文する。	中期中葉	
第41図 PL.24	40	弥生土器 壺	土山 胴部破片			細砂、石英、輝石 /良好	胴部。5歯15mmの櫛描波状文を2帯施文後、櫛描簾状文を施文する。内面ナデ。	中期中葉	
第41図 PL.24	41	弥生土器 甕	胴部破片			粗砂、石英、輝石 /良好	横位条線文を施文する。	中期中葉	
第41図 PL.24	42	弥生土器 甕	胴部破片			細砂、石英、赤色 粒、白色粒/良好	横位条線文を施文する。	中期中葉	
第41図 PL.25	43	弥生土器 鉢	胴部破片			細砂、石英、輝石 /良好	横位条線文を施文する。	中期中葉	
第41図 PL.25	44	弥生土器 壺	6号土坑埋土 底部			粗砂、石英、輝石 /良好	底部磨滅。LR 細密縄文を施文する。	中期中葉	
第41図 PL.25	45	弥生土器 壺	底部破片			細砂、石英/良好	LR 縄文を施文する。底面木葉痕。	中～後期	
第41図 PL.25	46	弥生土器 甕	底部破片			粗砂、石英、赤色 粒/良好	底面網代痕。	中～後期	
第41図 PL.25	47	弥生土器 甕	底部破片			粗砂、石英、赤色 粒/良好	底面網代痕。	中～後期	
第41図 PL.25	48	弥生土器 壺	口縁部破片			細砂、石英、輝石 /良好	口縁部に輪積み痕。内外面ミガキ。横位沈線外縁に LR 縄文施文する。	樽式	
第41図 PL.25	49	弥生土器 甕	口縁部破片			細砂、石英/良好	口唇部を外側へ肥厚させ LR 縄文を施文する。頸部に横位櫛描簾状文を施文する。	樽式	
第41図 PL.25	50	弥生土器 壺	土山 口縁部破片			細砂、石英、輝石 /良好	口縁部。折り返し口縁8歯10mmの櫛描波状文を3帯横位に施文する。	樽式	
第41図 PL.25	51	弥生土器 甕	試掘トレンチ 胴部破片			細砂、石英/良好	LR 縄文を施文する。	後期	
第41図 PL.25	52	土師器 杯	口縁部～底部 1/2	口	12.2	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	外面口縁部横ナデ後ヘラミガキ、体部から底部ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	内面ミガキ	
第41図 PL.25	53	土師器 壺	口縁部～頸部片	口	18.8	細砂粒・粗砂粒・ 小礫/良好/浅黄 橙	二重口縁。内外面横ナデ。		
第41図	54	須恵器 壺	口縁部～頸部片			細砂粒/還元焰/ 灰白	内外面ロクロナデ。		
第41図	55	須恵器 甕	胴部片			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	外面並行タタキ。内面当て具痕(並行)。		
第41図	56	須恵器 甕	胴部片			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	外面並行タタキ。内面当て具痕。		
第42図 PL.25	57	剥片石器 石鏃	4区グリッド 欠損	長 幅	15 10	厚 重	4 0.3	黒曜石	左右両側縁中央部が抉入の痕跡あるため、飛行機鏃の可能性がある。下半部欠損のため基部形態は不明。
第42図 PL.25	58	剥片石器 石鏃	3区7号竪穴建 物 欠損	長 幅	15 7	厚 重	3 0.4	珪質頁岩	上半部欠損、鏃部の断面は菱形を呈する。
第42図 PL.25	59	剥片石器 石鏃	4区グリッド 欠損	長 幅	69 107	厚 重	12 136.9	細粒輝石安山岩	上下両側を欠損した石鏃の器体中央部、節理面で剥離した薄手の板状剥片を素材とし、両側縁に調整加工を施す。
第42図 PL.25	60	剥片石器 打製石斧	4区グリッド 欠損	長 幅	79 55	厚 重	20 56.2	黒色頁岩	短冊形、刃部再生が進み小型化している。
第42図 PL.25	61	剥片石器 二次加工剥 片	4区7号土坑 欠損	長 幅	50 20	厚 重	11 11.3	黒色安山岩	端部に二次加工。
第42図 PL.25	62	剥片石器 二次加工剥 片	4区グリッド 完形	長 幅	74 44	厚 重	18 64.2	黒色安山岩	折断面を持つ縦長剥片を素材、右側縁中央部に二次加工。
第42図 PL.25	63	剥片石器 剥片	4区グリッド 欠損	長 幅	29 51	厚 重	8 13.1	黒色安山岩	横長剥片、端部欠損。
第42図 PL.25	64	剥片石器 剥片	4区グリッド 完形	長 幅	27 49	厚 重	15 18.4	黒色安山岩	横長剥片。
第42図 PL.25	65	剥片石器 剥片	4区グリッド 完形	長 幅	43 47	厚 重	10 22	黒色安山岩	矩形を呈する横長剥片。
第42図 PL.25	66	剥片石器 剥片	4区グリッド 完形	長 幅	78 56	厚 重	9 35.1	黒色安山岩	幅広縦長剥片。
第42図 PL.25	67	礫石器 敲石	3区6号竪穴建 物 欠損	長 幅	105 48	厚 重	39 265.3	粗粒輝石安山岩	棒状礫を素材、端部に敲打痕。
第42図 PL.25	68	礫石器 台石	3区7号竪穴建 物 完形	長 幅	228 100	厚 重	52 1908.5	粗粒輝石安山岩	厚みのある板状の長楕円礫を素材、表裏両面は平坦面で摩耗痕が広範囲に残る。部分的に敲打痕も認められる。
第42図 PL.25	69	礫石器 砥石	4区6号土坑 欠損	長 幅	42 29	厚 重	9 10.2	砂岩	小型で両面に研磨痕が残る。

第3表 石器一覧表

No	図番号	PL	時代	出土位置	取上 番号	出土 層位	種別	器種	石材	残存率	点数	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
1	27図3	22	縄文弥生	2区4号竪穴建物			剥片石器	剥片	黒曜石	完形	1	25	31	6	2.7	
2	42図67	25	縄文弥生	3区6号竪穴建物			礫石器	敲石	粗粒輝石安山岩	欠損	1	105	48	39	265.3	
3	42図58	25	縄文弥生	3区7号竪穴建物	2		剥片石器	石錐	珪質頁岩	欠損	1	15	7	3	0.4	
4	42図68	25	縄文弥生	3区7号竪穴建物	18		礫石器	台石	粗粒輝石安山岩	完形	1	228	100	52	1,908.5	
5	42図69	25	縄文弥生	4区6号土坑			礫石器	砥石	砂岩	欠損	1	42	29	9	10.2	
6	42図61	25	縄文弥生	4区7号土坑			剥片石器	二次加工剥片	黒色安山岩	欠損	1	50	20	11	11.3	
7	16図8	21	縄文弥生	4区11号土坑			剥片石器	剥片	黒色安山岩	完形	1	28	41	12	10.3	
8	42図57	25	縄文弥生	4区グリッド		IV層	剥片石器	石鏃	黒曜石	欠損	1	15	10	4	0.3	
9	42図64	25	縄文弥生	4区グリッド		IV層	剥片石器	剥片	黒色安山岩	完形	1	27	49	15	18.4	
10	42図63	25	縄文弥生	4区グリッド			剥片石器	剥片	黒色安山岩	欠損	1	29	51	8	13.1	
11	42図62	25	縄文弥生	4区グリッド			剥片石器	二次加工剥片	黒色安山岩	完形	1	74	44	18	64.2	
12	42図65	25	縄文弥生	4区グリッド		IV層	剥片石器	剥片	黒色安山岩	完形	1	43	47	10	22.0	
13	42図66	25	縄文弥生	4区グリッド			剥片石器	剥片	黒色安山岩	完形	1	78	56	9	35.1	
14	42図59	25	縄文弥生	4区グリッド		IV層	剥片石器	石鏃	細粒輝石安山岩	欠損	1	69	107	12	136.9	
15	42図60	25	縄文弥生	4区グリッド		IV層	剥片石器	打製石斧	黒色頁岩	欠損	1	79	55	20	56.2	
16	29図12	22	縄文弥生	2区5号竪穴建物		掘方	剥片石器	打製石斧	黒色頁岩	完形	1	75	54	18	55.7	
17			縄文弥生	2区4号竪穴建物		掘方	剥片石器	剥片	黒曜石		1				1.4	
18			縄文弥生	4区5号土坑			剥片石器	剥片	黒色頁岩		1				2.4	
19			縄文弥生	4区6号土坑			剥片石器	剥片	黒色頁岩		1				10.8	
20			縄文弥生	4区6号土坑			剥片石器	剥片	珪質頁岩		2				9.5	
21			縄文弥生	4区6号土坑			剥片石器	剥片	黒色頁岩		1				18.3	
22			縄文弥生	4区11号土坑			剥片石器	剥片	珪質頁岩		1				6.1	
23			縄文弥生	4区11号土坑			剥片石器	剥片	黒色安山岩		2				9.3	
24			縄文弥生	4区グリッド		IV層	剥片石器	剥片	珪質頁岩		1				3.8	
25			縄文弥生	4区グリッド		IV層	剥片石器	剥片	黒色安山岩		1				16.1	
26			縄文弥生	旧石器1号トレンチ			剥片石器	剥片	凝灰岩		1				11.1	
27			縄文弥生	2区5号竪穴建物			剥片石器	剥片	黒曜石		1				0.5	
28			縄文弥生	2区3号竪穴建物			剥片石器	剥片	赤碧玉		1				6.0	
29			縄文弥生	3区7号竪穴建物	12		礫	礫	砂岩		1				39.6	
30			縄文弥生	4区グリッド			剥片石器	剥片	泥岩		1				11.3	
31			縄文弥生	4区グリッド			剥片石器	剥片	珪質頁岩		1				1.6	
32			縄文弥生	4区グリッド			剥片石器	剥片	泥岩		1				1.3	

*剥片・礫は、遺構別・石材別に点数と重量の合計値を記載

2,759.7

第4表 石器集計表

	石鏃	石錐	打製石斧	石鏃	二次加工 剥片	剥片	敲石	台石	砥石	礫	総計
掲載	1	1	2	1	2	6	1	1	1		16
未掲載						15				1	16
総計	1	1	2	1	2	21	1	1	1	1	32

第5表 遺構別石器集計表

	石鏃	石錐	打製石斧	石鏃	二次加工 剥片	剥片	敲石	台石	砥石	礫	総計
1区3号竪穴建物						1					1
2区4号竪穴建物						2					2
2区5号竪穴建物			1			1					2
3区6号竪穴建物							1				1
3区7号竪穴建物		1						1		1	3
4区5号土坑						1					1
4区6号土坑					1	3			1		5
4区11号土坑						3					3
4区グリッド	1		1	1	1	10					14
総計	1	1	2	1	2	21	1	1	1	1	32

第6表 器種別石材別石器集計表

	石鏃	石錐	打製石斧	石鏃	二次加工 剥片	剥片	敲石	台石	砥石	礫	総計
黒曜石	1					3					4
珪質頁岩		1				4					5
黒色頁岩			2			3					5
黒色安山岩					2	7					9
赤碧玉						1					1
細粒輝石安山岩				1							1
粗粒輝石安山岩							1	1			2
砂岩									1	1	2
凝灰岩						1					1
泥岩						2					2
総計	1	1	2	1	2	21	1	1	1	1	32

第4章 自然科学分析

第1節 分析の目的

本遺跡の調査において、古墳時代の焼失竪穴建物(2号竪穴建物)が検出された。吾妻地域での古墳時代の竪穴建物は検出例が少なく、また、炭化材の残存状況は良好であった。

そこで、樹種に応じた建築材選定等の資料を得ることと、当時の自然環境資料を得ることを目的として、炭化材樹種同定を実施することとした。

第2節 八幡原遺跡出土 炭化物の樹種同定

はじめに

八幡原遺跡(東吾妻町原町所在)は四万川の河岸段丘上に立地する。古墳時代の焼失建物からは、炭化材、焼土等が確認されている。今回は、2号竪穴建物から検出された炭化材の樹種を知り、当時の用材に関する情報を得る。

1. 試料

分析試料は、2号竪穴建物より出土した炭化物19点(No.1~4、No.6~20)である。いずれも住居構築材とみられる。

2. 分析方法

木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の各割片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3. 結果

結果を第7表に示す。検出された試料はいずれも広葉樹である。クリが11点、ケヤキが7点、クワ属が1点である。以下に検出された種類の解剖学的特徴を述べる。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

・ケヤキ(*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~6細胞幅、1~50細胞高。

・クワ属(*Morus*) クワ科

環孔材で、孔圏部は3~5列、晩材部では単独または2~4個が複合して斜方向に配列する。道管は単穿孔、壁孔は交互状、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~6細胞幅、1~50細胞高。

4. 考察

検出された炭化材は住居構築材と思われ、大部分がクリとケヤキである。クリは、重硬な木材であり、水湿に強く、建物の柱材などの構造材に多用される。その他、家具、建具、屋根、器具等様々な用途で使われる他、火持ちが良いことから薪炭材としても優良である。ケヤキ

第7表 樹種同定結果

試料名	樹種
2号竪穴建物 No.1	クリ
No.2	クリ
No.3	クリ
No.4	クリ
No.6	クリ
No.7	クリ
No.8	クリ
No.9	クワ属
No.10	クリ
No.11	ケヤキ
No.12	ケヤキ
No.13	ケヤキ
No.14	ケヤキ
No.15	ケヤキ
No.16	クリ
No.17	クリ
No.18	ケヤキ
No.19	ケヤキ
No.20	クリ

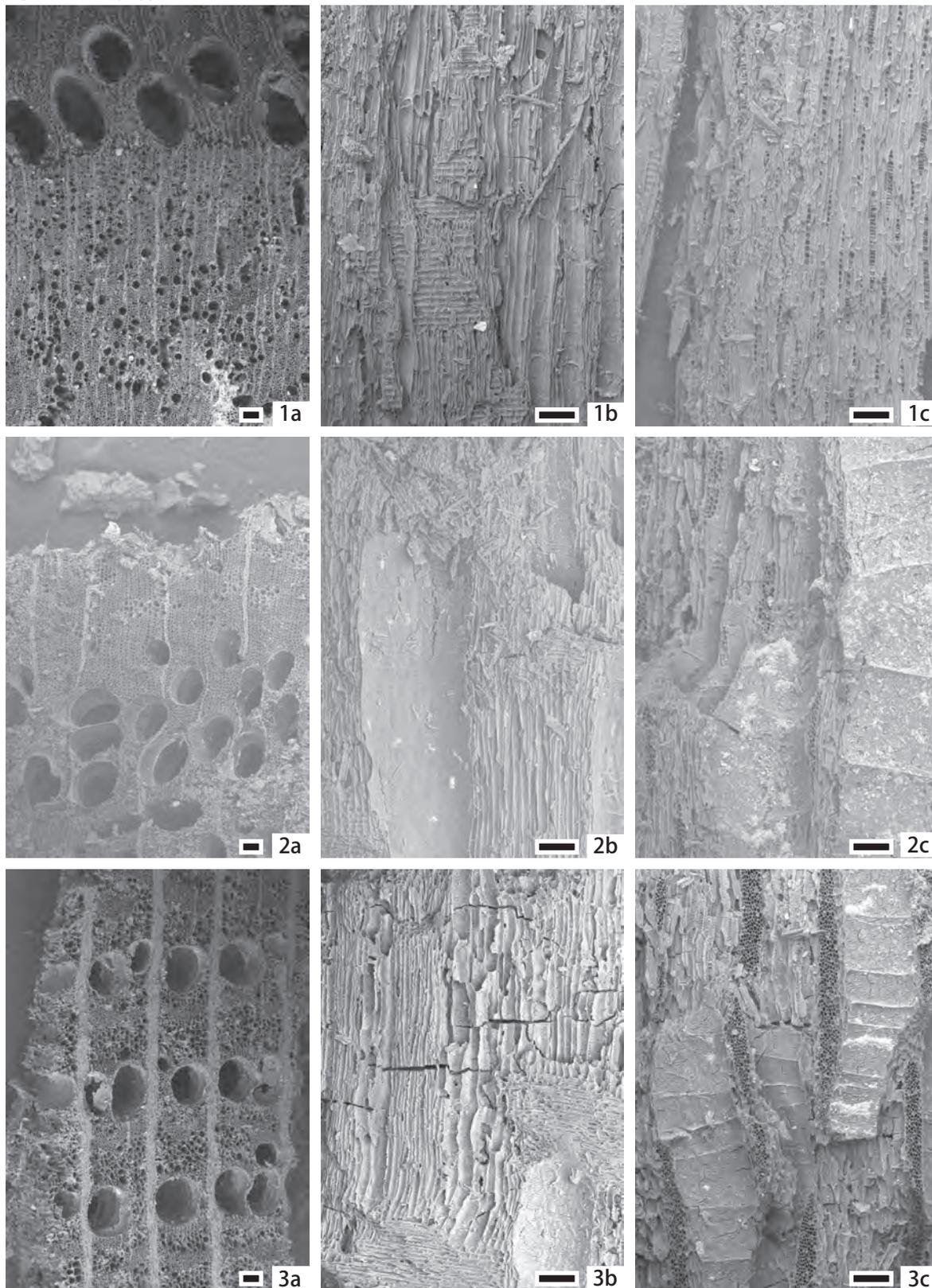
は堅く丈夫で木目が美しい良材であり、大きな木材が得やすいことから、建材、器具材、彫刻など様々な用途に用いられる。このように、クリとケヤキは住居構築材としては適しており、主要な構造材として使われていた可能性がある。クリは、コナラ節やクヌギ節などと共に人里に多い樹木で、里山林を構成する。里山林は、適度な伐採や粗朶の収奪などが行われることにより維持管理される森林(二次林)で、萌芽による更新が容易な陽樹で構成される。おそらく、当時の人里近くにこのような二次林が存在し、そこから木材を得ていたと思われる。また、ケヤキは、溪谷林や河畔林など湿ったところを好む傾向がある。遺跡の立地から、このような森林が近くに存在したと思われるため、比較的得やすい木材であったと考えられる。ヤマグワは、林縁や人里近くなど明るい林地を好むので、これもクリやケヤキと同様に入手しやすい木材であったと思われる。

今回検出された樹種は、ほとんどがクリとケヤキである。県内の古墳時代住居跡の出土材を木製品用材データベース(伊東・山田,2012)でみると、クリやケヤキはコナラ亜属(コナラ節、クヌギ節)などとともに住居構築材に多用されており、これまでの結果と調和的である。さらに細かくみると、県内の古墳時代住居跡において、住居構築材の樹種が1～2種類程度に揃っている例は、渋川市の白井北中道Ⅲ遺跡(高橋・馬場,2009)や前橋市の荒砥北三木堂Ⅱ遺跡(植田,2008)があり、ほとんどがコナラ亜属(コナラ節、クヌギ節)である。一方(旧)吾妻町の霜田遺跡(植田,2006)や渋川市中筋遺跡(高橋,1988)では、雑多な種類構成からなり、どちらかといえば周辺植生の樹種構成を反映している。このような差が出る原因は、建物の性格などに由来する可能性もあり、今後の課題である。なお、住居構築材が生材として検出されている元総社寺田遺跡(藤根・鈴木,1994)をみると、クリやコナラ亜属、ケヤキなど、重硬で太い木材が得られやすい種類を中心に、周辺に生育するような雑多な樹種も多くみられる。クリやコナラ亜属などの重硬な木材は、灰にならずに炭として残りやすいことから、焼失住居では、これらの樹種が相対的に残りやすい。このような木材の構造的理も、焼失住居の出土樹種が偏る原因の一つと考えられる。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所,81-181.
 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所,66-176.
 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.
 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.
 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.
 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社,449p.
 Richter H. G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P. E. (編),2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H. G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.
 高橋 敦・馬場健司,2009,白井北中道Ⅲ遺跡の古環境復元,「白井北中道Ⅲ遺跡(1) 一弥生時代以降編一 一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その2)報告書第5集」,(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第455集,国土交通省・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,217-226.
 植田弥生,2006,樹種同定,「霜田遺跡 一般県道川原畑大戸線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第363集,群馬県吾妻県民局中之条土木事務所・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,82-88.
 Wheeler E. A.,Bass P. and Gasson P. E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E. A.,Bass P. and Gasson P. E. (1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

写真1 炭化材



1. クリ(No.6)
2. クワ属(No.9)
3. ケヤキ(No.11)

a:木口 b:柁目 c:板目
スケールは100 μ m

第5章 総括

第1節 調査の成果

八幡原遺跡は、吾妻川や四万川が形成した河岸段丘面上の伊勢町I面の縁辺部に立地する。

調査では、旧石器は出土しなかったが、縄文時代の土坑8基・ピット3基・溝1条、弥生時代の土坑10基・ピット1基、古墳時代の竪穴建物8棟・ピット2基、古代以降の土坑3基・ピット4基・溝1条を確認した。

旧石器時代 4区でトレンチを2か所設定し、旧石器確認調査を行ったが、遺物は出土しなかった。

縄文時代 土坑8基、ピット3基、溝1条を検出した。このうち遺物を図示できた遺構は2号土坑のみで、有尾式深鉢の胴部片1である。遺構外からは、有尾式1、下島式3、十三菩提式1、前期末葉(型式不明)1が出土した。また、未掲載遺物は、黒浜・有尾式1、下島式1、前期中葉1である。遺跡周辺には、縄文時代の集落は確認されていない。

弥生時代 本遺跡からは、遺物は中期が最も多数出土し、4区からの遺物の約半数を占める。掲載遺物と未掲載遺物を時期別に集計すると、中期前半183点、樽式76点、後期43点、中期から後期98点の計400点であった。なお、遺構は土坑10基、ピット1基である。弥生時代中期の集落は周辺には存在しないが、後期になると諏訪前I遺跡や伊勢町地区遺跡群など急速に増加する。本遺跡からも樽式期や後期の弥生土器も約120点出土しており、遺跡の西の平坦部にも集落が存在した可能性も考えられる。

古墳時代 4世紀から5世紀中葉にかけての竪穴建物を8棟確認した。最も古い建物は、2号・5号竪穴建物で、いずれも4世紀に比定される。次に6号・7号竪穴建物が4世紀後半から5世紀初頭に比定される。そして、3号竪穴建物は、5世紀初頭から前半に比定される。8号建物からは内斜口縁の杯や甕などが出土し、5世紀前葉から中葉であると考えられ、最も新しい竪穴建物である。1号・4号竪穴建物については詳細な時期は不明であるが、埋没の状況や建物の新旧関係から4世紀代であろう。よって本遺跡の集落の変遷は第8表のとおりである。八

幡原遺跡は河岸段丘の縁辺部に位置するため、集落の中心は比較的平坦な西側に存在していたと考える。

古代以降 土坑3基、ピット4基、溝1条を検出した。遺構数、遺物量は弥生時代や古墳時代と比較すると大幅に少なかった。原町の諏訪前遺跡Iでは竪穴建物15棟が調査され、墨書土器が多数出土しているため、この時期の集落の中心は現在の群馬原町駅北側に存在していたであろう。

第8表 竪穴建物の時期

	4C	4C後～5C初	5C初～前半	5C前～中葉
1号竪穴建物	?			
2号竪穴建物				
3号竪穴建物				
4号竪穴建物	?			
5号竪穴建物				
6号竪穴建物				
7号竪穴建物				
8号竪穴建物				

第2節 2号竪穴建物出土炭化材

はじめに

本遺跡の2号竪穴建物の床面からは、大量の炭化材と焼土が出土している。これらのうち炭化材19点を樹種同定した結果、クリ11点、ケヤキ7点、クワ属1点であることが判明した。群馬県内では焼失建物の報告例が増えつつあり、「木の考古学(伊東・山田,2012)」には県内の住居跡の出土材が木製品用材データベースとしてまとめられている。本節では、過去に調査された遺跡から出土した炭化材樹種と八幡原遺跡から出土した炭化材を比較することにより、当時の植生を推測するものとする。

データの集計には、当事業団の発掘調査報告書を中心に、全国遺跡報告総覧に登録されている群馬県内の市町村の発掘調査報告書の炭化材樹種同定結果を使用した。総数は438棟である。時代の区分は、縄文時代71棟、弥生時代33棟、古墳時代215棟、奈良・平安時代119棟、各遺跡の標高は20mから771mの間である。

集計方法は、焼失建物1棟から出土したサンプルの点数を集計するのではなく、建物1棟から同じ樹種が複数出土した場合にも、それぞれ1と集計した。例えば、新田西沢遺跡(吾妻郡高山村)の1号竪穴建物では、168点のサンプルを分析し18種が同定されている。このうちフジキが92点検出されているが、この場合も1棟から1種とした。このように本報告の集計は、それぞれの樹種を1としてカウントして、焼失建物から検出された樹種数をまとめた。

群馬県の現在の植生と八幡原遺跡

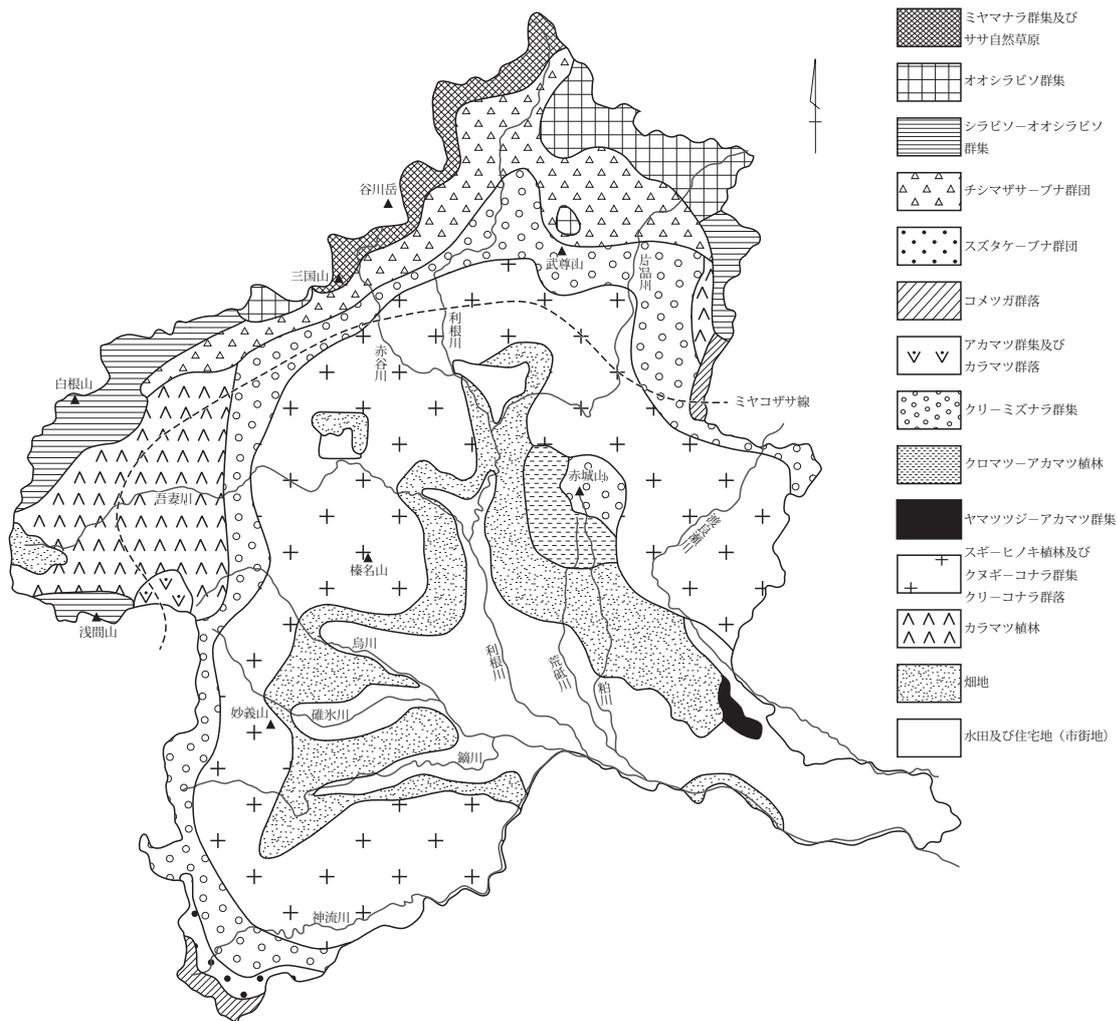
群馬県の現在の植生は、1987年の環境庁の植生調査報告書によると第43図のとおりである。標高600mまでの常緑広葉樹林帯では伐採等により原植生はほとんど見られない。標高600mから1500mまでの夏緑広葉樹林帯もほとんどの部分で伐採が進んでいるため、スギやヒノキ、カラマツなどの植林地や、ミズナラ林などになっている。

また、水田および住宅地(市街地)とされている地域は、明治10年代の調査によると、県内で最も標高の低い板倉町から伊勢崎市境町付近はマツ林およびナラ・クヌギ林、伊勢崎市・前橋市・高崎市付近はナラ・クヌギ林が分布していたことが報告されている。

八幡原遺跡は標高370mに位置し、現在の植生はスギーヒノキ植林およびクヌギーコナラ群集、クレーコナラ群落に属している。

焼失建物の炭化樹種の傾向

県内の縄文時代から奈良・平安時代かけての焼失建物438棟から出土した樹種は、84種におよぶ。これらの上位10種は、クリ、クヌギ節、コナラ節、ケヤキ、タケ垂属、モミ、カエデ属、サクラ属、アカガシ垂属、ニレ属である(第44図)。以下、ヤマグワ、ヤナギ属、ケンボナシ属、コナラ属、イヌシデ節、カヤ属、クワ属、ススキ属、ヌルデ、クマシデ節と続いている。



第43図 群馬県の植生(環境庁1987『植生調査報告書』図1を再トレースして使用)

標高別の樹種の傾向(第46図)

植生を検討する上で、438棟の焼失建物を標高別に分類した。各標高の棟数は、20m以上100m未満が85棟、100m以上200m未満が155棟、200m以上300m未満が99棟、300m以上400m未満が53棟、400m以上が46棟である。

標高20m以上100m未満では建物85棟から28種類の炭化材が検出され、クヌギ節が全体の約8割の63棟を占めている。コナラ節、クリがこれに続く。

標高100m以上200m未満では建物155棟から67種類の炭化材が検出された。棟数、樹種ともにこの範疇に属するものが最も多い。上位3種は、クヌギ節64棟、クリ49棟、コナラ節40棟であり、ケヤキ、タケ亜科、モミ、カエデ属、サクラ属、アカガシ亜属などがそれぞれ15棟前後から検出されている。

標高200m以上300m未満では、101棟の建物から43種が検出された。クヌギ節がやや減り、クリとコナラ節が目立つ。カエデ属、アカガシ亜属も減少傾向にある。

標高300m以上400m未満の53棟から31種類確認された。このうち36棟からクリが検出されているが、他の樹種はすべて10棟未満である。

標高400m以上の焼失建物46棟から43種類が検出された。このうちクリの検出が29棟と最も多く、コナラ節やニレ属などの比率も高い。

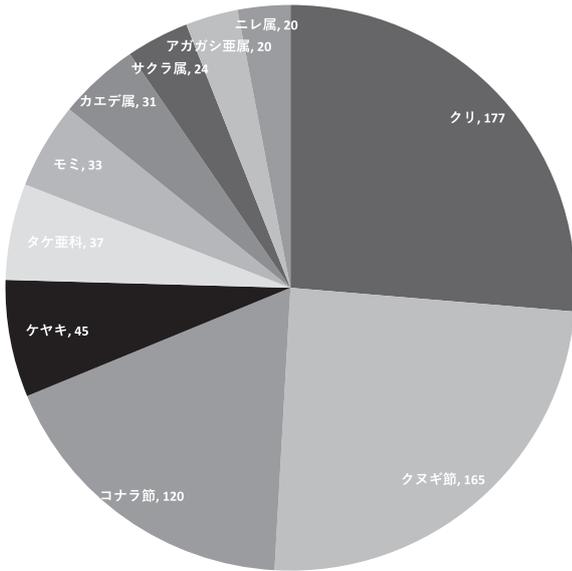
八幡原遺跡の周辺環境のまとめ

古墳時代の遺跡で標高が300m以上で、焼失建物からクリが検出された例は、八幡原遺跡・厚田中村遺跡・四戸遺跡・霜田遺跡(以上、東吾妻町)、生品西浦Ⅱ遺跡(利根郡川場村)の5遺跡であり、生品西浦Ⅱ遺跡以外はすべて東吾妻町である。クリは県内で最も多く検出された樹種であり、東吾妻町周辺にも豊富に分布していたと考えられる。

同様の条件で、焼失建物からケヤキが検出されたのは八幡原遺跡のみである。県内の現在の植生によると、ケヤキは通常300m未満に多く分布している。古墳時代の焼失建物のうち、ケヤキが検出されたのは11棟あり、長谷津遺跡(安中市)の建物が標高約250mと最も高い。

以上のことから、標高367mの八幡原遺跡の2号竪穴建物からケヤキが検出されたことは、貴重な例と言える。

時間と紙面の都合上、吾妻郡長野原町・安中市・高崎市・館林市・前橋市の一部の遺跡と事業団調査遺跡の焼



第44図 群馬県焼失建物出土の炭化樹種上位10種

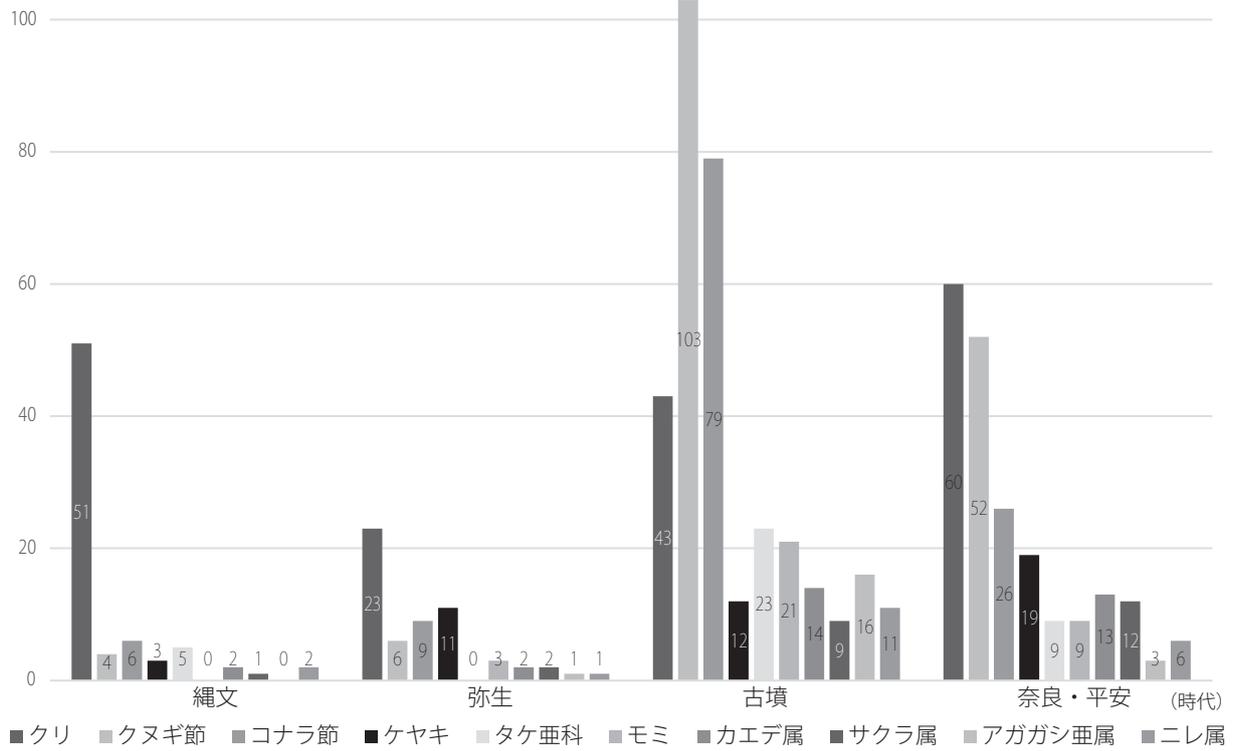
各時代の焼失建物の炭化材樹種(第45図)

縄文時代の焼失建物は71棟で、18種類の樹種が検出された。最も多かったのはクリの51棟で全体の約70%にあたる。このほかには、コナラ節やタケ亜属などが確認されているがいずれの樹種も1ヶ台と検出例は少ない。この時代の1棟あたりの平均は1.27であり、焼失建物から検出される樹種は単一である傾向がみられる。

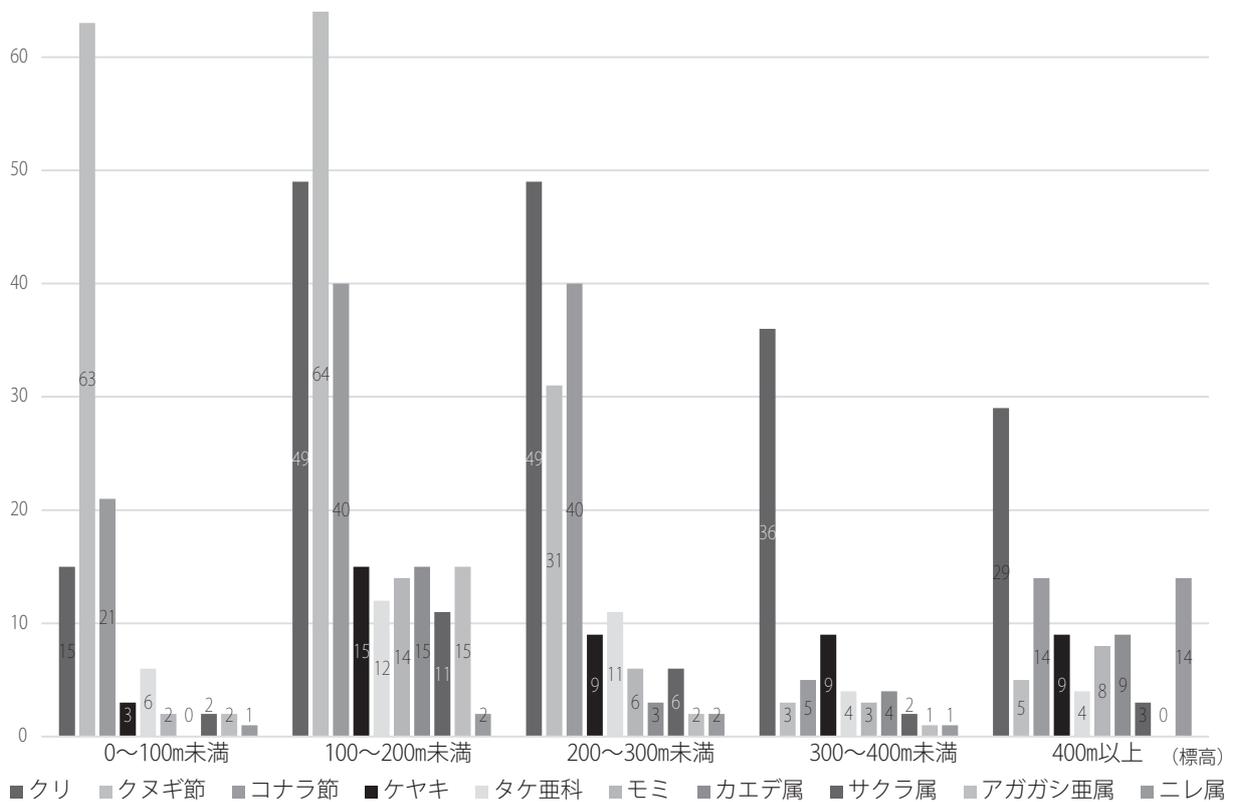
弥生時代の焼失建物は33棟と検出例は他の時代と比べて少なかったが、樹種は28とやや増加している。最も多かったのはクリの23棟で、コナラ節、ケヤキ、クヌギ節などが続く。上位4種以外の炭化材が出土した建物は少ない。なお、1棟あたりで使用される樹種の平均は、2.55である。

古墳時代の焼失建物からの炭化物検出例は215棟と飛躍的に増加し、確認された樹種は64種類にのぼる。最も多い樹種はクヌギ節103棟、次いでコナラ節79棟、クリ43棟、タケ亜属、モミ、カエデ属、ニレ属などが増加している。縄文・弥生時代にさかんに使用されていたクリの占める割合が低下していて、1棟あたりの使用樹種も2.38と弥生時代より低くなっている。

奈良・平安時代の焼失建物は120棟である。再びクリの検出例が多くなり、コナラ節の割合が低下している。検出された樹種は65種類で、1棟あたりの平均は2.99と全時代を通じて最も高くなっている。



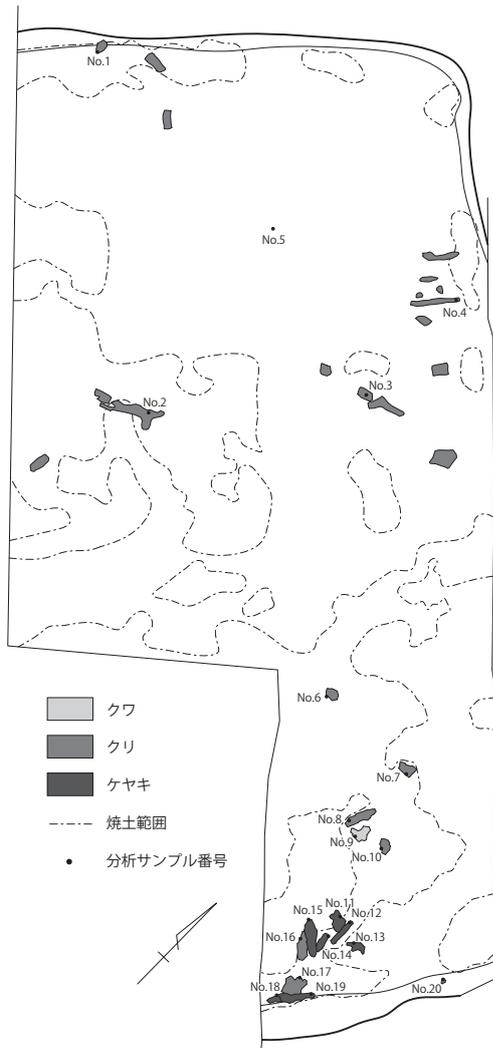
第45図 焼失建物出土樹種(縄文から奈良・平安時代)



第46図 焼失建物出土樹種(標高別)

失建物から出土した炭化材しか集計できなかった。また、本来ならば気候変動による変化を考慮したうえで標高別に集計する必要がある。

今回の集計に含められなかった県内市町村の炭化材の樹種同定資料も集計したうえで再考する必要があるが、八幡原遺跡の樹種同定結果が東吾妻町の古代植生を検討する上での一助となれば幸いである。



第47図 2号竪穴建物炭化材出土状況

参考文献

伊藤隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学』

小椋純一 1994 「明治10年代における関東地方の森林景観」『造園雑誌』57

環境庁 1987 『植生調査報告書』(群馬県)

吾妻郡長野原町教育委員会 2022 『林中原Ⅰ遺跡XV』

吾妻郡長野原町教育委員会 2023 『林中原Ⅰ遺跡』

勢多郡大胡町教育委員会 1997 『堀越中道遺跡』

勢多郡粕川村教育委員会 1994 『長岡遺跡』

勢多郡粕川村教育委員会 1996 『湯之口遺跡』

高崎市教育委員会 2019 『棟高南八幡街道遺跡3』

館林市教育委員会 1994 『大袋4遺跡・大袋城遺跡』

前橋市教育委員会 2021 『上泉下中峯遺跡』

前橋市教育委員会 2021 『荻窪倉兼Ⅲ遺跡』

前橋市教育委員会 2023 『元総社蒼海遺跡群(143)』

前橋市教育委員会 2024 『上細井中西部遺跡群』

松井田町遺跡調査会 1997 『松井田町内関越自動車道(上越線)関連遺跡自然科学分析編』

松井田町教育委員会 2001 『人見中の條・人見中の條2遺跡・人見大王子・人見正寺田遺跡』

安中市教育委員会 1990 『三本木遺跡・落合遺跡』

安中市教育委員会 2004 『天神林遺跡・砂押Ⅲ遺跡・大道南Ⅱ遺跡・向原Ⅱ遺跡』

安中市教育委員会 2014 『西横野東部地区遺跡群』

安中市教育委員会 2016 『落合Ⅱ遺跡・三本木Ⅱ遺跡・三本木Ⅲ遺跡・平塚遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 『糸井宮前遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988 『勝保沢中ノ山遺跡(1)』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989 『田篠上平遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992 『新保田中村前遺跡Ⅱ』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992 『内匠諏訪前・日影周地遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993 『五日牛清水田遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993 『下川田下原・下川田平井遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994 『善慶寺早道場遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994 『白井遺跡群(集落編Ⅰ)、二位屋遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994 『南蛇井増光寺遺跡Ⅲ』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994 『善慶寺早道場遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995 『行力春名社遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995 『今井道上・道下遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996 『白井遺跡群(集落編Ⅱ)、南中道』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996 『天引狐崎遺跡Ⅱ』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997 『中宿在家、上豊岡一里塚遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997 『矢田遺跡Ⅶ』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997 『白倉下原天引向原遺跡Ⅳ』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997 『白倉下原天引向原遺跡Ⅴ』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998 『下東西清水上遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998 『田篠塚原遺跡・福島駒形遺跡・福島鹿嶋下遺跡・福島椿森遺跡 <本文編>』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998 『冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金古北十三町遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999 『下植木壺町田遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999 『小八木志志貝戸遺跡群Ⅰ』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000 『三ツ子沢中遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000 『三ツ木皿沼遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000 『長久保大畑遺跡・新田入口遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000 『馬場東矢次Ⅱ遺跡・新川籾木遺跡・井出二子山古墳・保渡田八幡塚古墳』

第5章 総括

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2001	『小八木志貝戸遺跡群2』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2013	『深沢Ⅱ遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2001	『愛宕山遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2013	『長野原一本松遺跡(6)』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2001	『亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2013	『上細井蟬山遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2001	『波志江中野面遺跡(1)』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2013*	『十日市遺跡・住遺跡・千代開南遺跡・千代開北遺跡・舞台遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2001	『西善尺司遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2013	『綿貫伊勢遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2001	『石墨遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2014	『横壁中村遺跡(14)』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2002	『波志江西宿遺跡Ⅰ・伊勢山遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2014	『四万遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2003	『波志江西屋敷遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2015	『石神遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2003	『元総社西川遺跡・塚田中原遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2015	『関根細ヶ沢遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2004	『新田西沢遺跡・新田平林遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2016	『山王・柴遺跡群』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2004	『萩原遺跡・新井太田関遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2016	『今宮遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2005	『今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡 縄文時代編』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2017	『茅畑遺跡・嶋上Ⅰ遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2005	『西大室上諏訪遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2017	『田口下田尻遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2005	『中内村前遺跡(3)』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2019	『金井東裏遺跡《古墳時代編》』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2005	『生品西浦遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2020	『四戸遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2005	『東峰須川雷電遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2020	『石川原遺跡(2)』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2005	『泉沢谷津遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2021	『金井下新田遺跡《古墳時代以降編》 分析・論考編』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2006	『霜田遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2022	『新井遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2006	『中郷恵久保遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2023	『厚田中村遺跡(2)』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2006	『今井道上Ⅱ遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2024	『多田山東遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2006	『江木下大日遺跡』	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2024	『南蛇井北原田遺跡・蚊沼大神分遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2006	『富田細田遺跡・富田宮下遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2006	『下原遺跡Ⅱ』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2007	『萱野Ⅱ遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2007	『吹屋遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2007	『長野原一本松遺跡(2)』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2007	『中郷田尻遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2007	『塚下遺跡(2)・上柳沢遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2008	『荒砥北三木堂Ⅱ遺跡縄文時代～近代編』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2008	『成塚向山古墳群』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2008	『楡木Ⅱ遺跡(1)(平安時代・中近世編)』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2008	『堤沼上遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2008	『亀泉坂上遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2009	『白井北中道Ⅲ遺跡(1) 一弥生時代以降編一』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2009	『長野原一本松遺跡(5)』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2009	『生品西浦遺跡Ⅱ』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2009	『細谷B遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2009	『荒砥前田Ⅱ遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2010	『中郷遺跡(2)一旧石器・縄文時代編一』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2010	『富田西原遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2010	『西野原遺跡(5)(7)』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2010	『上泉唐ノ堀遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2011	『阿久津遺跡・万蔵寺廻り遺跡・桑原田遺跡・十二廻り遺跡・中町遺跡・半田常法院遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2012	『田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2012	『鳥取松合下・胴城遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2012	『中西原遺跡』			
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2012	『長谷津遺跡』			
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2012	『上泉武田遺跡一縄文時代以降編』			
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	2013	『芳賀東部団地 縄文時代以降編』			

第9表 竪穴建物計測表

遺構	時代	X座標	Y座標	主軸方位	規模			
					床面積(m ²)	長軸(m)	短軸(m)	壁高(m)
1号竪穴建物	古墳前期	65,210・65,211	-90,356・-90,357	N-9°-E	0.528+	0.48+	0.63+	0.45
2号竪穴建物	4世紀代	65,198~65,206	-90,340~-90,350	N-42°-E	40.464+	10.69	5.11+	0.48
3号竪穴建物	5世紀初頭~前半	65,241~65,247	-90,383~-90,389	N-43°-E	14.624+	5.53+	2.98+	0.30
4号竪穴建物	4世紀以降	65,235~65,241	-90,376~-90,381	N-48°-E	10.264+	5.96	2.00+	0.23
5号竪穴建物	4世紀代	65,232~65,240	-90,373~-90,382	N-45°-E	27.555+	9.20	3.33+	0.38
6号竪穴建物	4世紀後半~5世紀初頭	65,277~65,283	-90,416~-90,421	N-29°-E	14.552+	5.83	2.68+	0.48
7号竪穴建物	4世紀後半~5世紀初頭	65,283~65,287	-90,422~-90,426	N-40°-E	8.48+	4.59	2.18+	0.53
8号竪穴建物	5世紀前半~中葉	65,275~65,279	-90,414~-90,419	N-39°-E	8.768+	4.31	2.19+	0.17

第10表 土坑計測表

遺構名称	時代	X座標	Y座標	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形	断面形
1号土坑	縄文	65,169~65,171	-90,299・-90,300	N-48°-W	1.80+	0.61+	0.38	(楕円形)	逆三角形
2号土坑	縄文	65,167・65,168	-90,289・-90,290	N-57°-W	1.47	1.04	0.15	楕円形	台形
3号土坑	縄文	65,166・65,167	-90,287・-90,288	N-38°-W	1.06	0.91	0.21	楕円形	台形
4号土坑	古代以降	65,167	-90,285・-90,286	N-47°-E	0.91	0.90	0.13	楕円形	台形
5号土坑	弥生	65,162・65,163	-90,283	N-5°-W	0.71	0.55	0.12	楕円形	逆三角形
6号土坑	古代~中世	65,166・65,167	-90,281・-90,282	N-20°-E	0.69+	1.21	0.77	(楕円形)	台形
7号土坑	古代以降	65,163・65,164	-90,273・-90,274	N-70°-W	1.18	0.47+	0.47	(楕円形)	台形
8号土坑	弥生	65,149	-90,252・-90,253	N-64°-W	1.01	0.74	0.13	楕円形	台形
9号土坑	弥生	65,150	-90,253	N-27°-E	0.88	0.73	0.20	楕円形	不整形
10号土坑	弥生	65,151・65,152	-90,254・-90,255	N-1°-W	0.73	0.51	0.41	楕円形	台形
11号土坑	弥生	65,151・65,152	-90,255~-90,257	N-68°-W	1.67	1.29	0.30	楕円形	逆三角形
12号土坑	弥生	65,151	-90,255	N-62°-W	(0.93)	0.65	0.20	(楕円形)	(台形)
13号土坑	弥生	65,152・65,153	-90,256~-90,258	N-87°-W	1.33	0.94	0.26	楕円形	台形
14号土坑	縄文	65,152・65,153	-90,258・-90,259	N-31°-E	0.56	0.50	0.13	楕円形	台形
15号土坑	弥生	65,153・65,154	-90,259・-90,260	N-55°-W	1.46	0.93	0.40	楕円形	台形
16号土坑	縄文	65,154・65,155	-90,261・-90,262	N-36°-E	0.91	0.81	0.56	楕円形	不整形
17号土坑	弥生	65,155・65,156	-90,261	N-39°-E	0.97	0.74	0.53	楕円形	台形
18号土坑	縄文	65,155	-90,256	N-7°-W	0.63	0.61	0.18	楕円形	台形
19号土坑	縄文	65,155・65,156	-90,256・-90,257	N-51°-W	1.05	0.88	0.21	楕円形	不整形
20号土坑	弥生	65,157・65,158	-90,261・-90,262	N-4°-W	0.50	0.46	0.21	楕円形	逆三角形
21号土坑	縄文	65,158・65,159	-90,261・-90,262	N-59°-W	0.51	0.50	0.21	楕円形	台形

第11表 ピット計測表

遺構	時代	X座標	Y座標	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形	断面形
1号ピット	中世以降	65,214	-90,356	N-70°-W	0.42	0.39	0.13	隅丸長方形	台形
2号ピット	古代以降	65,189・65,190	-90,331	N-32°-E	0.60	0.50	0.21	楕円形	不整形
3号ピット	古代以降	65,190・65,191	-90,331	N-30°-E	0.44	0.42	0.10	楕円形	逆三角形
4号ピット	古代以降	65,190・65,191	-90,332	N-49°-W	0.45	0.42	0.21	楕円形	台形
5号ピット	古墳	65,199・65,200	-90,341	N-30°-E	0.27	0.24	0.21	楕円形	台形
6号ピット	古墳	65,271・65,272	-90,412	N-41°-E	0.32	0.28	0.07	楕円形	台形
7号ピット	縄文	65,165	-90,282	N-7°-W	0.24	0.20	0.25	楕円形	逆三角形
8号ピット	弥生	65,153	-90,256・-90,257	N-67°-E	0.35	0.28	0.17	隅丸長方形	台形
9号ピット	縄文	65,151	-90,257・-90,258	N-77°-W	0.36	0.35	0.19	隅丸方形	台形
10号ピット	縄文	65,158・65,159	-90,262	N-86°-E	0.37	0.30	0.20	隅丸三角形	逆三角形

第12表 溝計測表

遺構	時代	X座標	Y座標	主軸方位	調査長(m)	最大幅(m)	最深(m)	断面形
1号溝	古代以降	65,208~65,356	-90,352~-90,356	N-58°-W(北西から南東)	4.45+	0.53	0.22	台形
2号溝	縄文	65,163~65,166	-90,280~-90,282	N-38°-E(北東から南西)	3.5+	0.80	0.40	V字状

写真図版



1 八幡原遺跡 1区西側全景(南東より)



2 八幡原遺跡 1区東側全景(北西より)



1 八幡原遺跡 2区全景(南東より)



2 八幡原遺跡 3区全景(北西より)



1 八幡原遺跡 4区東側全景(北西より)



2 八幡原遺跡 4区西側全景(北西より)

PL.4



1 1区基本土層(南西より)



2 2区基本土層(南西より)



3 4区基本土層A-A'(北東より)



4 4区基本土層B-B'(北東より)



5 4区基本土層C-C'(北東より)



6 4区旧石器1号トレンチA-A'(北東より)



7 4区旧石器1号トレンチ全景(北東より)



8 1号土坑全景(北東より)



1 2号土坑土層断面(南西より)



2 2号土坑全景(南西より)



3 3号土坑土層断面(南西より)



4 3号土坑全景(南西より)



5 14号土坑土層断面(北東より)



6 14号土坑全景(北東より)



7 16号土坑土層断面(南東より)



8 16号土坑全景(北より)

PL.6



1 18号土坑土層断面(南西より)



2 18号土坑全景(南西より)



3 19号土坑土層断面(南より)



4 19号土坑全景(南より)



5 21号土坑土層断面(南より)



6 21号土坑全景(南東より)



7 7号ピット土層断面(南西より)



8 7号ピット全景(南西より)



1 9号ピット土層断面(南東より)



2 9号ピット全景(北より)



3 10号ピット土層断面(南より)



4 10号ピット全景(北より)



5 2号溝土層断面(南西より)



6 2号溝全景(南より)



7 5号土坑土層断面(北東より)



8 5号土坑全景(南より)



1 8号土坑土層断面(北東より)



2 8号土坑全景(北東より)



3 9号土坑土層断面(南東より)



4 9号土坑全景(南東より)



5 10号土坑土層断面(北より)



6 10号土坑全景(東より)



7 11号土坑全景(北東より)



8 12号土坑全景(北東より)



1 13号土坑土層断面(北より)



2 13号土坑全景(北より)



3 15号土坑土層断面(北東より)



4 15号土坑全景(北東より)



5 17号土坑土層断面(南東より)



6 17号土坑全景(北東より)



7 20号土坑土層断面(南より)



8 20号土坑全景(南より)



1 8号ピット土層断面(北より)



2 8号ピット全景(北より)



3 1号竪穴建物土層断面A-A'(北東より)



4 1号竪穴建物掘方全景(北東より)



5 1号竪穴建物全景(北東より)



1 2号竪穴建物東側 焼土・炭化材出土状況(北西より)



2 2号竪穴建物西側全景及び土層断面A-A'(南西より)



3 2号竪穴建物土層断面B-B'(南東より)



4 2号竪穴建物土層断面C-C'(北東より)



5 2号竪穴建物東側全景(北西より)



1 2号竪穴建物西側掘方全景(北西より)



2 2号竪穴建物貯蔵穴 土層断面及び遺物出土状態No.3(南東より)



3 2号竪穴建物東側掘方全景(南西より)



4 2号竪穴建物東側掘方全景(北西より)



5 2号竪穴建物調査風景(南東より)



1 3号竪穴建物全景(北東より)



2 3号竪穴建物土層断面A-A'(南東より)



3 3号竪穴建物 1号炉全景(北東より)



4 3号竪穴建物土層断面B-B'(南東より)



5 3号竪穴建物掘方全景(南東より)



1 4号竪穴建物全景(北西より)



2 4号竪穴建物土層断面A-A'(北西より)



3 4号竪穴建物掘方全景(北西より)



4 5号竪穴建物土層断面A-A'(西より)



5 5号竪穴建物土層断面B-B'(南東より)



1 5号竪穴建物全景(北西より)



2 5号竪穴建物 1号炉土層断面(南東より)



3 5号竪穴建物 P1土層断面E-E'(南西より)



4 5号竪穴建物 P2土層断面F-F'(南西より)



5 5号竪穴建物掘方全景(北西より)



1 6号竪穴建物全景(北西より)



2 6号竪穴建物土層断面A-A'(北東より)



3 6号竪穴建物 1号炉全景(南西より)



4 6号竪穴建物 貯蔵穴土層断面A-A'(北東より)



5 6号竪穴建物 P1土層断面B-B'(南西より)



1 7号竪穴建物全景(北西より)



2 7号竪穴建物土層断面A-A'(北東より)



3 7号竪穴建物 炉土層断面(南東より)



4 7号竪穴建物 P1土層断面B-B'(南西より)



5 7号竪穴建物 P2土層断面B-B'(南西より)



1 8号竪穴建物全景(南西より)



2 8号竪穴建物遺物出土状態(南西より)



3 8号竪穴建物西側遺物出土状態(南西より)



4 8号竪穴建物掘方全景(南西より)



5 8号竪穴建物掘方全景(南東より)



1 5号ピット全景(南より)



2 6号ピット土層断面(北東より)



3 4号土坑土層断面(南西より)



4 4号土坑全景(南西より)



5 6号土坑土層断面(南西より)



6 7号土坑土層断面(南西より)



7 1号ピット土層断面(南より)



8 1号ピット全景(南より)



1 2号ピット全景(北西より)



2 3号ピット土層断面(北西より)



3 3号ピット全景(北西より)



4 4号ピット土層断面(北西より)



5 4号ピット全景(北西より)



6 1号溝土層断面(南東より)



7 1号溝全景(南東より)

2号土坑



1

10号土坑



2

9号土坑



1

11号土坑



3



4



5



6



7



8

15号土坑



9

17号土坑



10

20号土坑



11

1号竖穴建物



1



2



3

2号竖穴建物



1



2



3



4



5



10



11



12



13



14



15



16

PL.22

3号竖穴建物



2



3



4



6



9

4号竖穴建物



1



2



3



5号竖穴建物



1



6



7



8



9



10



11



12

6号竖穴建物



2



4



8



11



12



13



14

3号竖穴建物～6号竖穴建物出土遺物

7号竖穴建物



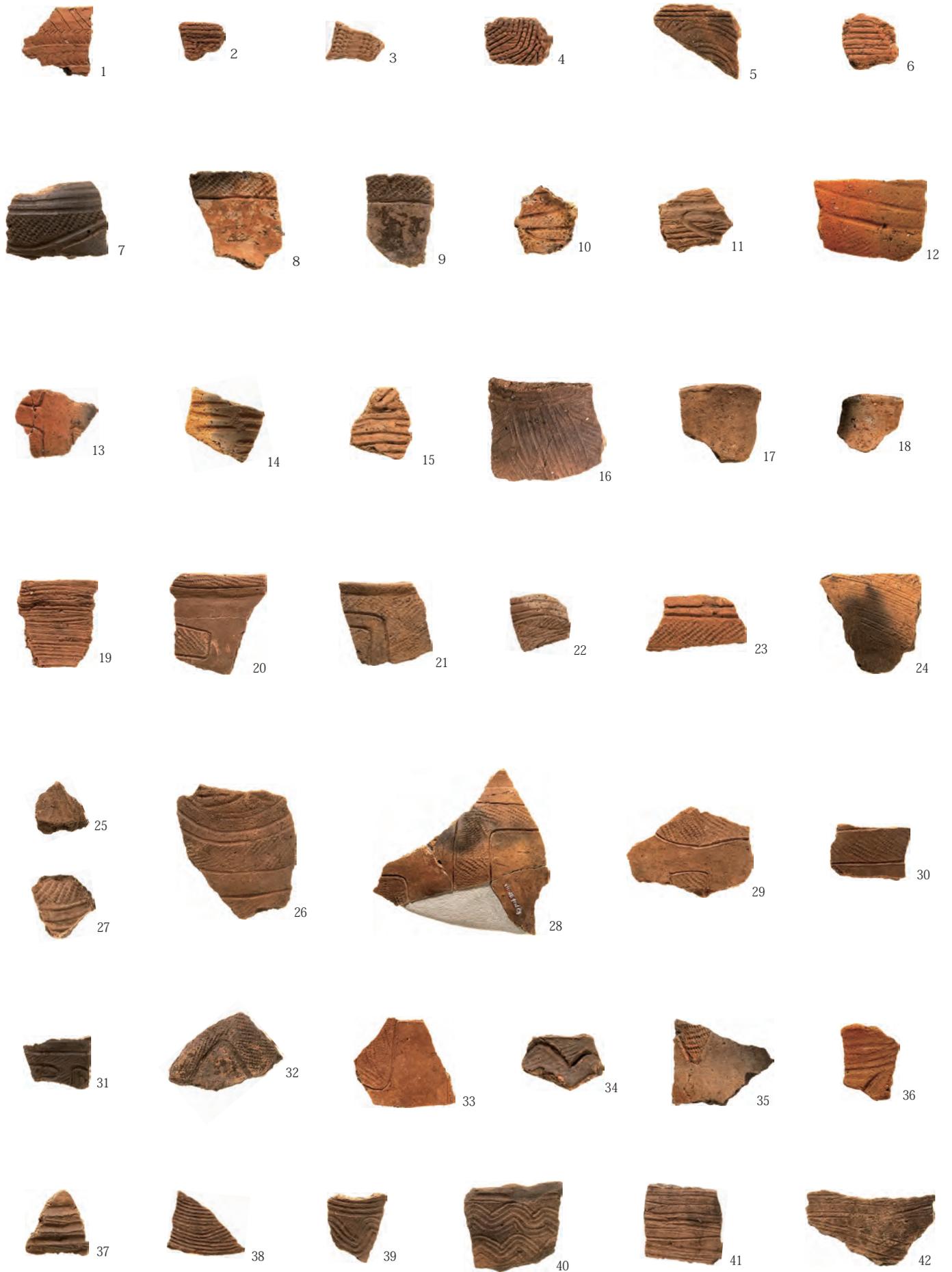
8号竖穴建物



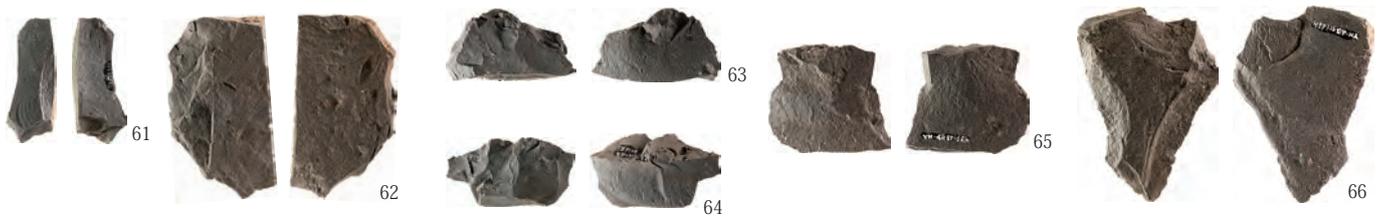
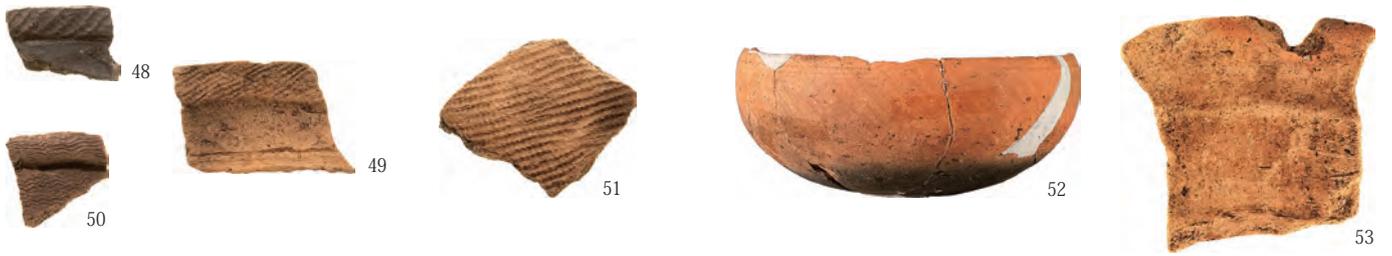
7号竖穴建物・8号竖穴建物出土遺物

PL.24

遺構外



遺構外出土遺物(1)



遺構外出土遺物(2)

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	やわたばらいせき
書 名	八幡原遺跡
副 書 名	(一)下沢渡原町線(原町Ⅱ期工区)単独道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	—
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	748
編 著 者 名	齊田智彦
編 集 機 関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発 行 機 関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発 行 年 月 日	20241122
作成法人 I D	21005
郵 便 番 号	377-8555
電 話 番 号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	やわたばらいせき
遺 跡 名	八幡原遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんひがしあがつままちほらまち
遺 跡 所 在 地	群馬県吾妻郡東吾妻町原町
市町村コード	10429
遺 跡 番 号	43-212
北緯(世界測地系)	363459
東経(世界測地系)	1384926
調 査 期 間	20210701-20210731/20220801-20220831/20230601-20230630
調 査 面 積	1378.31
調 査 原 因	道路建設
種 別	集落
主 な 時 代	縄文/弥生/古墳/古代
遺 跡 概 要	集落-縄文-土坑8+ピット3+溝1-縄文土器+石器/集落-弥生-土坑10+ピット1-弥生土器+石器/集落-古墳-竪穴建物8+ピット2+土師器/集落-古代・中世-土坑3+ピット4+溝1+須恵器+土師器
特 記 事 項	弥生時代中期前半から後期にかけての土坑と古墳時代の竪穴建物を検出した。
要 約	本遺跡は、吾妻川と四万川によって形成された河岸段丘西上に立地する。弥生時代中期の土坑と古墳時代前期から中期にかけての竪穴建物が調査された。2号竪穴建物から出土した炭化材はクリ・ケヤキなどであった。標高300m以上に位置する古墳時代の焼失建物からケヤキが出土することは稀有である。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第748集

八幡原遺跡

(一)下沢渡原町線(原町Ⅱ期工区)単独道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

令和6(2024)年11月20日 印刷

令和6(2024)年11月22日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／ジャーナル印刷株式会社

